

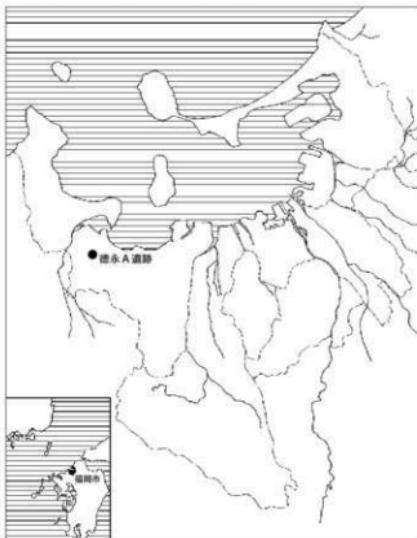
とくなが
徳永A遺跡5

－第5次・6次・7次調査の報告（1）－

2013
福岡市教育委員会

とく なが
徳永 A 遺跡 5

－第5次・6次・7次調査の報告（1）－



遺跡略号 TOA-5 TOA-6 TOA-7
調査番号 0932 1115 1127

2013
福岡市教育委員会



1. 今宿平野（西から 線の交点付近が調査地点）



2. 5次調査南部(I ~ IV区1面)(東から)

巻頭図版 2



1. 5次調査南部（I～IV区2面）周辺（北から）



2. 5次調査北部（V・VI区2面）周辺（北から）



1. 鋼冶炉 SL505 (東から)



2. 鋼冶炉 SL604 (東から)

巻頭図版 4



1. 火葬墓 ST302 (東から)



2. 石組塚 SL460 (SI1) (南から)

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならずわが国のかけがえのない財産でありますか、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書は西区の伊都土地区画整理事業に伴い実施した徳永A遺跡第5・6・7次調査の成果を報告するものです。徳永A遺跡は国道202号線今宿バイパス関係の発掘調査を嚆矢として、古墳時代から中世の集落跡などが発見されていますが、中でも平安時代は大宰府が管轄する主船司に関連する遺跡として注目されてきた遺跡です。

本書で報告する調査では、古墳時代後期から中世の集落関連遺構や水田関連遺構のほか、平安時代の鍛冶炉や火葬墓といった特異な遺構もみつかっています。また、石製丸瓶や多数の怡土城系瓦の出土など、遺跡の性格を考えるうえで、非常に重要な成果をあげることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例　言

- 本書は福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い行った徳永A遺跡第5次・6次・7次調査の発掘調査報告書である。5次と7次調査については、遺物整理を継続中であり、本書では遺構の報告を主とする。遺物の詳細については平成25年度に報告の予定である。
- 徳永A遺跡第5次・7次の調査と整理は森本幹彦が、第6次の調査と整理は板倉有大が担当した。実測・撮影等の作業を行った者は以下の通りである。
遺構実測:5次森本の他、角信喜（元・東海大学学生）、梅野眞澄、瀬戸啓治、辻節子、時吉ひとみ、深溝嘉江、三谷朗子（発掘作業員） 6次板倉 7次森本、瀬戸、上野道郎（発掘作業員）
遺構実測図製図:5・7次森本、6次板倉
遺構撮影:5・7次森本、6次板倉
空中写真撮影:空中写真企画
室内整理作業:5・7次篠田千恵子、下山慎子、田中ヤス子、八木一成 6次副田則子（整理補助員）
遺物の実測・製図:5・7次森本、熊塙御堂和香子（技能員） 6次板倉、副田
遺物の撮影:6次板倉
鍛冶炉（5次調査）の切り取り、金属器の保存処理、玉類・石器の材質分析:田上勇一郎、上角智希、西澤千絵里（埋蔵文化財センター）
- 本書の記述はI・II・III・V章を森本、IV章を板倉が行った。編集は森本が行った。
- 発掘調査から報告書作成に至る過程で、次の方々から指導及び援助を得た。記して感謝いたします（敬称略）。
江野道和、岡部裕俊（伊都国歴史資料館）、大澤正己（九州テクノリサーチセンター）、篠田朋孝（愛媛大学）、高橋克壽（花園大学）、中村勝
- 各調査の基準座標は国上座標（日本測地系）で、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点を使用した。座標北は真北より0°19'西偏する。本書で用いている方位記号は全て座標北である。
- 本報告の出土資料および記録類は平成26年度に埋蔵文化財センターで収蔵保管する予定である。

徳永A遺跡 第5次調査		遺跡調査番号	0932
地　　番	福岡市西区徳永字松尾 700-5 他	遺　跡　略　号	TOA-5
分布地図番号	120 周船寺	調　査　面　積	4700m ²
調　査　期　間	2010（平成22）年1月4日～2011（平成23）年4月1日		

徳永A遺跡 第6次調査		遺跡調査番号	1115
地　　番	福岡市西区徳永字松尾 688-1 他	遺　跡　略　号	TOA-6
分布地図番号	120 周船寺	調　査　面　積	105m ²
調　査　期　間	2011（平成23）年7月12日～2011（平成23）年7月22日		

徳永A遺跡 第7次調査		遺跡調査番号	1127
地　　番	福岡市西区徳永字松尾 681-1 他	遺　跡　略　号	TOA-7
分布地図番号	120 周船寺	調　査　面　積	657m ²
調　査　期　間	2011（平成23）年9月20日～2011（平成23）年11月22日		

本文 目次

I.はじめ	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境	3
III. 第5次調査の報告	
1. 調査の概要	7
2. 調査の記録	
1) 平安時代から中世の水田関連遺構	19
2) 平安時代の遺構	22
3) 古墳時代の遺構	32
4) 出土遺物の概要	51
IV. 第6次調査の報告	
1. 調査に至る経緯	73
2. 調査の方法および経過	73
3. 調査の記録	
1) 調査の概要	
2) 遺構と遺物	
4. 小結	75
V. 第7次調査の報告	
1. 調査の概要	77
2. 調査の記録	
1) 平安時代から中世の遺構	77
2) 古墳時代の遺構	79
Tab.1 徳永A遺跡調査一覧	5
Tab.2 5次調査主要遺構一覧	11
Tab.3 第6次調査出土遺物	75

挿図目次

Fig.1	今宿平野の遺跡分布 (1/25000) …… 2
Fig.2	徳永A 遺跡調査地点と周辺 (1/1000) 6
Fig.3	第5次調査区 平安時代から中世の主な 遺構 (1/600) 8
Fig.4	第5次調査区 古墳時代後期の主な遺 構 (1/600) 9
Fig.5	調査の区割り (1/1000) 10
Fig.6	調査区南部 (II・IV区) 第1面遺構実 測図 (1/200) 12
Fig.7	調査区北部 (V・VI区) 第1面遺構実 測図 (1/200) 13
Fig.8	調査区北部 (V・VI区) 第2面遺構実 測図 (1/250) 14
Fig.9	調査区北部 (III区) 遺構実測図 (1/200) 15
Fig.10	基本土層図1 (1/100) 16
Fig.11	基本土層図2 (1/100) 17
Fig.12	基本土層図3 (1/100) 18
Fig.13	基本土層図4 (1/100) 18
Fig.14	谷南部 (I・II区) 第1面 (水田関連 遺構) 実測図 (1/200) 20
Fig.15	谷北部 (V区) 第1面 (水田関連遺構) 実測図 (1/200)、土層断面図 (1/40) 21
Fig.16	段造成 (SH404) 実測図 (1/100、 1/60) 23
Fig.17	柱穴列、掘立柱建物 (SA1・SB1・2・ 15) 実測図 (1/80、1/60) 23
Fig.18	掘立柱建物 (SB5・8・12・14) 実測 図 (1/80) 24
Fig.19	掘立柱建物 (SB16・17) 実測図 (1/80) 25
Fig.20	土坑 (SK015・025・026・033・ 452) 実測図 (1/60) 26
Fig.21	鍛冶炉 (SL402・502・503・505・ 604・681・5118) 実測図 (1/20) 28
Fig.22	廃津坑実測図 (1/40、1/20) 30
Fig.23	火葬墓 ST302 実測図 (1/20) 31
Fig.24	掘立柱建物 (SB3～7・9・13) 実測 図 (1/80) 33
Fig.25	掘立柱建物 (SB11) 実測図 (1/80) 34
Fig.26	住居址 SI1、竈 SL460 実測図 (1/60、 1/20) 35
Fig.27	住居址 SI2、竈 SL602 他実測図 (1/60、 1/40) 37
Fig.28	住居址 SI3・4 実測図 (1/60) 38
Fig.29	段造成 SH401 実測図 (1/80、 1/60) 39
Fig.30	周溝状遺構 (SD5134・571・5142・ 5150・570) 実測図 (1/80) 41
Fig.31	周溝状遺構 (SD383・406・408・ 409・684・6001・6002) 実測図 (1/80) 42
Fig.32	土坑群 (SK5124～5126) 実測図 (1/80、1/40) 44
Fig.33	土坑群 (SK624・625・683・686)、 炉状遺構 (SL682・709) 実測図 (1/80、 1/40、1/20) 45
Fig.34	土坑 (SK563・674) 実測図 (1/40) 46
Fig.35	土器棺墓 (ST421・609) 実測図 (1/20) 46
Fig.36	谷南部 (I・II・IV区) 第2面遺構 (溝、 土坑等) 実測図 (1/200) 48
Fig.37	谷北部 (V区) 第2面遺構 (溝等) 実 測図 (1/200)、SD1000 周辺細部実 測図・土層断面図 (1/40) 49
Fig.38	金属製品・石製品実測図 (1/2、 1/1) 51
Fig.39	平安時代の土器・陶磁器実測図 (1/3) 52
Fig.40	古墳時代の土器実測図 1 (1/3) 53
Fig.41	古墳時代の土器実測図 2 (1/3) 54

Fig.42 第6次調査区遺構全体図および土層実測図 (1/100)	74	Fig.48 谷第2面遺構配置図 (1/80)	81
Fig.43 SX09・01出土石器実測図 (1/1)	74	Fig.49 住居址、段造成周辺の土層断面図 (1/40)	82
Fig.44 第7次調査区 主要遺構配置図 (1/300)	78	Fig.50 住居址 SI5、竈 SL011 実測図 (1/40, 1/20)	83
Fig.45 基本土層図 (1/100)	78	Fig.51 住居址 SI6・8、SK025 実測図 (1/40)	84
Fig.46 第1面遺構配置図 (1/200)	80		
Fig.47 丘陵斜面土層断面図 (1/40)	80		

図版目次

卷頭カラ一		PL.7 2. 廃溝坑 SK605 周辺検出状況 (東から)	
卷頭図版 1		3. 廃溝坑 SK5119 周辺検出状況 (東から)	
1. 今宿平野 (西から)		PL.8 1. SK025 (北から)	62
2. 5次調査南部 (I~IV区1面) (東から)		2. SK452 (東から)	
卷頭図版 2		PL.9 1. SK015 土層断面 (東から)	63
1. 5次調査南部 (I~IV区2面) 周辺 (北から)		2. SK026 (南から)	
2. 5次調査北部 (V・VI区2面) 周辺 (北から)		3. SK033 (西から)	
卷頭図版 3		PL.10 1. SB3 検出面 (北から)	64
1. 鍛冶炉 [†] SL505 (東から)		2. SB4 (南から)	
2. 鍛冶炉 [†] SL604 (東から)		3. SB5 (南から)	
卷頭図版 4		PL.11 1. SB6 (西から)	65
1. 火葬墓 ST302 (東から)		2. SB7 (東から)	
2. 石組竈 SL460 (SI1) (南から)		3. SB9 (東から)	
PL.1 1. I・II区周辺 (北から)	55	PL.12 1. SB10 (北から)	66
2. I・II区1面 (南から)		2. SB11 (北から)	
PL.2 1. V区谷1面 (北から)	56	3. SB15 (北から)	
2. 包含層 SU012 (南東から)		PL.13 1. 調査区南部 (V・VI区主に2面) 全景 (北から)	67
PL.3 1. SD001 (南東から)	57	2. SI2 (北から)	
2. SX014 (北から)		PL.14 1. SI1 (南から)	68
PL.4 1. III区全景 (東から)	58	2. SI3 (東から)	
2. III区南部 (北から)		3. 段造成 SH401と斜面の土層断面 (北から)	
PL.5 1. 段造成 SH404 (南から)	59	4. 段造成 SH401	
2. 鍛冶炉 [†] SL402 (東から)		PL.15 1. SD5134 (北から)	69
3. 鍛冶炉 [†] SL502とSK501 (西から)		2. SD570 (東から)	
PL.6 1. 鍛冶炉 [†] SL503 (東から)	60		
2. 鍛冶炉 [†] SL5118 (北から)			
3. 鍛冶炉 [†] SL681 断面 (西から)			
PL.7 1. 廃溝坑 SK590・591 (東から)	61		

PL.15	3. SD684 (南から)	
	4. SD406・408・409 (北から)	
PL.16	1. SK5124 周辺 (南から)	70
	2. SK683・686 周辺 (東から)	
	3. SK674 (南から)	
PL.17	1. SK563 (北から)	
	2. ST421 (東から)	71
	3. ST609 (東から)	
	4. SD1000 中央の集石 (北から)	
PL.18	1. SD1000と谷 (北から)	72
	2. SD1000 (南から)	
PL.19	1. 調査区全景 (南東から)	76
	2. 調査区全景 (北から)	
	3. 調査区西面土層	
	4. SX09 遺物出土状況 (北東から)	
	5. SX09 下層確認トレンチ (東から)	
	6. 出土石器	
PL.20	1. 第1面全景 (北上空から)	85
	2. 第1面全景 (北から)	
PL.21	1. 第2面全景 (北上空から)	86
	2. 第2面全景 (北から)	
PL.22	1. 調査区南壁土層断面 (北から)	87
	2. 調査区東壁土層断面 (西から)	
PL.23	1. 調査区中央 谷下層の土層断面 (東から)	88
	2. 調査区北壁土層断面 (南から)	
PL.24	1. SI5 (南から)	89
	2. SL010 (南から)	
PL.25	1. SI6～8、SH019 周辺 (東から)	90
	2. SI7・8 (東から)	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本書で報告する徳永A遺跡の発掘調査は伊都土地区画整理事業に伴う造成に先立って実施されたものである。伊都土地区画整理事業は福岡市西部の今宿平野東部を対象に計画された区画整理事業で、施工面積は約130haである。

1996(平成8)年11月、都市整備局(現・住宅都市局)伊都区画整理事務所から事業地内の埋蔵文化財について確認調査の依頼があった。福岡市教育委員会埋蔵文化財課では事業地全体について遺跡の確認のための試掘調査が必要と判断し、区画整理事務所と協議を重ね、試掘地点の選定を行った。広大な事業地内における埋蔵文化財包蔵地の範囲確定や、かつての潟湖と考えられる今宿砂丘後背地などの古地形復原を目的として、1996年12月～1997年2月、計68箇所の試掘調査を実施した。この結果、事業地南部の低丘陵や沖積台地上を中心として埋蔵文化財の分布が確認され、事業地北部の大半は砂丘後背湿地に当たり埋蔵文化財分布の可能性はないと判断された。各地点の包蔵地範囲内については、工事工程との調整を行いながら必要範囲について随時、確認調査を行い、遺構密度など埋蔵文化財の内容を確認したうえで、本調査に着手するという手順をとることとなった。本調査は2002(平成14)年度の今宿五郎江遺跡の調査から始まった。

本書で報告する徳永A遺跡第5次調査は試掘調査を2009(平成21)年8月6日に行い、対象地内全体で遺構や遺物の散布を確認した。本調査は2010(平成22)年1月4日に着手した。調査途中に西側隣地の道路や家屋撤去が進んだために、2010年3月18日にも試掘調査を実施して調査対象地を拡張した。本調査は2011(平成23)年4月1日に終了した。第6次調査は2011年7月11日に試掘調査を行い、対象地北側で包含層と遺構を確認した。本調査は同年の7月12～22日に実施した。第7次調査対象地は伊都の丘病院の駐車場敷地であったが、試掘調査はその造成前、1999(平成11)年10月27日に実施されており、遺物包含層が確認されていた。今回の区画整理事業に伴い切り下り工事が行われることになったので、5次調査の成果も受けて、本調査を実施した。調査期間は2011(平成23)年9月20日～同年11月22日である。調査報告書作成のための整理はいずれも2011(平成23)年度から2012(平成24)年度に行った。

2. 調査の組織

発掘調査時の体制は以下のとおりである。

調査委託 福岡市住宅都市局(旧・都市整備局)伊都区画整理事務所

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦 山田裕嗣(平成21年度)

文化財部長 藤尾浩 宮川秋雄(平成21・22年度)

調査総括 文化財部埋蔵文化財第2課課長

田中壽夫

埋蔵文化財第2課調査第2係長

菅波正人

埋蔵文化財第2課調査第1係長

杉山富雄(平成21年度)

庶務担当 埋蔵文化財第1課 管理係

古賀とも子

事前協議 埋蔵文化財第1課事前審査係長

宮井善朗

事前審査係 今井隆博、阿部泰之(平成21・22年度)

第5次・7次調査担当 埋蔵文化財第2課 調査第2係 森本幹彦

第6次調査担当 埋蔵文化財第2課 調査第2係 板倉有大



- 1 德永A道路 2 德永B道路 3 女原道路 4 女原笠掛道路 5 大塚道路 6 今宿五郎江道路 7 谷道路 8 青木道路
 9 今山道路 10 今宿道路 11 南寺道路 12 斎氏道路 13 斎氏引地道路 14 蓬町道路 15 丸隈山道路 16 山崎道路
 17 千里中原道路 18 千里深谷A道路 19 千里深谷A道路 20 女上ノ谷製鉄跡 21 新開製鉄跡 22 青木城跡
 23 相原製鉄A道路 24 相原製鉄B道路 25 相原製鉄C道路 26 本村道路 27 焼山製鐵跡 28 堀ノ内製鐵道路
 29 堀ノ内道路 30 鶴崎道路 31 鶴崎製鉄A道路 32 鶴崎製鉄B道路 33 ショウガ谷製鐵跡 34 斎氏古墳群A群
 35 斎氏古墳群B群 36 斎氏古墳群C群 37 斎氏古墳群D群 38 斎氏古墳群E群 39 斎氏古墳群F群 40 斎氏古墳群G群
 41 斋氏古墳群I群 42 斋氏古墳群J群 43 德永古墳群A群 44 德永古墳群B群 45 德永古墳群C群 46 德永古墳群D群
 47 德永古墳群E群 48 德永古墳群H群 50 女原古墳群A群 51 女原古墳群B群 52 女原古墳群C群 53 女原古墳群D群
 54 女原古墳群E群 55 新開古墳群A群 56 新開古墳群B群 57 新開古墳群C群 58 新開古墳群D群 59 新開古墳群E群
 60 新開古墳群F群 61 谷上古墳群A群 62 谷上古墳群B群 63 谷上古墳群C群 64 相原古墳群A群 65 相原古墳群B群
 66 相原古墳群C群 67 相原古墳群D群 68 相原古墳群E群 69 相原古墳群F群 70 相原古墳群G群 71 相原古墳群H群
 72 相原古墳群I群 73 本村古墳群A群 74 焼山古墳群B群 75 鶴崎古墳群A群 76 鶴崎古墳群B群 77 油坂古墳群A群
 78 油坂古墳群B群 79 長垂山古墳群A群 A 斎氏B1号墳 B 兔塚古墳 C 丸隈山古墳 D 山ノ鼻1号墳 E 山ノ鼻古墳群
 F 若八幡宮古墳 G 下谷古墳 H 大塚古墳 I 新開窑跡 J 谷上 B1号墳 K 鶴崎古墳

Fig.1 今宿平野の遺跡分布 (1/25000)

整理・報告年度の平成24年度からは文化財部の異動等に伴い調査の組織は以下の通りとなっている。

調査主体 福岡市経済観光文化局文化財部 部長 藤尾浩

調査総括 埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課調査第2係長 菅波正人

庶務担当 埋蔵文化財審査課 管理係 古賀とも子

報告担当 5次・7次:森本幹彦(埋蔵文化財審査課事前審査係) 6次:板倉有大(文化財保護課整備活用係)

II. 遺跡の立地と歴史的環境

今宿平野は糸島平野の東縁部に開ける小平野で、東側を背振山系より北に派生する叶岳・長垂山塊によって早良平野と画され、南・西側を高祖山の山塊によって区切られた東西約6km、南北約2kmの小平野である。今山へ長垂間の今津湾に面する海浜部では、弓状砂丘が縄文時代後半期以降に形成され、その後背地には近世の干拓事業まで潟湖ないしは干潟がひろがっていた。南の高祖山山麓は北流する小河川の開析により八手状に丘陵尾根が派生する地形をなし、平野東部では叶岳とのあいだに扇状地が発達している。本書で報告する徳永A遺跡(1)の調査地点(第5次~7次)は、高祖山山麓北端部の丘陵斜面と谷部であり、当時は今津干潟に面する立地であったと考えられる。今宿バイパス関係で調査が行われた第2次・4次調査地点は同じ谷筋の上流側、第1次はその南隣の谷筋である。これらの地点の主体は古墳時代後期(6世紀後半~7世紀前半)の集落と平安時代(9~11世紀)の集落・生産である(Tab.1)。後者は後述のように出土遺物から官衙関連である可能性が高い。また、東隣の丘陵上には群集墳が存在したとみられている(徳永古墳群A群:43)。一方、第3次調査は遺跡北西端部の丸隈山遺跡に面する丘陵上に位置する地点であるが、7世紀後半から9世紀の古代を主たる時期とする集落縁辺とみられる。

次に周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代や縄文時代は遺物が出土する遺跡が平野内に点在しているが、集落の存在は明確でない。徳永A遺跡では縄文時代各時期の石器が一定量出土しており、該期の狩猟・採集の場であったと考えられる。徳永B遺跡(2)2次では阿高系土器がまとまって出土しており、近くに貯蔵穴等があったとみられる。今山遺跡(9)では縄文時代前期以降の遺物を包括する砂丘層が層位的に把握され、玄武岩製石斧生産も縄文時代から行われていることが明らかになった(8次)。晩期では周船寺遺跡群(11、旧称の千里シビナ遺跡を含む)や飯氏遺跡(12)で土坑や埋葬などがまとまってみつかっている。

弥生時代前期~中期前半では、東の青木遺跡(8)で集落形成がみられ、谷遺跡(7)2次では突堤式土器等にともなって矢板、杭列がみつかっており、周辺が弥生時代前期初頭の水田域とみられる。海浜部では今山遺跡の玄武岩石斧生産が前期後半から中期前半をピークに盛行しており、今宿遺跡(10)では墓域が形成される。西部の飯氏遺跡や周船寺遺跡でも集落と墓域の規模が大きくなるが、周船寺遺跡7次では、柵列で区画された掘立柱建物主体の集落域がみつかっており、注目される。

弥生時代後半になると、平野の中心的な集落は今宿五郎江遺跡(6)となる。中期後半から後期の環濠集落で、環濠の埋没が進む弥生時代終末期前後には集落域が拡大して、分村が増える。大塚遺跡(5)の最初の集落形成はこの分村であり、遺跡内の各丘陵尾根上に弥生終末期前後の集落が形成される。14次では終末期前半の鍛冶工房がみかかり、西新町遺跡よりも古い、列島最古段階の竈を有する。これらの生産域は今宿五郎江遺跡環濠集落周縁の東部から南部に広がっていた可能性が高く、

井堰等がみつかっている。谷遺跡3次もそのような生産域の一つで、弥生時代終末期前後の井堰や畦畔が複数面重複している。今宿五郎江遺跡の墓域は不明瞭であるが、大塚遺跡5次で弥生時代終末期前後の木棺や石棺墓が4基みつかっている。また、今宿遺跡では継続して墓が営まれており、銅剣副葬墓（2次）もみられる。

古墳時代初頭前後になると、海浜妙丘部の今山遺跡や今宿遺跡でも外来系土器の出土が増えるほか、製塩などが活発になり、新たに交易や生産の拠点となる。前述の今宿五郎江遺跡周辺は古墳時代前期後半になると衰退するが、今宿遺跡や飯氏遺跡、糸島の中心的集落である三雲遺跡群などはほとんど断絶なく、古墳時代後半期まで集落が継続する。

古墳時代中期前半期は、平野内で小規模な集落が増加するが、女原遺跡（3）は、主にこの時期から集落が形成される遺跡である。同遺跡3次や大塚遺跡14次・15次地点などでは朝鮮半島系土器の出土が多く、渡来人の居住が想定される。また、徳永A遺跡5次調査では初期須恵器が出土しており、河川祭祇に伴うものである可能性がある。

古墳時代後期の集落は、大塚遺跡など、やや内陸の平野南縁部から丘陵斜面を中心に立地しており、新開須恵器窯（I）や新開古墳群（55～60）が近在する。

徳永A遺跡における最初の集落形成は古墳時代後期後半であるが、狭い谷筋の丘陵斜面に立地する。前時期にはない特異な立地であるが、同様の集落形成は福岡市西区元岡・桑原遺跡群内でもみられる。

今宿平野周辺の丘陵部には各時期の前方後円墳や円墳など400基以上の古墳が分布する。首長墳の前方後円墳には、若八幡宮古墳（F、前方後円墳集成2期）、山ノ鼻1号墳（D、集成3期）、鋤崎古墳（K、集成4期）、丸隈山古墳（C、集成5期）、兜塚古墳（B、集成8期）、大塚古墳（H、集成9期）、飯氏二塚古墳（Bの西、集成9期）などが知られる。古墳時代前期の前方後円墳と考えられてきた山ノ鼻2号墳（E）周辺は近年の調査によって、円墳3基以上とその周辺に木棺墓等が伴う古墳時代中期初頭前後の墓域であることが明らかになった。古墳時代後期後半になると谷上B1号墳（J、集成9期）や飯氏B14号墳（A、集成10期）など、前方後円墳は40m未満となり、群集墳の築造が活発になる。女原笠掛遺跡（5）の直径約30mの古墳周溝（「今宿小塚」）はこの時期の大形円墳または小形前方後円墳である。

奈良時代前後では製鉄関連の遺跡が多くみつかっている。大塚遺跡14次と鋤崎製鉄A遺跡（31）1次では製錬炉と横口付炭窯が、飯氏遺跡8次では製錬炉と鍛冶炉がみつかっており、時期は7世紀～8世紀を中心とするものである。砂鉄に恵まれる糸島地方では奈良時代前後に製鉄が活発になるが、奈良時代後半に軍事拠点として築城される怡土城などに供給されたとみられている。

平安時代は今宿平野でも中国陶磁器や緑釉陶器が多量に出土する遺跡がみられるようになり、それらには大宰府の外郭施設があった可能性が考えられている。一つは徳永A遺跡で、丘陵部の9世紀代を中心とする包含層から越州窯系青磁等の中国陶磁器や緑釉陶器がまとまって出土しており、鉄滓、羽口や瓦の出土も少なくない。「周船寺」という地名から主船司との関連が考えられてきた。本書の5次調査では上記のような遺物のほか、石製丸瓶や、多くの怡土城系瓦が出土しており、鍛冶炉6基や火葬墓などの特異な遺構もみつかっており、遺跡の性格をより特徴付ける成果をあげている。今宿五郎江遺跡でも近年の調査で台地縁辺の包含層から越州窯系青磁等の中国陶磁器、緑釉陶器、瓦、鉄滓などが多く出土しており、9世紀後半～10世紀を中心とするようである。13次調査では青銅製の「寶」印が出土し、近在の大塚遺跡17次調査では越州窯系青磁等を副葬した木棺墓もみつかっている。その他にも、女原笠掛遺跡（4）の瓦窯や今山遺跡8次調査の石組護岸のドックなど、平安時代の今宿平野を考える上で重要な調査成果が増えている。

Tab.1 徳永 A 遺跡調査一覧

次数	調査年度 原因	編文時代 ～弥生時代	古墳時代 中期	古墳時代後期 (6c 後半～7c 前半)	古代前期 (7c 後半～8c)	古代後期 (9c ～ 11c)	古代末 ～中世	文献
1次 (徳永遺跡目区)	1988・今前ハイバス	△		△遺物多量	△	○ 遺物多量 官衙関連集落跡辺	△ 水田関係？	1
2次 (徳永遺跡目区)	1988・今前ハイバス	△		○ 集落		△		2
2次 (徳永遺跡目区)	1988・今前ハイバス	△		△	○ 集落跡辺？ (+燃土坑)			
3次	1993・鉄塔	△			○ 集落跡辺	○ 集落跡辺	△水田関係？	3
4次	1995・今前ハイバス	△		○ 集落	← 神地壇・炉？ →		△集落跡辺？	4
5次	2009・伊部区調整理	△ (御殿廬跡)	△ (+石組塀)	○ 集落 (+石組塀)		○ 官衙関連集落 (+廐治炉, 火葬墓)	○ 水田関係	本著
6次	2011・伊部区調整理	△		○ 集落跡辺		○ 集落跡辺		本著
7次	2011・伊部区調整理	△		○ 集落 (+石組塀)		○ 集落跡辺	○ 水田関係	本著

<文献>

- 1.「徳永遺跡」 福岡市 242 第 1991 年
- 2.「徳永遺跡(日)」 福岡市 306 第 1992 年
- 3.「今宿五郎江遺跡群・徳永八遺跡群」 福岡市 479 第 1996 年
- 4.「加須 202 号桟今前ハイバス開発埋蔵文化財調査報告書」 福岡市 583 第 1998 年

平安時代末前後では、大塚遺跡北部で墾田開発関係とみられる集落が出現し、女原遺跡 3 次でも当該期かやや後とする水田遺構がみつかっており、怡土莊(史料初見 1131 年)との関連も考えられる。徳永 A 遺跡 5 次周辺の谷水田もこれに関連するものであろう。鎌倉時代～室町時代では、今宿五郎江遺跡北部で掘立柱建物等の遺構が密集するようになり、墓もみられる。大塚遺跡南部の 5 次調査では当該期の「居館」がみつかっており、北部では、小規模な集落や墓が点在している。この時期に栄えるのが今津湾北部の今津であり、平安時代末から博多と並ぶ貿易や禅宗の一大拠点となっている。誓願寺南の調査では寺に関係するとみられる建物、溝、井戸、瓦、鐵鐸などが出土しており、勝福寺付近では古墓が発見され、多量の陶磁器が出土したことが知られている。文永の役のあと蒙古の再襲来に備えて築かれたのが元寇防壁であり、今宿地区は豊前国担当であった。長垂山の北西麓から今山の東の海浜砂丘上に築かれるが、遺存状況はあまり良くなく、これまで調査は行われていない。

戦国時代は大塚遺跡北部の丘陵尾根上に、屋敷群が面的に展開しており、当該期の造成が、ほぼそのまま現況の地形につながっているようである。同様の集落は、小規模であるが、徳永 B 遺跡(2)でもみつかっている。それらは、16 世紀後半には衰退するようで、青木や今宿周辺に中心が移っていく。

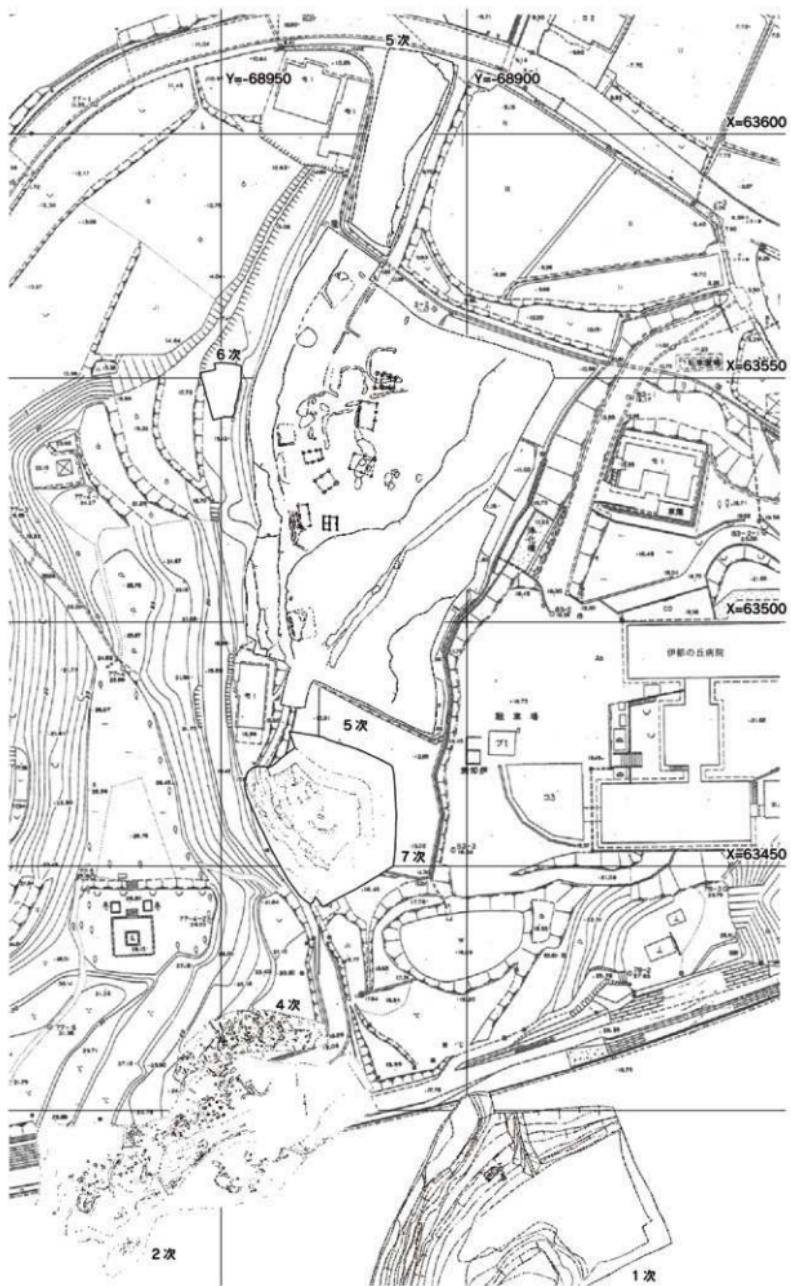


Fig.2 徳永 A 遺跡調査地点と周辺 (1/1000)

III. 第5次調査の報告

1. 調査の概要

徳永A遺跡は福岡市西部の今宿平野に位置する。高祖山から丘陵が八手状に伸びるが、徳永A遺跡はその北西に伸びる丘陵上や谷に立地している。近世の干拓事業以前は丘陵の北端近くまでが干涸であり、遺跡の北側にある湯溜池もその名残である。これまで、バイパス周辺の調査を中心として、古墳時代後期～古代の集落や平安時代の中国陶器などを多量に含む遺物包含層などがみつかっている。本調査地点は遺跡北東部に位置し、南北方向に入る谷と丘陵斜面に立地する。2次や4次調査地点と一連の谷筋であり、東側の丘陵には徳永古墳群A群が分布していたとみられる。

調査対象範囲は試掘調査により絞り込んだが、約5000m²、2面、15ヶ月の調査となった。表土剥ぎ以外は、上面の包含層から面下げまではほぼ全てを人力掘削で行っている。調査区は表土を剥いた順番に設定している（I～VI区、Fig.5）。

I区着手時は、まだ西側に既存の建物や道路がある状態であり、解体・撤去工事の進行とともに、調査区を拡大した。5次調査北端のIII区は、工事を急ぐ箇所であったため、I・II区と同時に着手し、終了次第、原局に引き渡している。III区の南側から西側は農業用水路があるため、VI区とは連続していない（農業用水路の底は遺構面よりも深く、遺構はほとんど遺存していないものとみられる）。III区東側、V区の北側は試掘調査の結果、遺構がみつかっておらず、調査対象地からは外している。また、IV区の南西側も、削平を受けた丘陵斜面であり、試掘の結果、遺構が存在しなかつたので、調査対象地から外している。

5次調査地点はIII区を除くと、南半部のI・II・IV区と北半部のV・VI区に大別できる。I・II・IV区の調査後に反転してV・VI区の調査を行った。調査地点全体が谷の中に立地しているが、西部は丘陵斜面やその裾の緩傾斜地であり、主に集落関連遺構が立地している。東部は更に一段深くなる旧河道筋（以下ではここを「谷」と呼ぶ）であり、水田関連遺構などが立地している。

5次調査地点の基本土層はFig.10～13に示した。東側の谷部周辺は、I. 暗褐色土（包含層）、II. 灰褐色粘質土（水田耕作土）、III. 黄褐色土（床土酸化土）、IV A. 暗灰黄褐色土（平安時代整地土）、IV B. 暗黄色～黄褐色土（古墳時代後期整地土）、V. 暗褐色～暗灰色粘質土（谷下層1）、VI. 黑灰褐色粘質土（谷下層2）である。地山は主に砂礫混黄褐色土（河川堆積の基盤層）であるが、丘陵斜面上方では赤褐色粘質を基調とする花崗岩風化土であり、谷下部では還元したシルト～粘質土となっている。北西の丘陵緩傾斜面では、I層、IV層の下にVI. 黒みの強い暗褐色土（古墳時代後期の旧表土層）層があり、その下が地山となっている。表土直下で地山となる箇所もある。IV層はAとBの区別が難しく、同一の遺構面として捉えている。

調査区西部の丘陵斜面等では表土直下の地山が遺構検出面であるが、谷周辺は複数の遺構面を設定できる。今回の調査では、III層上面またはIV層上面を第1面とし、地山面を第2面とした。ただし、地点によっては第1面のIV A層と地山の間でIV B層上の遺構を検出している。第2面検出の遺構は土層断面をみると、VI層やVII層が遺構掘削面となっているものが多い。I層とII層は第1面上の「包含層」とした。

主要な遺構は、大きく3時期に分かれる。

- ①平安時代後期～中世前期の水田関連遺構。
- ②平安時代（9～10世紀）の掘立柱建物、段造成、土坑、鍛冶炉、廃滓坑、火葬墓。
- ③古墳時代後期後半～末（6世紀後半から7世紀前半）の掘立柱建物、竪穴建物（壁建ち建物）、段造成、周溝状遺構（平地式建物の外周溝か）、土坑、屋外炉、土器棺墓、谷下層の水路。

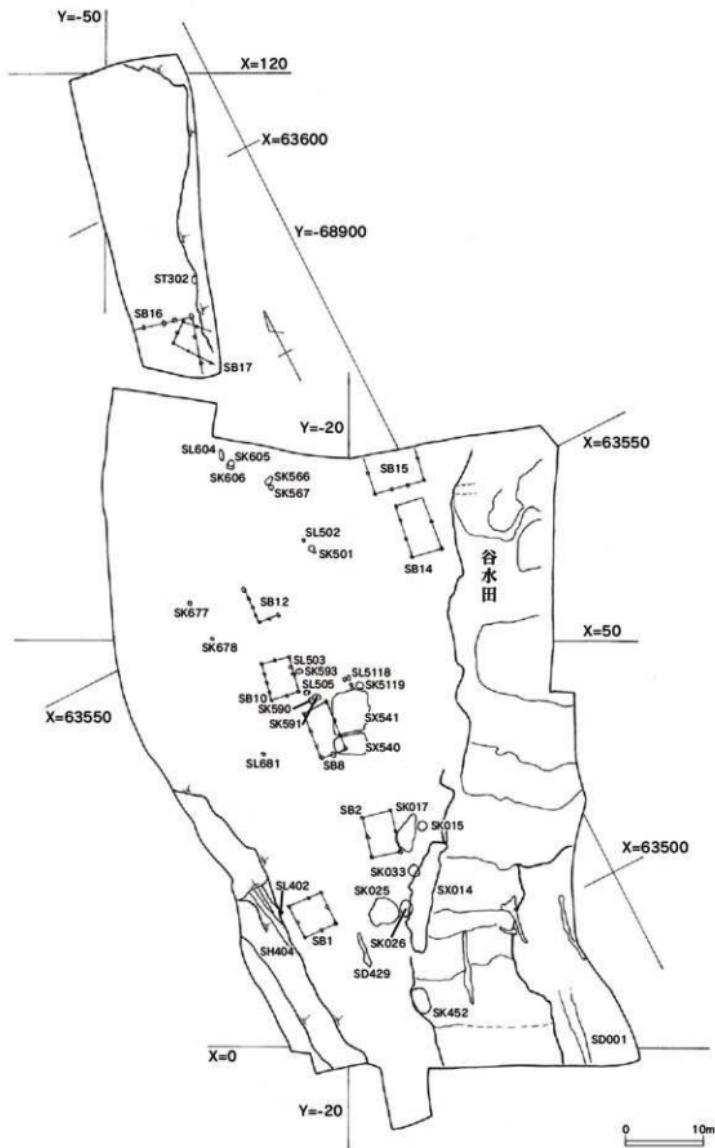


Fig.3 第5次調査区 平安時代から中世の主な遺構 (1/600)

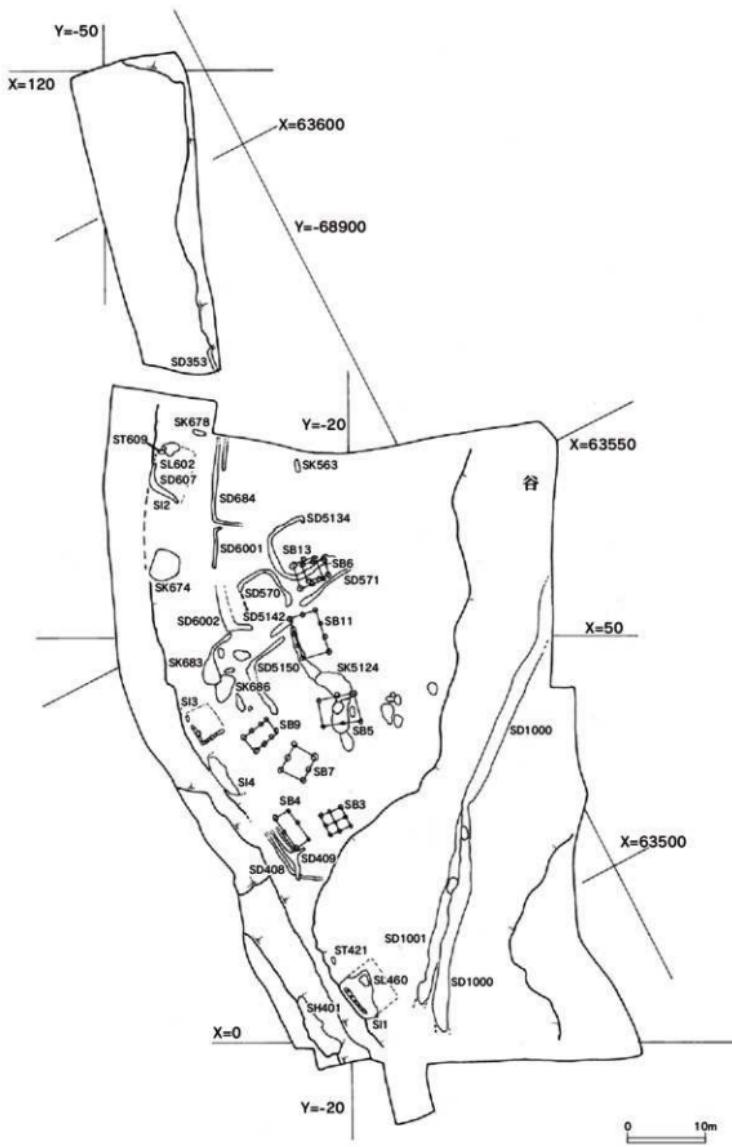


Fig.4 第5次調査区 古墳時代後期の主な遺構 (1/600)



Fig.5 調査の区割り (1/1000)

①は谷部を段造成して営まれた小規模な谷水田である。今回の調査地点で検出した遺構の中では最も新しく、平安時代の集落が廃絶された直後に営まれたものと考えている。耕作土面は遺存が悪いため、基盤の床土層（III層）から水田の区画単位を把握することとした。関連遺構として、大畦畔や水路とみられる溝もある。遺構面は主に調査区東側第1面である。

②の遺構は、調査区西側の丘陵斜面から谷部の整地層（IV層）上で検出した。遺構面は主に調査区西側の第1面であるが、一部の遺構は面下げ途中や第2面で検出した。掘立柱建物9棟以上、鍛冶炉7基、火葬墓1基等がある。包含層（I層）の遺物出土状況から、西側の丘陵斜面には、より多くの平安時代遺構が存在したものと考えられる。当該期の遺跡の性格を考えるうえで重要な遺構は鍛冶炉と火葬墓である。鍛冶炉は炉の南東に廃滓坑が1・2基あるものが多く、遺構配置に規則性がみられる。さらに、歸属不明の焼滓坑が5基前後あり、本来は10基を超える鍛冶炉が存在したものと考えられる。炉には大小あり、大型の精鍛鍛冶炉と小型の鍛錬鍛冶炉に分かれるとみられる。遺構の遺存状況が良かったため、各1基ずつ、遺構の切り取りによる保存処置をおこなった。火葬墓は遺構分布の北限に位置する。土師器杯で蓋をした須恵器瓶を藏骨器とするもので、墓壙の各隅に立石がある。階層は高くないが、当該期でも稀少な埋葬であり、遺跡の性格を考えるうえで重要である。

③の遺構は、調査区西側の丘陵斜面整地層（IVB層）や地山面、調査区東側谷底面の地山面で検出

Tab.2 德永A5次主要遺構一覽

報告遺構番号	遺構種類	棟出面	時代	擇図(Fig.)	図版(PL)	報告遺構番号	遺構種類	棟出面	時代	擇図(Fig.)	図版(PL)
SD001	溝 (水田開削跡)	(2)	平安時代末～中世	14・15	1・3	SII (SL460)	壁穴建物 (壁立・石組)	1B	古墳時代末	26	14 ・卷頭4
SD013	溝 (水田開削跡)	1A	平安時代末～中世	14・15	1	SII (SL462・660)	壁穴建物 (石組壁)	1B	古墳時代末	27	13
SD1000・SK1006	溝・土坑	2	古墳時代後期	36・37	17・18	SI3	壁穴建物 (壁立)	2	古墳時代後期～末	28	14
SD1001・SK1005	溝・土坑	2	古墳時代後期	36・37	18	SI4	壁穴建物 (壁立)？	2	古墳時代後期～末	28	
SX014	大溝	1A	平安時代末～中世	14・15	1・3	SH401	平坦面+後背溝	(2)	古墳時代末	29	14
SK015	土坑	1A	平安時代	20	9	SH404	平坦面+後背溝	(2)	平安時代	16	5
SK025	土坑	1A	平安時代	20	8	SD383	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	31	4
SK026	土坑	1A	平安時代	20	9	SD406・408・409	周溝状造構 (住居址)	(2)	古墳時代後期～末	31	15
SK033	土坑	1A	平安時代	20	9	SD570	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	30	15
SK452	土坑	1A	平安時代	20	8	SD571	周溝状造構 (住居址)	1A	古墳時代後期～末	30	
SK501	魔浮坑	1A	平安時代	22	5	SD5134	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	30	15
SK563	土坑 (窓？)	(2)	古墳時代後期～末	34	17	SD5142	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	30	
SK566・567	魔浮坑	1A	平安時代	22		SD5150	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	30	
SK590・591	魔浮坑	1A	平安時代	22	7	SD684	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	31	15
SK593	魔浮坑	1A	平安時代	22		SD6001	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	31	
SK5119・5121	魔浮坑	1A	平安時代	22	7	SD6002	周溝状造構 (住居址)	2	古墳時代後期～末	31	
SK5124～5126	土坑群	2	古墳時代後期～末	32	16	SB1	掘立柱建物	1A	平安時代	17	
SK605・606	魔浮坑	1A	平安時代	22	7	SB2	掘立柱建物	1A	平安時代	17	
SK624	土坑 (土溜瀬)	1	古墳時代後期～末	33		SB3	掘立柱建物	(2)	古墳時代後期～末	24	10
SK625	土坑 (土溜瀬)	1	古墳時代後期～末	33		SB4	掘立柱建物	(2)	古墳時代後期～末	24	10
SK674	土坑	1B	古墳時代末	34	16	SB5	掘立柱建物	1A	古墳時代後期～末	24	10
SK683・686	土坑群	2	古墳時代後期～末	33	16	SB6	掘立柱建物	1A	古墳時代後期～末	24	11
SL402	鍛冶炉	1A	平安時代	21	5	SB7	掘立柱建物	2	平安時代	18	
SL502	鍛冶炉	1A	平安時代	21	5	SB8	掘立柱建物	2	古墳時代後期～末	24	11
SL503	鍛冶炉	1A	平安時代	21	6	SB9	掘立柱建物	2	古墳時代後期～末	24	11
SL505	鍛冶炉	1A	平安時代	21	巻頭3	SB10	掘立柱建物	2	平安時代	18	12
SL5118	鍛冶炉	1A	平安時代	21	6	SB11	掘立柱建物	2	古墳時代後期～末	25	12
SL604	鍛冶炉	1A	平安時代	21	巻頭3	SB12	掘立柱建物	2	平安時代	18	
SL681	鍛冶炉	1A	平安時代	21	6	SB13	掘立柱建物	2	古墳時代後期～末	24	
SL682	炉	2	古墳時代後期～末	33		SB14	掘立柱建物	(2)	平安時代	18	
SL709	炉	2	古墳時代後期～末	33		SB15	掘立柱建物	(2)	平安時代	17	12
ST302	火葬墓	(2)	平安時代	23	巻頭4	SB16	掘立柱建物	1A	平安時代	19	4
ST421	土溜棺墓	1B	古墳時代後期～末	35	17	SB17	掘立柱建物	1A	平安時代	19	4
ST609	土溜棺墓	1B	古墳時代後期～末	35	17	SA1	樋	(2)	平安時代	17	

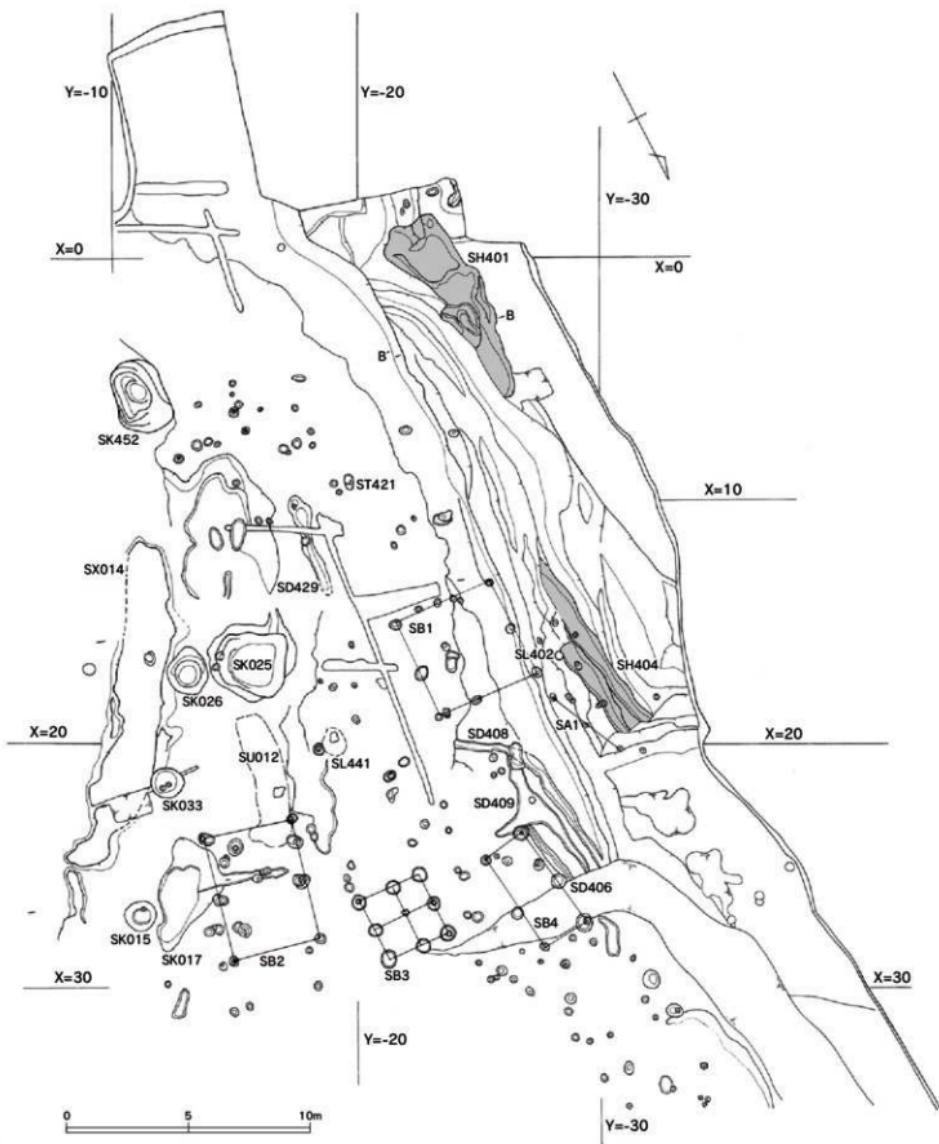


Fig.6 調査区南部（Ⅱ・Ⅳ区）第1面遺構実測図（1/200）

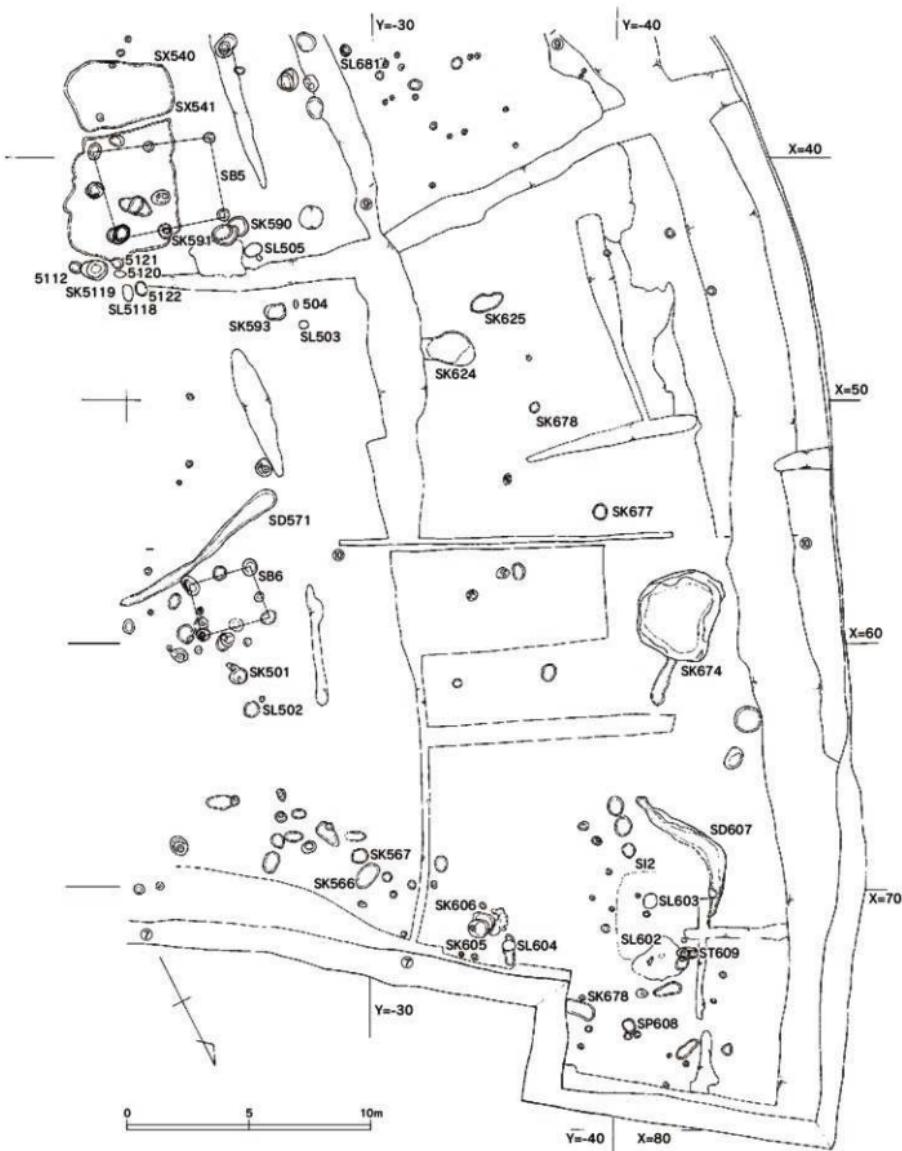


Fig.7 調査区北部（V・VI区）第1面遺構実測図 (1/200)

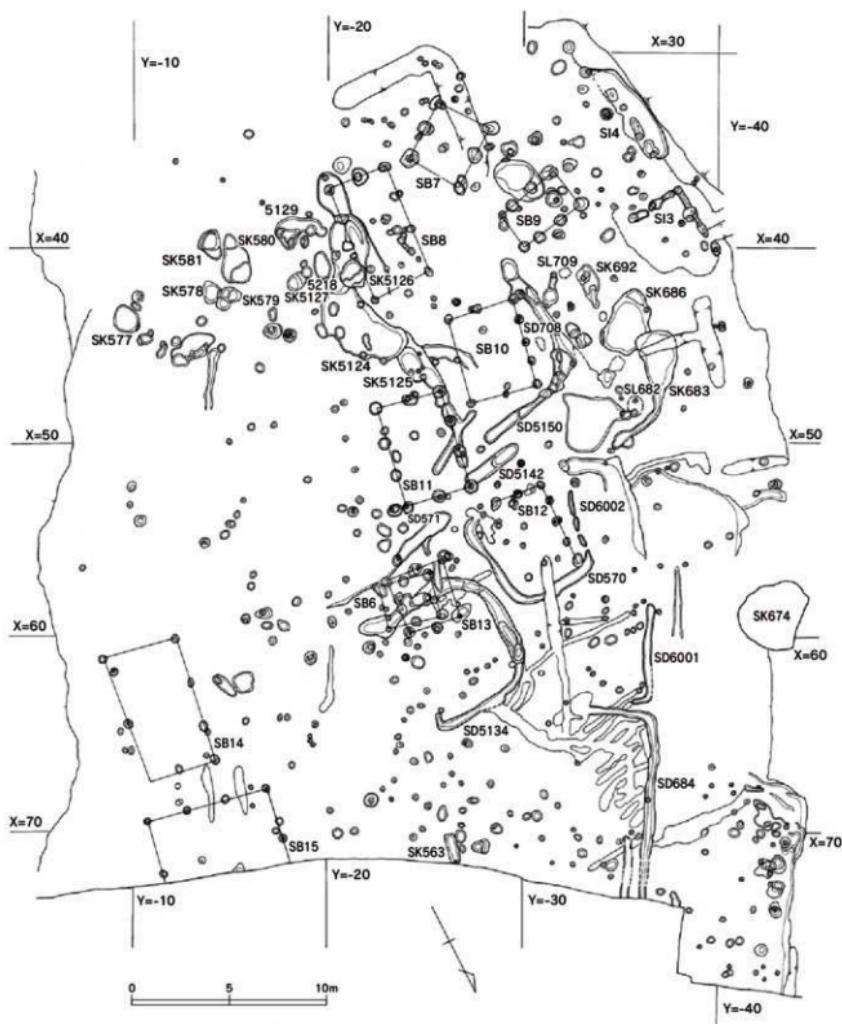


Fig.8 調査区北部（V・VI区）第2面遺構実測図（1/250）

した。遺構面は調査区西側の第1～2面や調査区東側の第2面である。掘立柱建物8棟以上、竪穴建物4棟（壁立ち構造、石組カマドを有するもの含む）、平地式建物9棟以上（ただし、外周溝のみの検出）、谷下層の直線的水路等がある。竪穴建物や丘陵斜面の段造成は谷がある程度埋没してからのもので、古墳時代末の一群（7世紀前半）である。谷下層の水路は古墳時代後期後半のものであり、平地式建物や掘立柱建物の一部が同時期の建物であろう。

出土遺物は総数200箱ほどである。中世の遺物は少量であるが、鎌倉時代の龍泉窯系青磁片などが出土しており、谷水田の下限時期を示すのではないかと考えられる。

平安時代の土器・陶磁器は、越州窯系青磁や白磁などの初期貿易陶磁器と綠釉陶器を一定量含むもので、黒色土器（内黒が主体）と土師器碗・杯を中心とする構成である。須恵器は甕を除くと少數派である。9世紀後半から10世紀を中心とするものであろう。当該期の遺物は他に、石製丸瓶、瓦、輪の羽口、鉄滓、漁網用土錘、釣用鉛錘などがあり、遺跡の性格を示唆する。瓦には怡土城系瓦が一定量含まれており、奈良時代の怡土城の機能停止後に瓦等の部材が周辺の施設で再利用されている可能性が考えられる。ただし、今回の調査地点では瓦葺とみられる建物遺構はみつかっておらず、近辺に存在したのか、別の用途であったのか、注意を要する。

古墳時代の土器は後期後半～末（TK43～TK209型式期）を主体とする。変則的な須恵器、赤焼き須恵

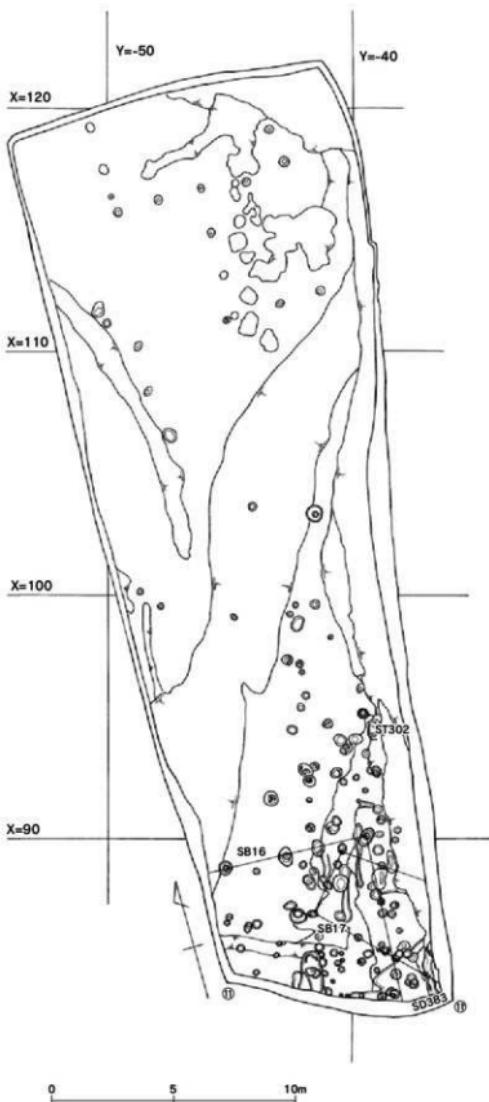


Fig.9 調査区北部（Ⅲ区）遺構実測図（1/200）

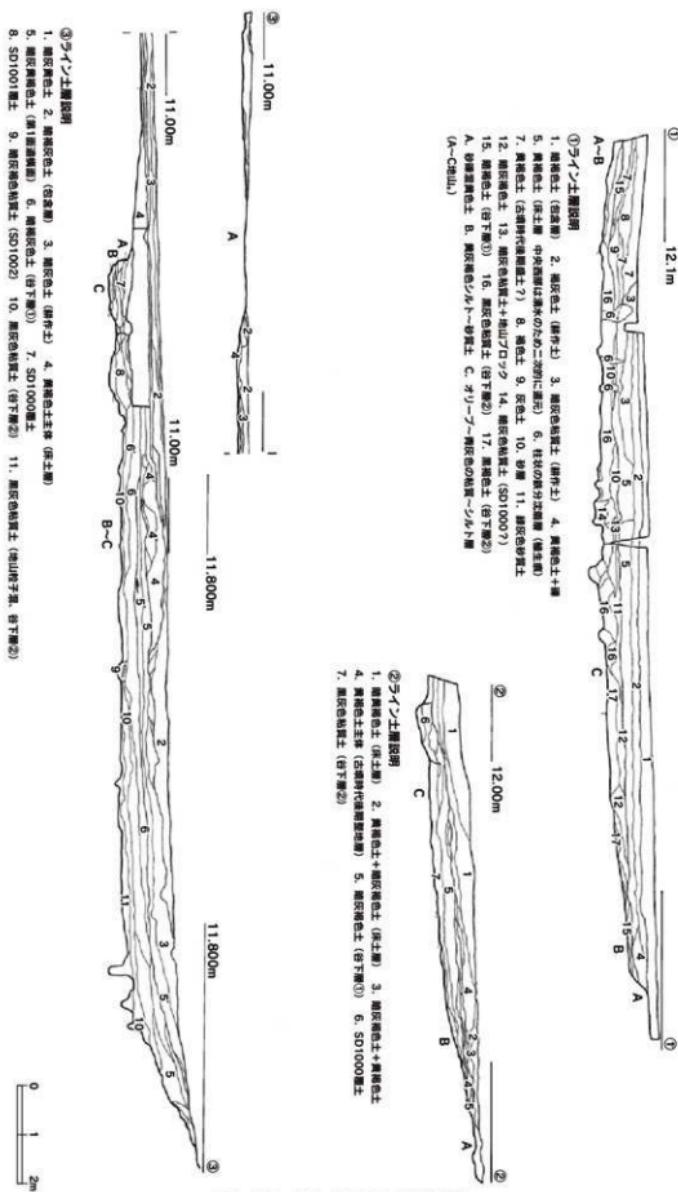


Fig.10 基本土層図 1 (1/100)

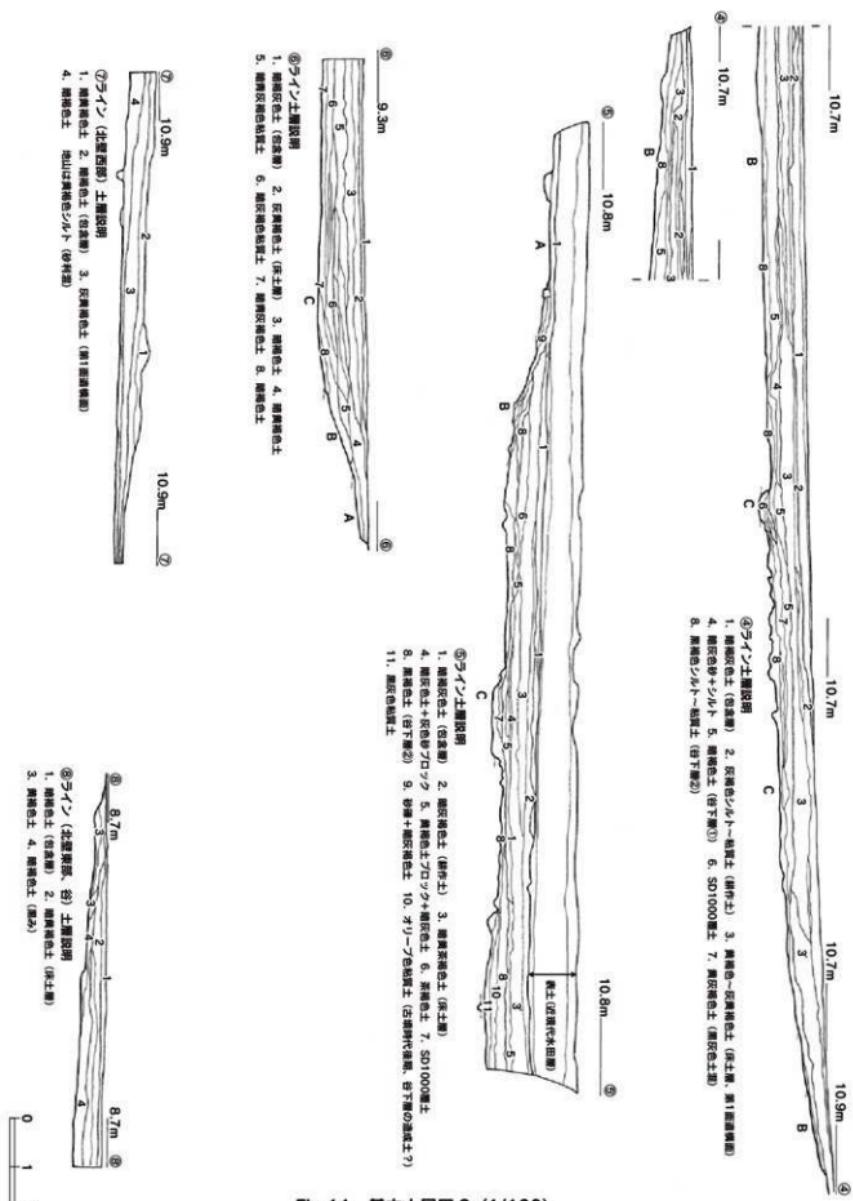


Fig.11 基本土層図 2 (1/100)

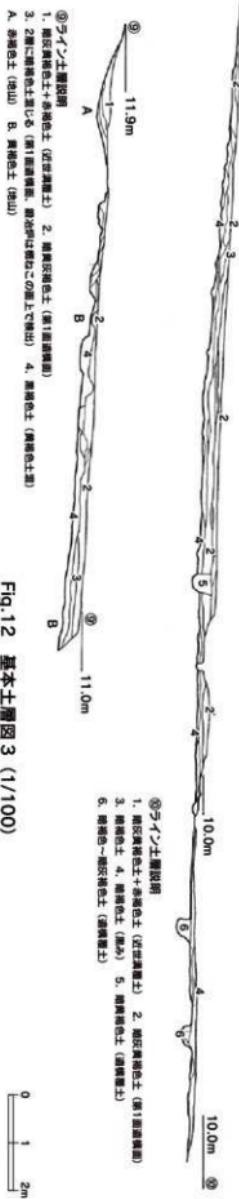


Fig.12 基本土層図3 (1/100)



Fig.13 基本土層図4 (1/100)

器、須恵器製作技術で作られた土師器などが一定量含まれており、集落内に須恵器工人がいて、付近に須恵器窯が存在する可能性が高いと考えられる。土器以外の当該期の遺物は多くないが、U字形鉄製鋤先の完形品が出土しており、注目される。

谷下層からは古墳時代中期前半の土器も出土しており、初期須恵器(TG232型式期)の高杯、杯身も出土している。まとまつた出土ではないが、当該期の河川祭紙があつた可能性がある。

弥生時代以前では弥生時代中期の土器が少量出土しているほか、縄文時代後期前後の石斧、石鑿、石匙等の石器が一定量出土しており、遺構はみつかっていないが、当該期から狩獵や開発の場であったと考えられる。

過去の調査から、平安時代の徳永A遺跡は大宰府管轄の「主船司」に関連する遺跡と考えられてきたが、今回の調査成果も、陶磁器、瓦、丸輪といった出土遺物や火葬墓の存在などから、一般的な村落遺跡ではないことを物語っている。また、鍛冶関連遺構がまとまってみつかっており、本調査地点は官営の鍛冶工房を含むエリアであったことが明らかになった。

遺跡の本格的な集落形成時期は古墳時代後期後半である。上流に位置する2次・4次調査地点と一連のものであるが、当該期の集落域が、谷の入り口まで広がっていたことが明らかになった。そして、一連の集落ながらも、壁建ち建物や石組カマドは上流の調査地点ではみつかっておらず、住居址の多様性も明らかになった。また、出土土器の内容は付近に須恵器窯が存在することを示唆している。古墳時代中期前半についても、集落形成はなされていないが、初期須恵器を含む土器群が出土しており、今後の調査成果に期待できる。

徳永A遺跡のような小さい谷筋を単位とする古墳時代後期から古代の集落は、元岡・桑原遺跡群などでもみつかっており、糸島地域に特徴的な集落パターンといえるかもしれない。今後、その性格が問題となってくるだろう。

2. 調査の記録

1) 平安時代から中世の水田関連遺構 (Fig.10・11・14・15)

調査区東部の谷では、II層（灰褐色粘質土：水田耕作土）、III層（黄褐色土：床上酸化土）といった水田関連の土層堆積が確認された。上のI層はその廃絶後に自然堆積または表土化した層とみられるが、平安時代から中世前期の遺物が出土する包含層であるので、水田はそれ以前の時期のものであることが分かる。II層上面には洪水砂等は被っておらず、I層の堆積により浸食を受けているため、畔や足跡等はほとんど遺存していない（畔として検出できたのは、後述するSX014のみ）。そのため、水田の基盤層であるIII層から、水田の区画を推定することにした。

III層上面ではFig.14・15のような平坦面と段差を検出することができ、水田区画を反映しているものと考えられる。調査区内でIII層は東西15m前後、南北75m、標高8.4～11.9mの範囲にひろがるが、15前後の区画（平坦面）を検出した。区画は東西14m前後、南北3～7m前後が多いが、東西はSD013周辺のように二分されていたのではないかとみられる。本来の水田小区画は谷筋方向が短い長方形または正方形（平均して東西7m、南北5mほどか）を基本としていたようであるが、北側（下流側）はややイレギュラーであり、谷筋方向に長い小長方形の区画もあったようである。水田造成は比較的傾斜の緩い谷底周辺を中心としており、勾配が急になる東西の丘陵斜面へはあまり広がっていない。

周辺には関連遺構とみられる溝や畦畔等がある。東のSD001は幹線水路、西のSX014は大畦畔とみられる。以下個別に報告していきたい。

①溝 (SD)

SD001 (Fig.14・15) 調査区の南東部、I区の地山上で検出した溝である。検出箇所は表土直下が地山の砂礫層となっている。幅120cm以上、深さ30cm以上である。横断面はU字形に近い。覆土は暗褐色土を主体とし、下層では、一部、砂が混じる。底面は地形と同様、北に向かって低くなる。長さ9m検出したが、北側は削平により消失しているとみられる。遺物は少量しか出土していないが、平安時代から中世の遺構とみられ、谷水田の東部に沿うような配置である点から灌漑用水路と考えられる。

SD002～013 (Fig.14・15) SD001以外に谷水田周辺で溝を5条以上検出したが、そのうち人為的な可能性が高いのは、SD013とSD004・010である。前者は幅50cm前後、深さ10cm前後の小溝で覆土はSD001に類似する。検出した谷水田域のほぼ中央を南北に通る。後者は水口に取りつく小溝とみられるもので、SX009周辺が水口の流水によるえぐれとみられる。SP006、SD005も水口等の水量調整施設に伴う遺構である可能性がある。

②大畦畔

SX014 (Fig.14・15) 谷水田の西縁で検出した南北方向に伸びる盛土である。幅200cm前後、高さ30cm以上で、上層に礫を多量に含む。検出長は16mである。礫は畦の根固めのために混和されたものとみられ、本遺構は谷水田の西辺を限る大畦畔と考えられる。盛土周辺から平安時代以降の土器、陶磁器、瓦が出土する。

調査区北部、V区の谷水田層でも、東西方向に分布する礫群があり、その方向の畔が存在した可能性があるが、盛土層を明確に検出することはできなかった。

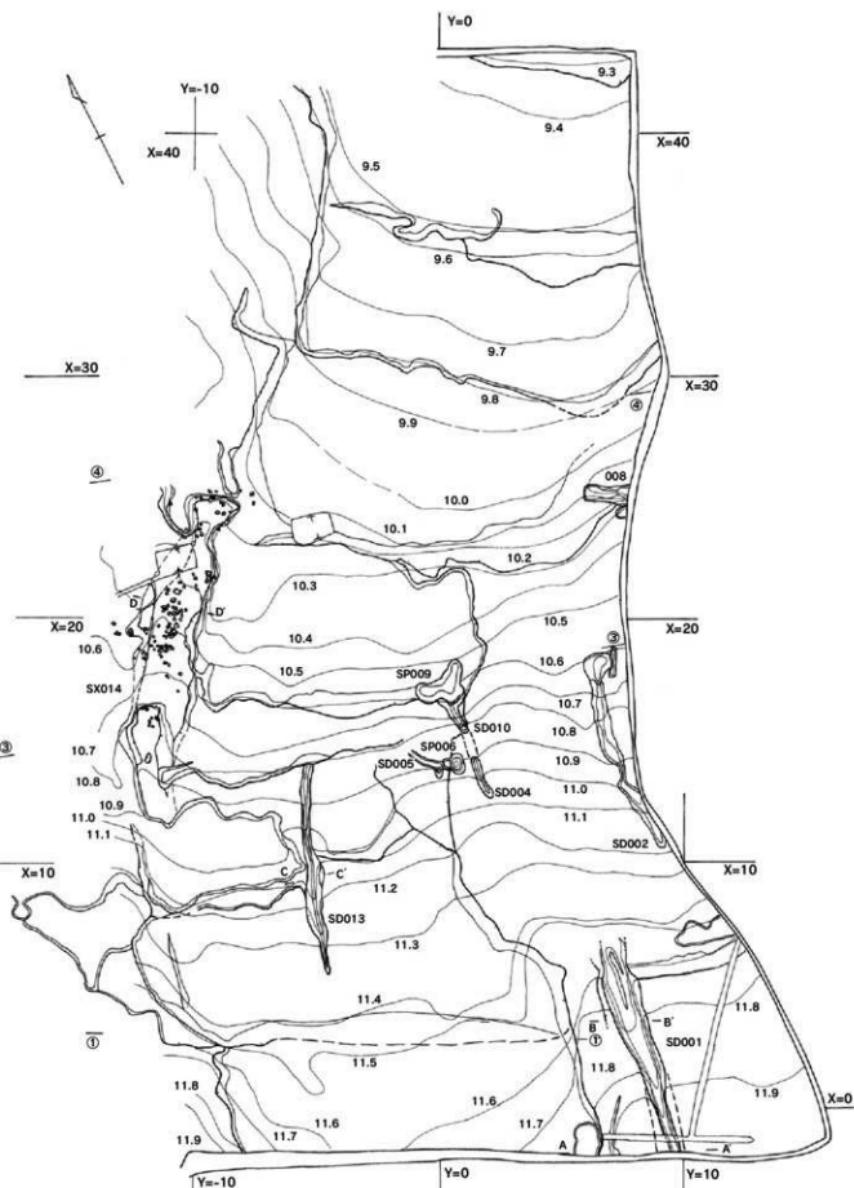


Fig.14 谷南部（Ⅰ・Ⅱ区）第1面（水田関連遺構）実測図（1/200）

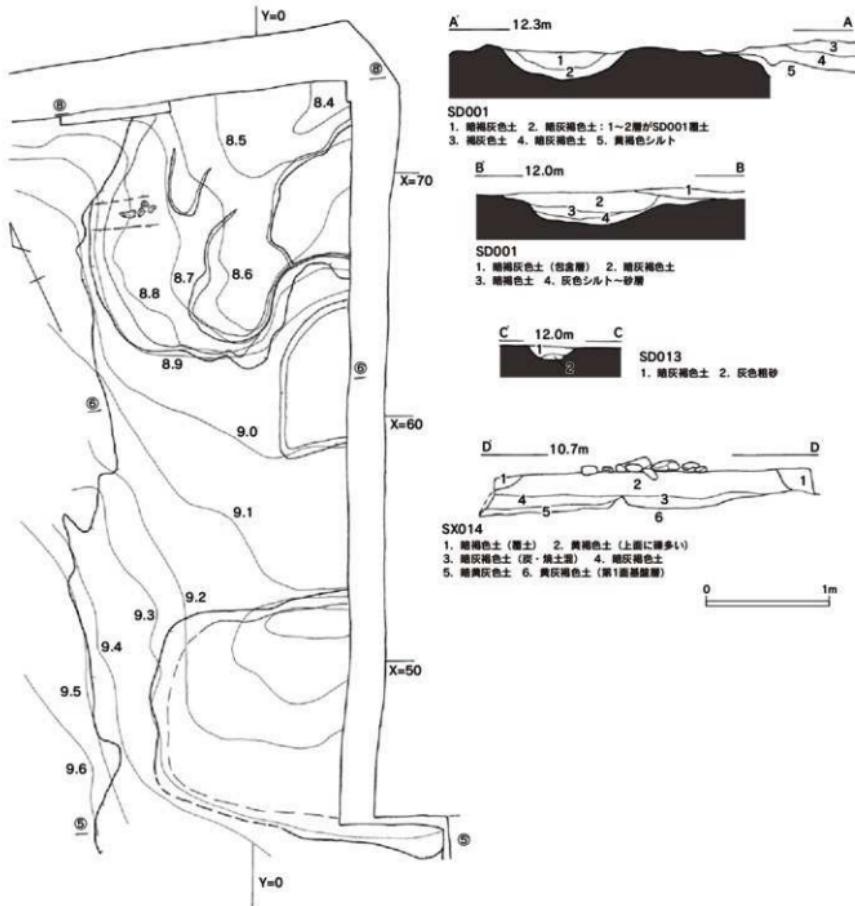


Fig.15 谷北部（V区）第1面（水田間連遺構）実測図（1/200）、土層断面図（1/40）

2) 平安時代の遺構

調査区の中央から西側の丘陵斜面や谷の造成地で9～10世紀の掘立柱建物、段造成、土坑、鍛冶炉、廃滓坑、火葬墓などを検出した(Fig.3, Tab.2)。これらの遺構分布範囲が当該期の集落域と考えられる。遺構検出面はIV層または地山上面で、前述の水田関連遺構に先行するものと考えられる。遺構面上層には平安時代後半以降の包含層(Ⅰ層)があるが、Ⅱ区西部周辺は出土量が多く、SU012(PL2-2)のように集中的に出土する地点もある。調査区南西部の丘陵斜面には、当該期の遺構がより多く存在した可能性が高い。

掘立柱建物は集落域のほぼ全域に広がるが、SB16を除くと大型建物はほとんどみられない。調査区内から瓦が一定量出土しているが、瓦葺建物とは考えにくく、礎石建物もみつかっていない。丘陵斜面にはSH404のような段造成がみかれているが、前述のような包含層の状況から、より多くの平安時代の遺構が存在した可能性が考えられる。ゴミ穴とみられる土坑は集落域の南東部に集中する傾向がある。鍛冶炉は集落域南部でもみつかっているが、北部に多く、廃滓坑2基前後とセットで分布している。精錬用と鍛錬用の両者が存在する。火葬墓は、当該期の遺構分布の北限付近であるが、集落域とは近接しており、墓域として独立した立地にはなっていない。

①段造成(SH)

SH404 (Fig.16) IV区北部の丘陵斜面で検出した遺構で、新・旧の溝2条を有する。溝は東側(谷側)が古く、西側(山側)が新しい。溝は幅80cm前後、深さ20cm前後で、南北長700cm程度検出したが南と北がともに後世の段落ちにより消失している。この遺構は丘陵斜面を平坦面に造成した際の後背溝であろう。溝の重複は平坦面を山側に拡張した際に再掘削されたものとみられる。これに接する箇所で検出した鍛冶炉SL402は、新段階に造成された平坦面にともなうものであろう。

②掘立柱建物(SB)、柵列(SA)

平安時代のものとみられる掘立柱建物や柵列を10棟以上検出した。柱穴が小さく、覆土は暗褐色土主体である。主軸方位は正方位よりやや東に偏る建物が多い。建物全体を検出できなかつたが、SB16は大型建物である可能性がある。

SA1 (Fig.17) 調査区南西部、SH404の東に位置する、主軸方位がN-27.5°-Wの東西方向の柱穴列である。地山(表土直下)での検出である。長さ3.6m、柱間1.8m前後を測る。柱穴の平面形は円形で、径30cm、柱径15cm前後を測る。時期は不明確であるが、平安時代と考えられる。

SB1 (Fig.17) 調査区南西部に位置する、東西方向2×2間の側柱建物。棟持柱を有する。第1面での検出。主軸方位はN-2.9°-Eで、梁行約4.3m、桁行4.4m、柱間1.6~2.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、径30cm、柱径15cm前後を測る。時期は不明確であるが、平安時代と考えられる。

SB2 (Fig.17) 調査区南部中央に位置する、南北方向1×2間の側柱建物。第1面での検出。主軸方位はN-12.1°-Eで、梁行約3.6m、桁行5.2m、桁行の柱間2.6m前後を測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm、柱径20cm前後を測る。時期は不明確であるが、平安時代と考えられる。

SB8 (Fig.18) 調査区中央部に位置する、南北方向1×3間の側柱建物。第2面での検出。主軸方位はN-4.1°-Eで、梁行約3.2m、桁行6m前後、桁行の柱間は1.6~2.4mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm、柱径15cm前後を測る。SK5124を切る。時期は不明確であるが、平安時代と考えられる。

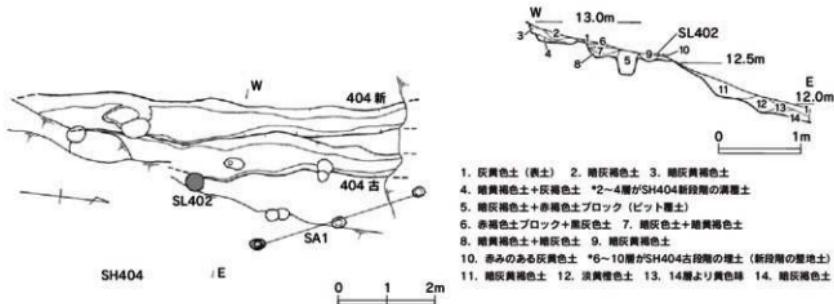


Fig.16 段造成 (SH404) 実測図 (1/100、1/60)

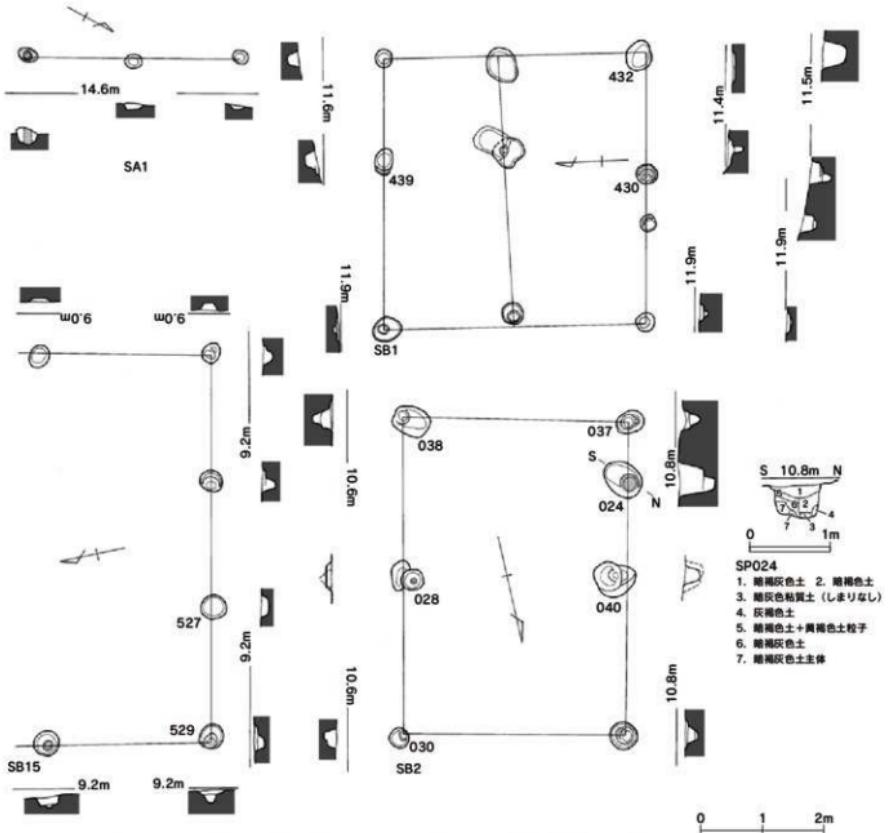


Fig.17 柱穴列、掘立柱建物 (SA1・SB1・2・15) 実測図 (1/80、1/60)

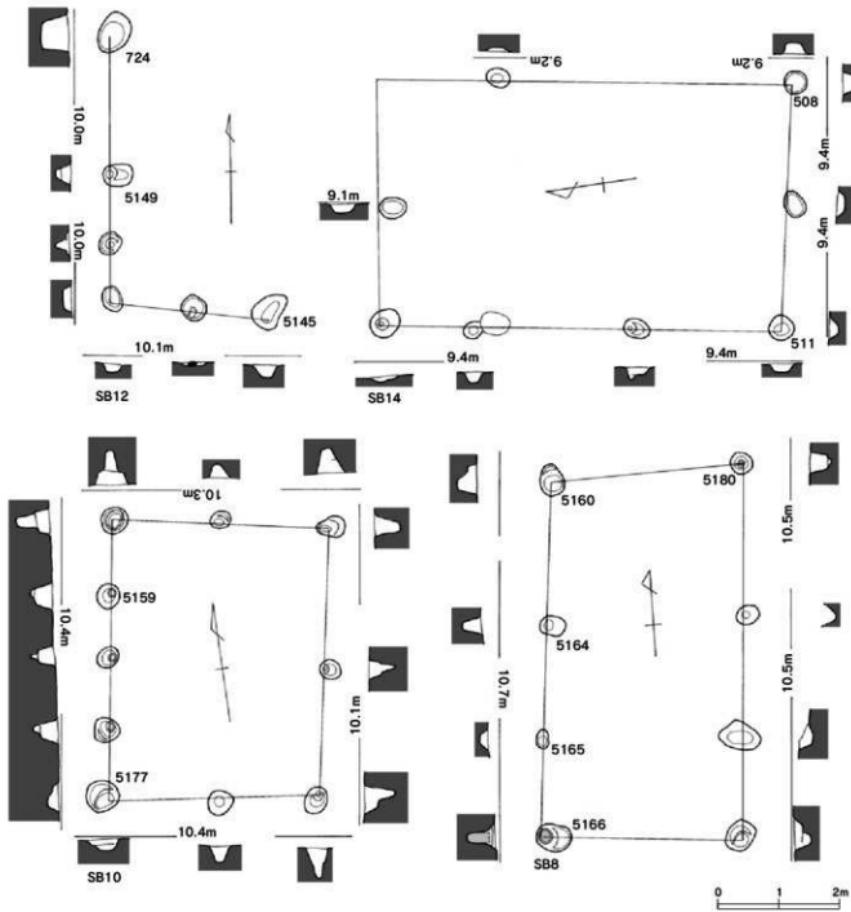


Fig.18 堀立柱建物 (SB5・10・12・14) 実測図 (1/80)

SB10 (Fig.18) 調査区中央に位置する、南北方向 2×2 間相当の側柱建物（山側の西辺は柱間1.2m前後で4間）。第2面での検出。主軸方位はN-8.5°-Eで、梁行約3.5m、桁行4.4m前後、柱間は1.2~2.4mを測る。柱穴の平面形は円形で、径30cm、柱径12cm前後を測る。平面的には鍛冶炉SL503と重複するが⁵、この建物の方が先行するとみられる。時期は不明確であるが⁵、平安時代と考えられる。

SB12 (Fig.18) 調査区北部中央に位置する、南北方向 2×3 間の側柱建物。北辺と東辺の柱穴列は消失しているようである。第2面での検出。主軸方位はN-1°-Eで、梁行約2.6m、桁行約4.4m柱間は1~2.2mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm、柱径15cm前後を測る。南辺中央の柱穴は根石を有する。時期は不明確であるが⁵、平安時代と考えられる。

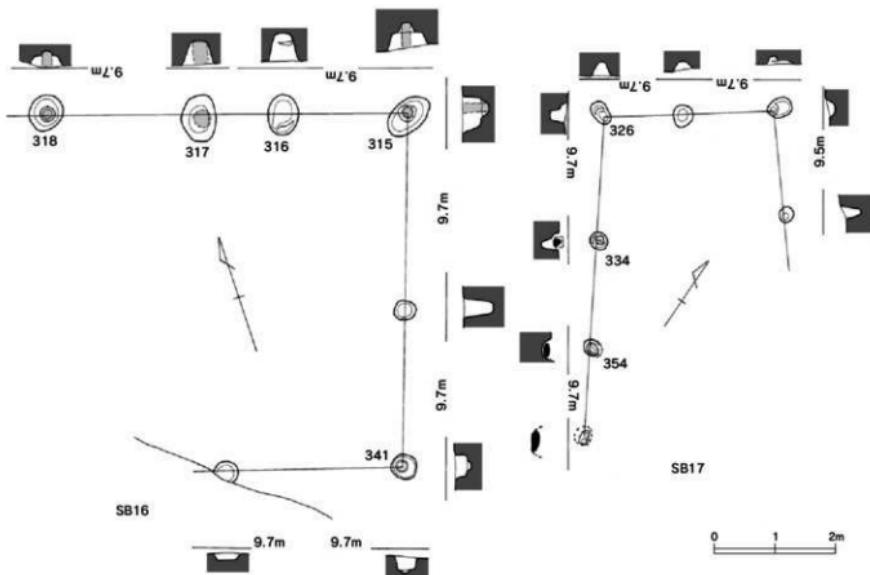


Fig.19 掘立柱建物 (SB16・17) 実測図 (1/80)

SB14 (Fig.18) 調査区北東部に位置する、南北方向 2×3 間の側柱建物。東辺の柱穴は2基消失しているようである。地山（表土直下）での検出。主軸方位はN-8.2°-Eで、梁行約4m、桁行約6.6m、桁行の柱間は2~2.4mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm、柱径15cm前後を測る。時期は不明確であるが、平安時代と考えられる。

SB15 (Fig.17) 調査区北東部に位置する、東西方向 $2 ? \times 3$ 間の側柱建物。地山（表土直下）での検出。主軸方位はN-12°-Eで、桁行約6.4m、桁行の柱間は2m前後、梁行の柱間は2.8mを測る。梁行1間分は調査区外である。柱穴の平面形は円形で、径30cm、柱径15cm前後を測る。時期は不明確であるが、平安時代と考えられる。

SB16 (Fig.19) 調査区北部のⅢ区に位置する、東西2間以上、南北2間以上の側柱建物。東西方向で 2×3 間の可能性が高いのではないかろうか。第1面での検出。主軸方位はN-17.4°-Eで、柱間は2.6~3.3mを測る。柱穴の平面形は円形で、径50cm、柱径25cm前後を測る。平面的にSB17と重複するが、柱穴の切り合いがなく、先後関係は不明。時期は不明確であるが、平安時代と考えられる。

SB17 (Fig.19) 調査区北部のⅢ区に位置する、東西方向 2×3 間以上の側柱建物。第1面での検出。主軸方位はN-33.7°-Wで、梁行約2.8m、桁行5.2m以上、桁行の柱間は1.5~2m、梁行の柱間1.3m前後を測る。柱穴の平面形は円形で、径30cm、柱径15cm前後を測る。根石を有する柱穴が多いが、SP334では下層に須恵器甕の体部片が充填されていた。時期は平安時代と考えられる。

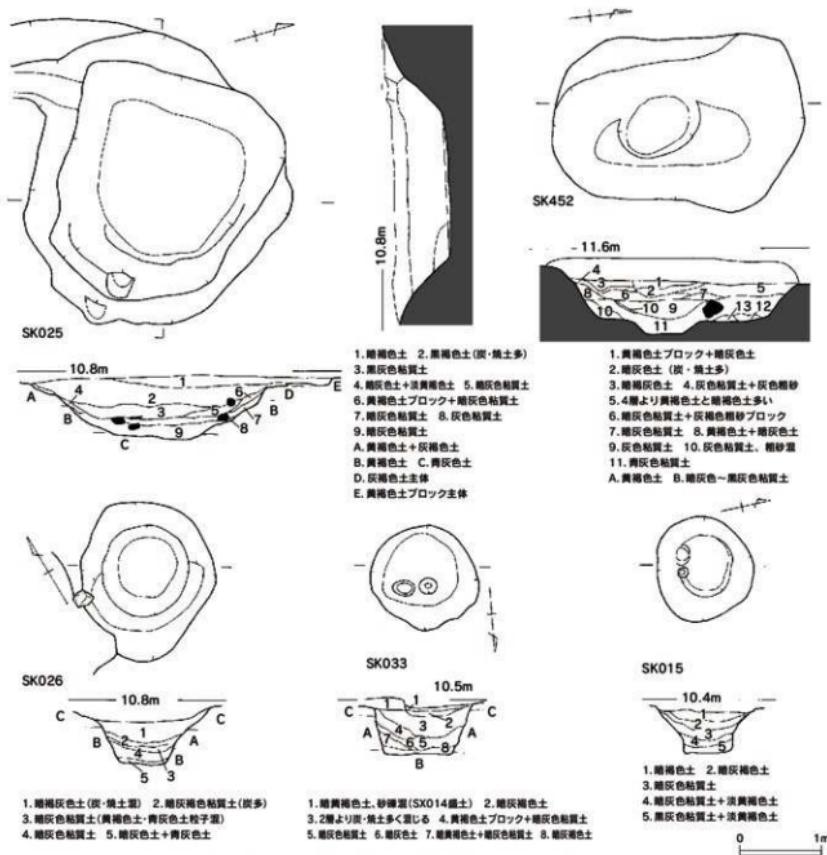


Fig.20 土坑 (SK015・025・026・033・452) 実測図 (1/60)

③土坑 (S K)

平安時代の魔淨坑を除く土坑は5基以上あり、調査区南部の中央部（集落域ではその東縁）に集中して分布している。第1面の平安時代の整地層で検出できる遺構で、一部はSX014の下層となっている。SK025などは出土土器が多いが、土師器、黒色土器を主体とするもので、特殊な遺物は含まれない。覆土には炭、焼土などが多く含まれる。遺構の性格については、集落域の縁辺に配置された日常用のゴミ穴と考えられる。

SK015 (Fig.20) 平面形は円形に近く、径1.2×1.3m、深さ58cm以上を測る。掘方下部は壁が立つが、上部は開いている。覆土は上層が暗褐色土主体、下層は暗灰色～黒灰色の粘質土が主体となる。平安時代の土器が出土しており、時期は10世紀と考えられる。

SK025 (Fig.20) やや隅丸方形に近い大型の土坑で、径3.2×3.6m以上、深さ77cmを測る。掘方はすり鉢状である。覆土は上層が黒褐色土主体、下層は暗灰色粘質土である。SK026と接するが、先後関係は不明である。平安時代の土師器杯、黒色土器、須恵器甕などがまとまって出土しており、時期は10世紀前半と考えられる。

SK026 (Fig.20) 平面形は楕円形で、径1.65×2m、深さ73cm以上を測る。掘方下部は壁が立ち気味で、上部は開き気味である。覆土は上層が暗褐灰色土主体、下層は暗灰色粘質土主体である。平安時代の土器が出土しており、時期は10世紀と考えられる。

SK033 (Fig.20) 平面形は円形で、直径1.35m前後、深さ62cmを測る。掘方の壁は立ち気味である。覆土は暗灰褐色土を主体とする。上面の一部はSX014の盛土に覆われている。平安時代の土器が出土しており、時期は10世紀と考えられる。

SK452 (Fig.20) 上記の土坑群とはやや離れて、調査区南部に位置する。平面形は隅丸長方形に近く、長さ3.1m、幅1.95mを測る南北方向の土坑である。掘方は二段になっており、上段は深さが65cm、下段は径1m前後で深さ18cmである。下層（9層以下）の覆土は灰色～青灰色粘質土であり、置土とみられる。上層は暗褐灰色土と暗灰色粘質土を主体とし、粗砂が混じる。1・2層は再掘削後の覆土かもしれない。他の土坑とは異なり、埋没過程で、底面を整えたり、再掘削しているようである。遺物は平安時代の土器が出土しており、時期は10世紀と考えられる。

④鍛冶炉（SL）

鍛冶炉は7基を検出した。調査区西側で中央部から北部に多い（主にV、VI区）。遺構面は平安時代の整地層とみられる第1面である。炉には大小あり、大型のSL505、5118、604等は精錬鍛冶炉、小型のSL402、502、503等は鍛錬鍛冶炉の可能性が高いと考えられる。炉の南東側に近接して廃滓坑か2基前後存在するものが多く、炉と一連のセット関係にあると考えられる。近くで炉がみつかっていない廃滓坑も4基ほどあり、遺存していない炉が数基以上あったとみられる。炉の周囲を精査したが、関連する建物等の遺構は明らかにできなかった。上屋は存在したと考えられるが、浅い柱穴の簡単な掘立柱建物であろうか。なお、炉や廃滓坑出土の鍛冶関連遺物については、未整理であるため、炉の機能や生産物については、次の報告で考察を加えたいと思う。

SL402 (Fig.21) 調査区南部に位置し、段造成のSH404にともなう遺構とみられる。付近で廃滓坑はみつかっていないか、東側（谷側）に存在したものとみられる。南北12cm、東西18cm、深さ7cmである。東側（谷側）は掘方が失われており、炉床付近の遺存であるか、小型の鍛冶炉とみられる。火床が青黒灰色に還元硬化している。

SL502 (Fig.21) 調査区北部に位置し、付近には廃滓坑のSK501等が存在する。炉床下のみの遺存であり、還元硬化の範囲は東西13cm、南北9cmで周囲の酸化被熱の範囲は東西30cm、南北23cmである。小型の鍛冶炉とみられる。

SL503 (Fig.21) 調査区中央に位置し、付近には廃滓坑のSK593等が存在する。掘方は南北25cm、東西35cmの小判形に近く、火床は中央の南北16cm、東西24cm、深さ10cmである。厚み5cmほどの粘土を貼って火床を構築している。火床は青黒灰色に還元硬化している。炉の東部床面に鉄滓が沈着しており、羽口設置箇所付近ではないかとみられる。この遺構については、切り取り保存を行ったため、炉の断ち割りは行っていない。

SL505 (Fig.21) 調査区中央に位置し、付近には廃滓坑のSK590・591等が存在する。掘方は南北40cm、東西73cm前後的小判形に近く、火床は中央の南北35cm、東西65cm、深さ12cmである。厚

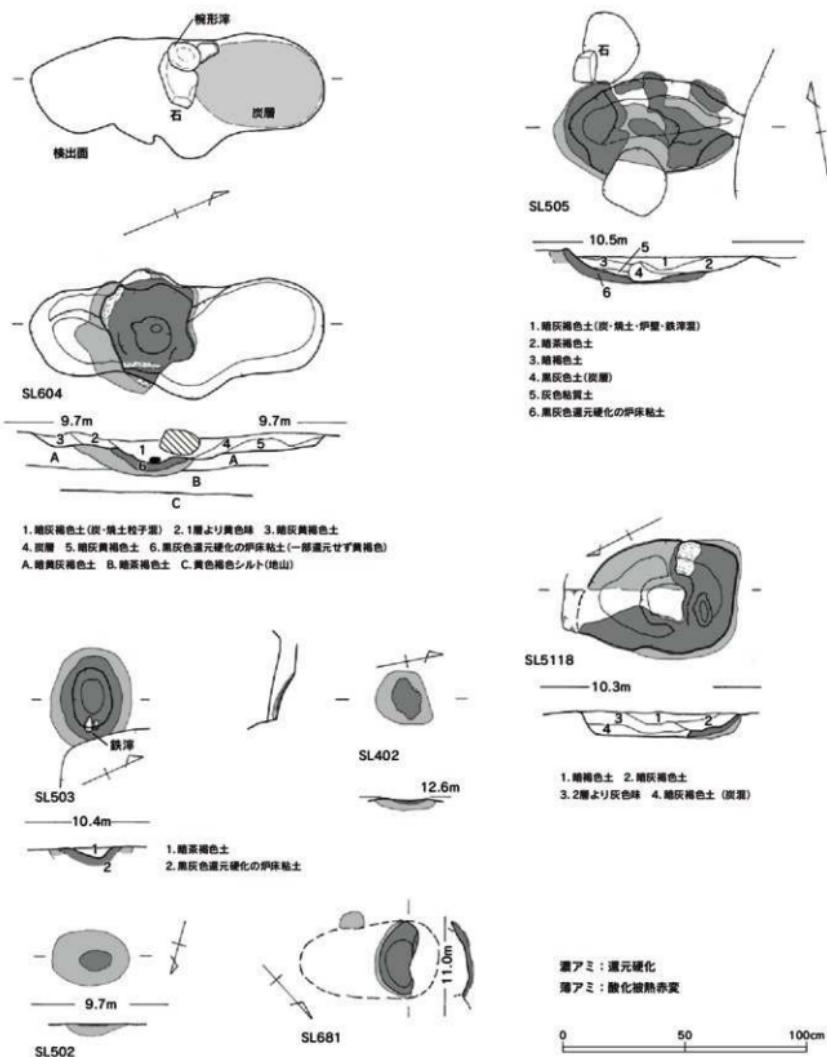


Fig.21 錫冶炉 (SL402・502・503・505・604・681・5118) 実測図 (1/20)

み3cmほどの粘土を貼って火床を構築している。火床は青黒灰色に還元硬化しているが、上部の一部は還元せずに、黄褐色のままとなっている。炉床の一部が欠損しており、生成物を取り出す際に炉床ごと掻き出されたとみられる。炉の両側を切る掘り込みはその際の掘削によるものであろう。炉の東側が溝状にすぼまっており、還元の度合いが弱いことから、羽口設置箇所であると考えられる。この遺構については、切り取り保存を行ったため、炉の断ち割りは行っていない。

SL5118 (Fig.21) 調査区中央に位置し、付近には廃滓坑のSK5119等が存在する。掘方は南北65cm、東西45cm、火床は一回り小さく、深さは8cmである。厚み3cmほどの粘土を貼って火床を構築している。火床が青黒灰色に還元硬化しているが、北側は還元や硬化の度合いが弱く、北東側は炉床が欠損している。羽口設置箇所は東側から北側であろう。

SL604 (Fig.21) 調査区北部に位置し、付近には廃滓坑のSK605・606等が存在する。掘方は南北120cm、東西40cm前後の小判形に近く、火床は中央の径37cm、深さ13cmである。厚み4cmほどの粘土を貼って火床を構築している。火床は青黒灰色に還元硬化しているが、上部は一部還元せずに、黄褐色のままとなっている。炉の検出面では碗形浮や碟（鉄床ではない）が出土しており、北部に炭層がひろがる。羽口設置箇所が明確ではないが、還元の度合いが弱い南西側か東側と考えられる。

SL681 (Fig.21) 調査区西部に位置する。付近で関連する廃滓坑等の遺構はみつかっていない。遺存の悪い炉で、火床は南北32cm、東西15cm、深さ7cmを検出した。厚み3cmほどの粘土を貼って火床を構築しており、火床は青黒灰色に還元硬化している。周囲の酸化被熱部も一部しか遺存していないが、その範囲から図のような東西方向を長軸とする鍛冶炉ではないかと考えられる。

⑤廃滓坑（SK）

掘方は通有の土坑と同じであるが、鉄滓や輪の羽口がまとまって出土するものを、廃滓坑とした。鍛冶炉の南東側に近接して存在するものが多く、検出面も鍛冶炉と同じく第1面である。

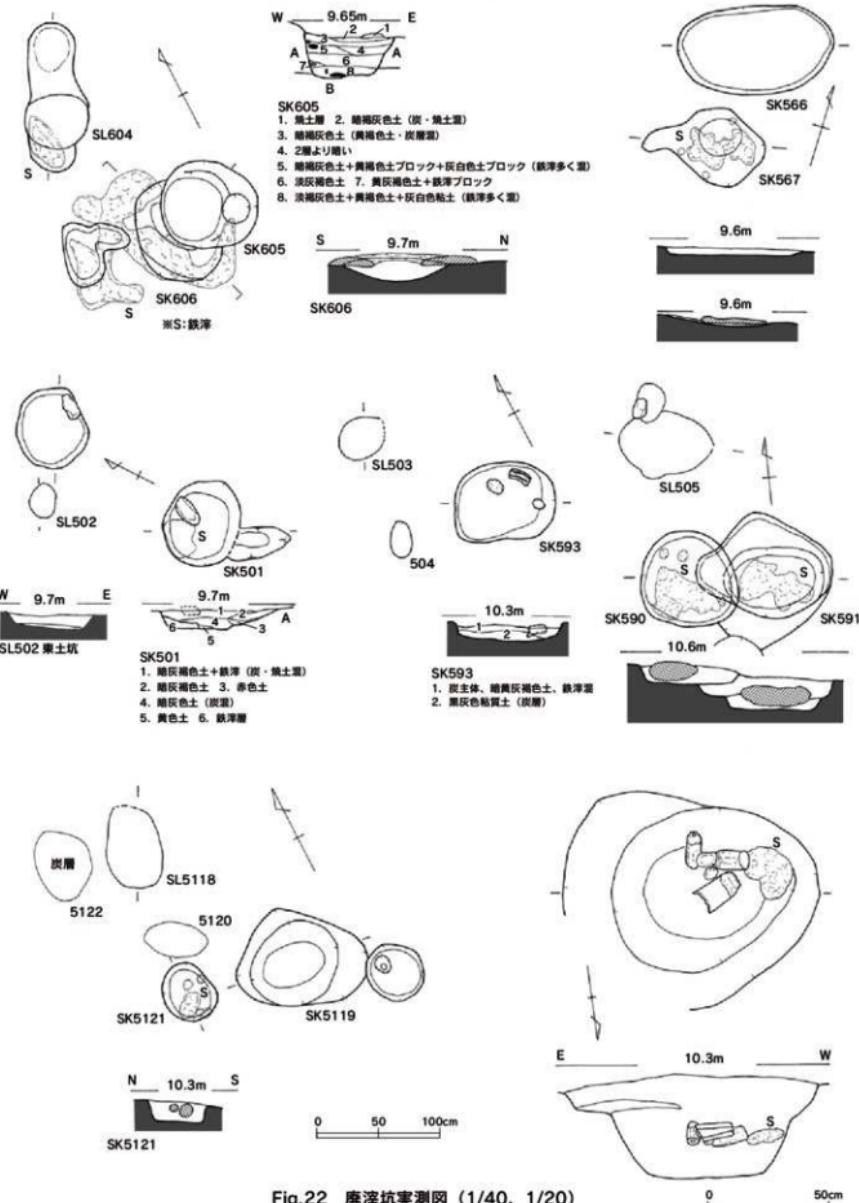
SK501 (Fig.22) SL502の南側90cmに位置する。平面62×70cmの略円形で、南側に長さ25cmの溝状の掘り込みが付く。深さは20cmである。上層の1層と下層の北側（炉に近い側）6層が鉄滓の集中する層である。また、上層から鉄床とみられる碟が出土している。鍛冶炉SL502の東側にも同規模の土坑があるが、鉄滓等はほとんど出土していない。

SK566・567 (Fig.22) 調査区北側に位置する廃滓土坑2基である。SL604やSL502とは距離があるので、別に近在する鍛冶炉があったと考えられる。SK566は東西方向の楕円形で75×130cm、深さ5cmを測る。SK567は南北64cm、東西100cm、深さ9cmを測る。

SK590・591 (Fig.22) SL505の南側50cmに位置する廃滓土坑2基である。SK591は上段が112×114cm、深さ18cmで下段が60×82cm、深さ14cmを測る。覆土は暗灰褐色土で、下段から鉄滓が集中的に出土した。これを切るSK590は直径約80cmの略円形で深さ16cmを測る。遺構の南西部を中心に鉄滓が集中的に出土した。

SK593 (Fig.22) SL503の南東側75cmに位置する。東西84cm、南北63cm、深さ15cmを測る。覆土は炭層を主体とし、鉄滓や輪の羽口片が混じる。この遺構の西側40cm（鍛冶炉SL503の南側56cm）には暗赤褐色の酸化面SK504があるが、鉄床である可能性が高い。

SK5119・5121 (Fig.22) SL5118の南側70cmにSK5121、南東側90cmにSK5119が位置する。他にもSL5118周囲には、西側にSX5122（炭層）や南側にSX5120（鉄滓沈着、酸化面）などが平面的に検出された。後者は鉄床かもしれない。SK5119は上段が東西110cm、南北80cm、深さ15cmで下段が直径70cm前後、深さ27cmを測る。覆土は暗灰褐色土で、鉄滓のほか、輪の土製羽口がまとめて出土した。SK5121は直径50cm前後の略円形で深さ17cmを測る。



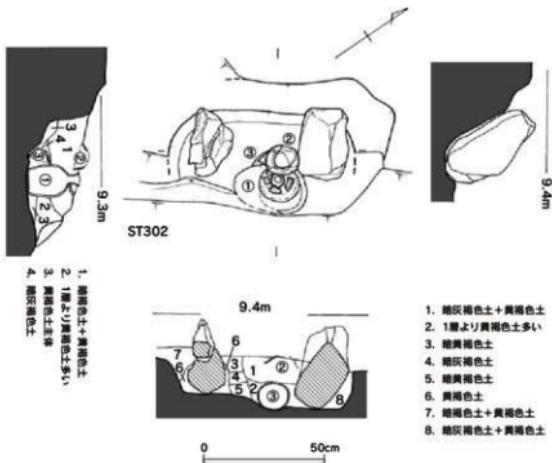


Fig.23 火葬墓 ST302 実測図 (1/20)

⑥火葬墓

ST302 (Fig.23) 調査区北部、Ⅲ区に位置する。古墳時代～平安時代の遺構分布のほぼ北限に位置する遺構である。土坑状の掘方は南北90cm、東西55cm以上、深さ32cmを測る。東側は谷に面するが、後世の削平により、遺構が消失している。遺構の中央部には正位の須恵器有段口縁平底瓶(①)があり、その上面やや西側に伏位の土師器杯(②)がある。また須恵器瓶の西側下位からは立て掛けるように置かれた土師器杯(③)も出土している。須恵器内の土は精査したが、出土物はなかった。遺構の北側と南西隅には長さ30cm超の礫が立て置かれている。南側の礫は破碎しているが、これは表土剥ぎ時に Yunpo のパケットで引っ掛けたことによる。覆土は暗褐色土と黄褐色土が混合したものが主体で、人為的な埋土とみられる。

人骨等の発見はなかったものの、①の須恵器を藏骨器とし、墓壇に配石するタイプの火葬墓である可能性が高いであろう。墓壇の東側は消失しているものの、本来は墓壇の四隅に礫を立て置いていたものとみられる。②の土師器杯は遺構検出面での出土であるが、①の須恵器の蓋であったものが、後世の開墾等によって二次的に移動したものではなかろうか。③の土師器杯は副葬又は供獻品とみられる。

出土土器 (Fig.39-21～23) より時期は9世紀後半とみられる。

3) 古墳時代の遺構

調査区西部の第2面を中心として、古墳時代後期後半から末（6世紀後半から7世紀前半）の掘立柱建物、竪穴建物（壠建ち建物）、段造成、周溝状遺構（平地式建物の外周溝か）、土坑、屋外炉、土器棺墓等を検出した。（Fig.4、Tab.2）。また、調査区東部の谷下層においても当該期の水路とみられる溝を検出した。古墳時代後期より古い遺構については、谷底面付近で検出した古墳時代中期前半のピットや時期不明の土坑等があるが、ごく少数にすぎない。

谷下層の溝は古墳時代後期後半に機能していたもので、古墳時代末には谷の埋没が進んでその機能を失う。集落域の西縁（丘陵斜面上位側）に点在する竪穴建物や段造成等はその段階に營まれたものである。竪穴建物は壁立ち構造のものが多く、石組のカマドを有するものがある。掘立柱建物や平地式建物（外周溝）は丘陵斜面裾の緩傾斜地を中心に分布している。前者は古墳時代後期後半から末に及ぶものであるが、高床倉庫（ 2×2 間総柱）は2棟と少ない。後者は古墳時代後期後半を中心とするもので、「連接土坑群」や屋外炉等も同時期とみられる。

①掘立柱建物（SB）

8棟以上を検出した。柱穴の径が60cmを超えるものが多く、覆土は主として暗褐色土である。柱痕跡部はやや黒みがあり、裏込め部は地山の黄褐色土が混じる。建物型式は 1×2 間の小形の側柱建物が多いが、 2×3 間側柱建物1棟や 2×2 間総柱建物2棟などを含む。後者は当該期に通有の高床式倉庫である。

SB3 (Fig.24) 調査区南部に位置する、正方形 2×2 間の総柱建物。地山（表土直下）での検出。主軸方位はN-2.8°-Eで、一辺2.8m規模である。柱間は1.2~1.4mを測る。柱穴の平面形は円形で、径60cm、柱径25cm前後を測る。時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

SB4 (Fig.24) 調査区南部に位置する、南北方向 1×2 間の側柱建物。地山（表土直下）での検出。主軸方位はN-7.3°-Wで、梁行約2m、桁行4.5m前後、柱間は1.8~2.6mを測る。柱穴の平面形は円形で、径30~70cm前後、柱径20cm前後を測る。SD406・409を切る。時期は不明確であるが、古墳時代後期後半から末と考えられる。

SB5 (Fig.24) 調査区中央に位置する、東西方向 1×2 間の側柱建物。第1面での検出。主軸方位はN-12.1°-Eで、梁行3.3~3.6m、桁行4.6m前後、桁行の柱間は2~2.4mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40~100cm前後を測る。SK5124等を切る。時期は不明確であるが、古墳時代後期後半から末と考えられる。

SB6 (Fig.24) 調査区北部に位置する、東西方向 1×2 間の側柱建物。第1面での検出。主軸方位はN-9.4°-Eで、梁行2.2m前後、桁行2.8m、桁行の柱間は1.4mを測る。柱穴の平面形は円形で、径60cm前後、柱径20cm前後を測る。SB13やSD5134と重複するが、いずれよりも新しい遺構とみられる。時期は不明確であるが、古墳時代後期後半から末と考えられる。

SB7 (Fig.24) 調査区中央から西部に位置する、東西方向 1×2 間の側柱建物。第2面での検出。主軸方位はN-35.4°-Wで、梁行2.9m、桁行3.2m、桁行の柱間は1.5~1.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、径80cm前後を測る。柱痕跡は検出できなかつたが、柱穴下段の掘方から柱径30cm前後である可能性がある。時期は不明確であるが、古墳時代後期後半から末と考えられる。

SB9 (Fig.24) 調査区西部に位置する、東西方向 1×3 間の側柱建物。第2面での検出。主軸方位はN-15.5°-Wで、梁行2.1~2.3m、桁行3.4~3.6m前後、桁行の柱間は1.4mであるが、東1間は0.9m前後である。柱穴の平面形は円形で、径60cm前後を測る。柱径20cm前後を測る。時期

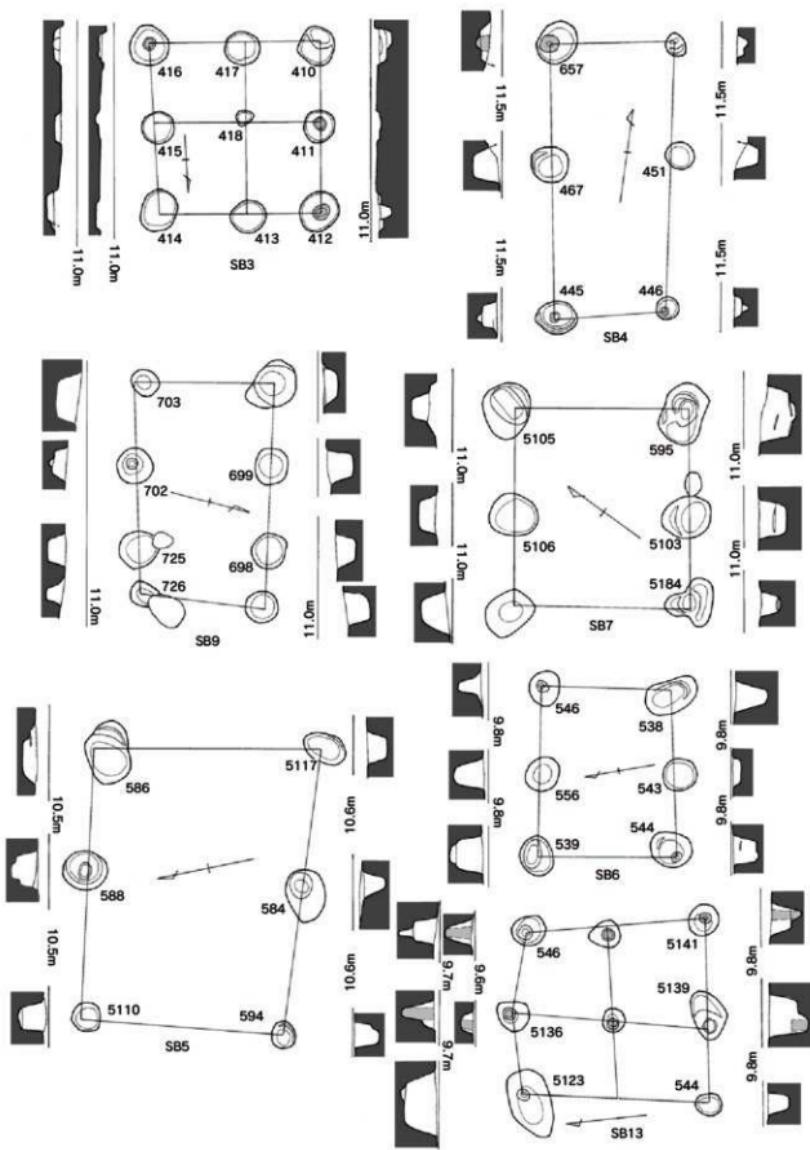


Fig.24 据立柱建物 (SB3~7・9・13) 実測図 (1/80)

は不明確であるが、古墳時代後期後半から末と考えられる。

SB11 (Fig.25) 調査区中央部に位置する、南北方向 2×3 間の側柱建物。第2面での検出。主軸方位はN-8.4°-Eで、梁行3.5m、桁行5.2m前後、柱間は1.6~1.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、径60~70cm前後、柱径20~25cm前後を測る。SD5142とSK5125を切る。時期は不明確であるが、古墳時代後期後半から末と考えられる。

SB13 (Fig.24) 調査区北部に位置する。正方形 2×2 間の総柱建物とみられるが、西辺中央の柱穴は検出ミスにより明らかでない。第2面での検出。主軸方位はN-6.2°-Eで、一辺3.1m規模である。柱間は1.4~1.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、径50cm前後が多いが、長軸100cmを超えるものもある。柱径は20cm強である。SD5134を切る。時期は不明確であるが、古墳時代後期後半から末と考えられる。

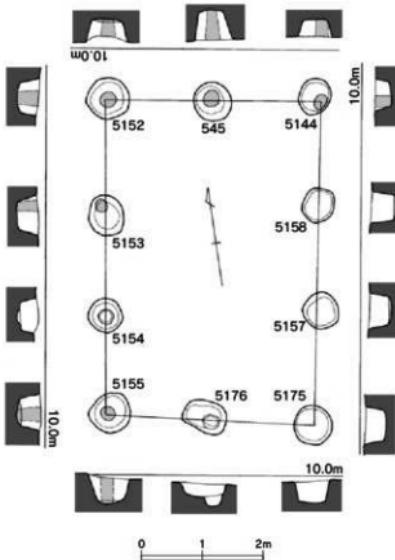


Fig.25 挖立柱建物 (SB11) 実測図 (1/80)

②竪穴建物 (SI)

調査区西部の丘陵斜面で4棟以上を検出した。山側は壁溝や壁が、地山まで掘り込まれているが、谷側は遺構プランが明確ではないものが多い。石組カマドを有するもの2棟、壁建構造のもの2棟などがある。掘立柱建物や周溝状遺構（平地式建物）とは分布（立地）をやや異にしており、時期も古墳時代末の7世紀初頭～前半とみられる。SH401も当該期の遺構であるが、段造成遺構として次の③で報告する。

SI1 (Fig.26) 調査区南部、谷西肩付近の地山から整地層の面で検出した。遺構西部では、地山を掘り込んだ住居壁や壁際溝（SD461）を検出できるが、カマドSL460周辺は平安時代以降の整地層直下で検出したもので、谷下層の自然堆積上の整地層（1~4層）を床とする。谷下層の埋没が進んでから營まれた建物であり、SD1000・1001等よりは層位的に新しい。遺構東側のプランは不明である。南北約6m、東西3.9m以上の建物である。カマドが建物北部の中央に位置するのであれば、東西長も約6mとなる。床面は山側の地山検出面から20~40cmの深さである。

西辺の壁際溝SD461は幅40cm前後で、浅い溝底で柱穴9基を検出した。柱穴の大きさはまちまちであるが、直径12cm前後の柱（縦材）を30~90cm間隔で配置したとみられる。このような遺構は壁立構造を示すものであり、壁際溝中の小柱穴は壁下地の縦材を埋め込んだ穴とみられる。他辺の壁構造は明らかでないが、床面に主柱がみられないことから、壁建ち建物である可能性が高いと考えられる。

SL460はSI1のカマドである。建物北壁近くの中央に配置されたものである可能性が高いと考えられる。カマドの構築材として袖と支脚に礫を使用する点に特徴がある。袖構築材の礫は長さ35~38cm（袖の長さに等しい）、幅約15cmで、高さ約25cmである。礫上部の焚口側は被熱により黒変しているので、上部は礫が露出していたと考えられる。カマドの天井構築材には粘土等が使用されたと

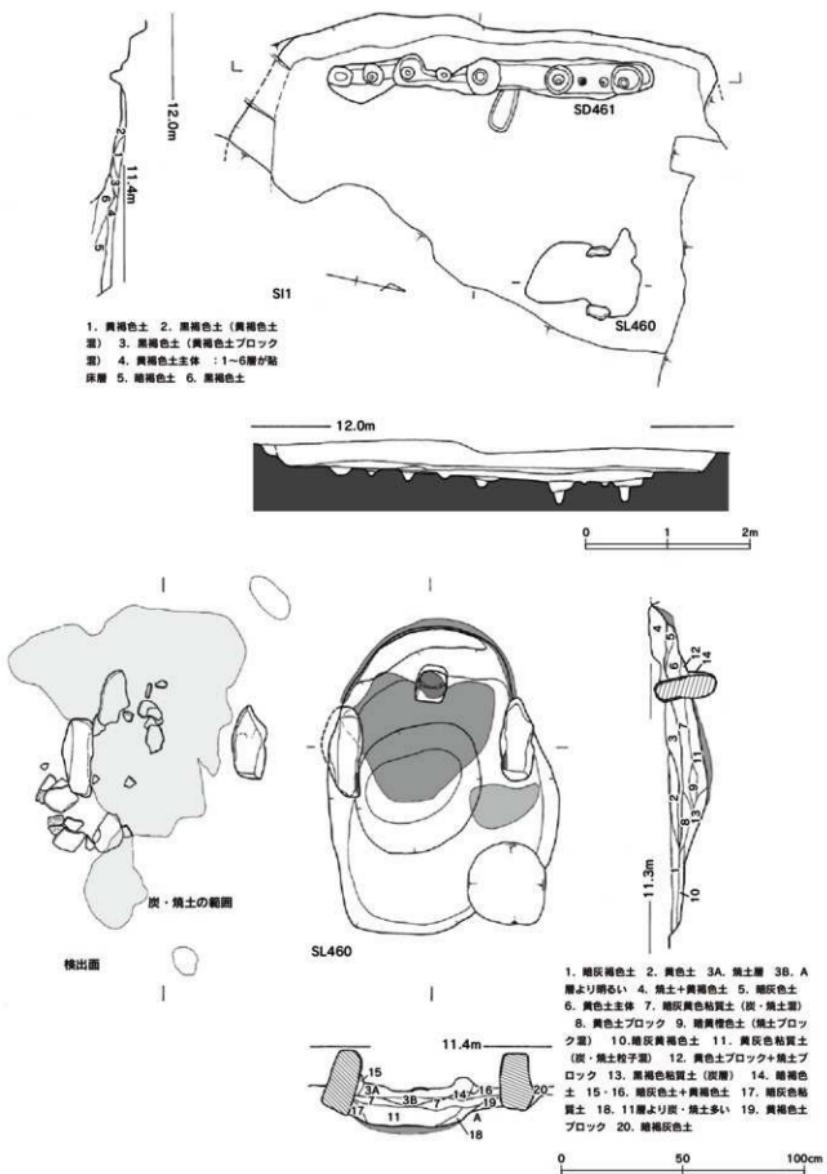


Fig.26 住居址 SI1、竈 SL460 実測図 (1/60, 1/20)

考えられるが、それらしいものを検出することはできなかった。カマドの中央やや奥にも、立石があるが、これは掛け口下の支脚と考えられる。角柱状の細長い礫で、上面は辺約10cm、高さ25cm（下部は埋め込んでおり、カマド床面からの高さは約15cm）である。被熱により、焚口側は黒変、煙道側は赤変している。カマドの掘方は南北127cm、東西95cm、深さ16cmである。中央やや奥の底面が燃焼部の焼土面で、被熱により暗赤褐色を呈している。煙道に通じる北壁も被熱により赤変している。覆土南部下層の13層は炭層であり、焚口と対応している。覆土上層には焼土層があり、土師器甕や甕などがまとめて出土している。明確な祭祀痕跡はみられないが、カマド廃絶後の解体による堆積であろう。

SI2 (Fig.27) 調査区北西部の丘陵斜面肩付において地山から整地層の面で検出した。遺構西部では、一部、地山を掘り込んだ壁際溝（SD607）を検出できるが、カマドSL602周辺は包含層直下で検出したもので、丘陵斜面の旧表土上の整地層（9層）を床とする。遺構検出面がほぼ床面のレベルである。この面上では他に、鍛冶炉の可能性があるSL603や土器R204・205の出土がある。Fig.27にはR207も入れているが、これは建物の範囲外のピットにともなうものとみられる。遺構東側のプランが不明確であるが、南北約6.4m、東西4m以上の建物である。SI1とはほぼ同じ規模とみられる。カマドのSL602は北壁際の西側に偏った配置で、炉のSL603が建物の中央付近に配置されているとみられる。

建物の南へ西辺の壁際溝SD607は幅60cm前後で、深さは山側の地山面から20cmである。平面L字形に検出しがたが、北と東の延長は削平により消失していると考えられる。SI2も主柱穴がみつかっておらず、壁立構造である可能性はあるが、溝底に柱穴はみられない。溝上層から7世紀初頭の須恵器杯身や土師器高杯などが出土している。

SL602はSI2の竈である。検出面では南北1.6m、東西1.8mの焼土・炭の分布がみられるが、西側は土器棺のST609に切られている。SL602もカマドの構築材に礫を使用するものとみられるが、原位置を保つのは東袖のみである（S1）。西袖の石材はカマドの西側で検出した土坑から出土している長さ30cm弱の角礫であろう（S2）。東袖の石材は長さ34cm、幅15cm、高さ18cmである。幅27cm、深さ16cmの掘り込み内に据えられている。この北側で検出した横位の被熱礫（S3）は支脚である可能性がある。東袖の北西側で検出した焼土面がカマドの焼成部である。南北20cm、東西40cmを測る。建物床面からの深さが13cmを測る掘り込みの底面である。焼成部から南30cmほどが焚口であり、その南側の深さ8cmほどの落ち込みはカマドの範囲外とみられる。焚口付近には炭・焼土が多く混じる暗褐色土が堆積している（2層）。以上より、カマドの規模は南北1.5m、東西1m前後と推定できるが、西袖付近は本来の位置が分からぬほど破壊されている。カマドの南西側で、カマド構築材とみられる、被熱粘土塊を検出した。廃絶時にカマドの解体がなされたと考えられる。カマドの東側、袖の礫に接する位置から、土師器甕胴部片と正位の須恵器杯身が上下に出土しているが、カマド廃絶時の祭祀にともなって遺棄されたものとみられる。

SL603はSI2の中央付近で検出した炉である。南北63cm、東西52cmの楕円形プランで、掘方の深さは11cmを測る。2層が焼土層で炉床面である。その下層は炭・焼土を多く含む黒褐色土で、防湿のためのカーボンベットのような人為的置土とみられる。覆土は黒灰色粘質の炭層で、鉄滓が混じる。前述の平安時代の鍛冶炉とは構造が異なっており、周辺からまとまった鍛冶関連遺物の出土はないものの、古墳時代末の鍛冶炉である可能性がある。

SI3 (Fig.28) 調査区西部の地山面で検出した。遺構の西辺と南辺に幅30cm前後の壁際溝があり、それに沿って柱穴が並ぶ壁建ち建物である。北辺と東辺は壁際溝を検出することはできなかつたが、やや窪んでおり、遺構の掘り方と考えられる。建物の規模は南北約4.5m、東西約3.7mであ

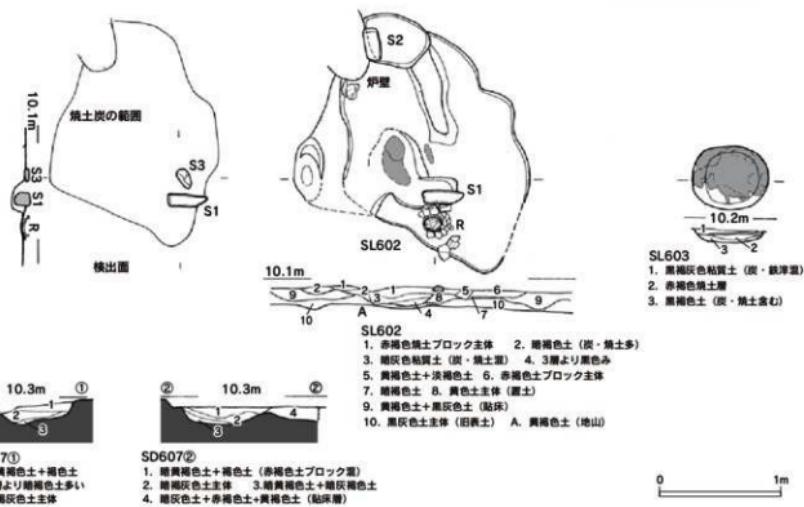
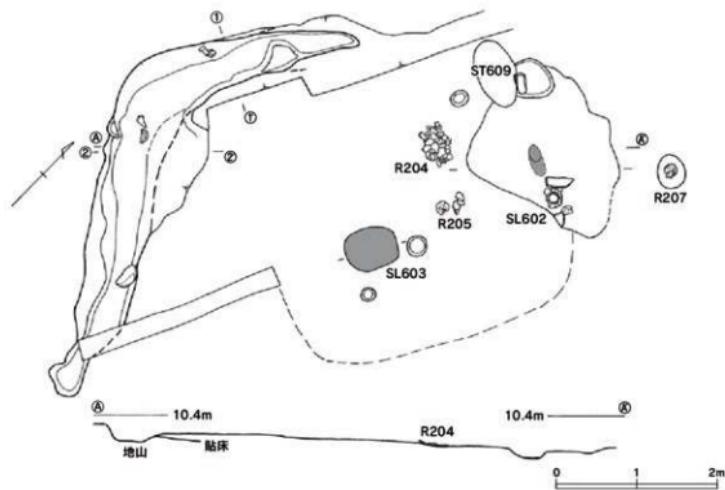


Fig.27 住居址 SI2、竈 SL602 他実測図 (1/60, 1/40)

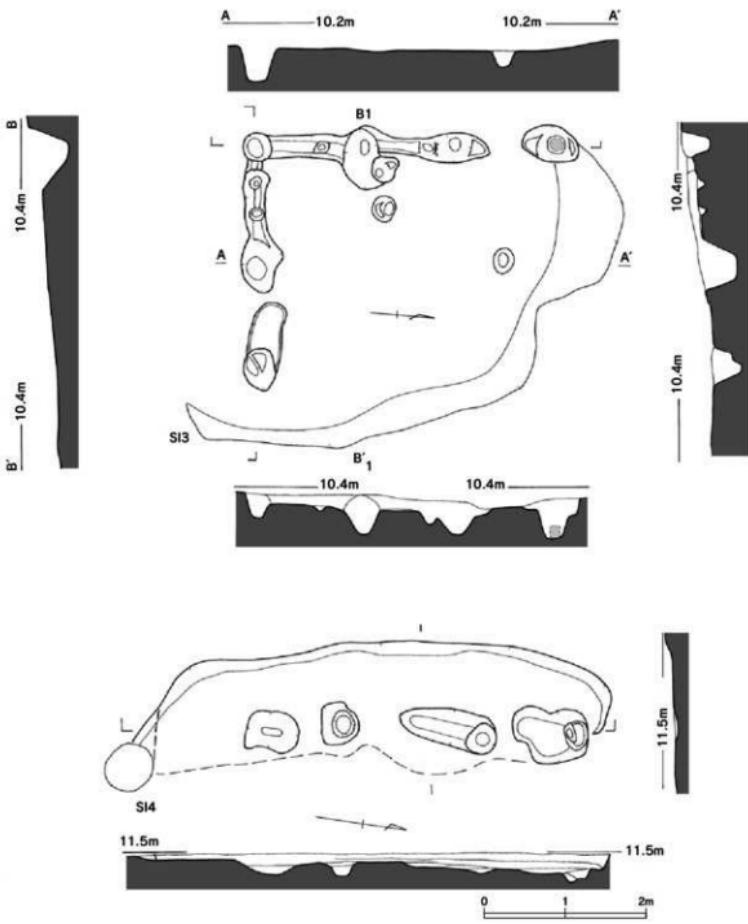


Fig.28 住居址 SI3・4 実測図 (1/60)

る。壁際溝に沿って並ぶ柱穴は、1.2～1.5m間隔で直径40cm前後のやや大形のものが並び、その間にやや不規則な間隔で直径20cmの小柱穴が並ぶ。これらは壁下地の縦材を埋め込んだ穴とみられるが⁵、材の直径は前者が20cm弱、後者が10cm前後と考えられる。建物範囲内で他の柱穴を検出したが⁶、建物に伴うものであるかは不明である。この遺構からは遺物が出土しておらず、時期は不明確であるが⁷、建物の構造からSI1に近い時期であろう。

SI4 (Fig.28) 調査区西部、SI3の南側で検出した。地山面で検出した堅穴状の遺構で、南北約5.6mを測る。東西は1.5m以上であるが、東側（谷側）の床面の大部分が消失している。直径40cm前後の柱穴が0.9～1.6mの間隔で一直線上に並んでおり、壁際溝らしき短い溝もみられる。建物西壁の遺構である可能性がある。遺物が出土していないが⁸、SI1、SI3と近い時期の壁建ち建物でなかろうか⁹。

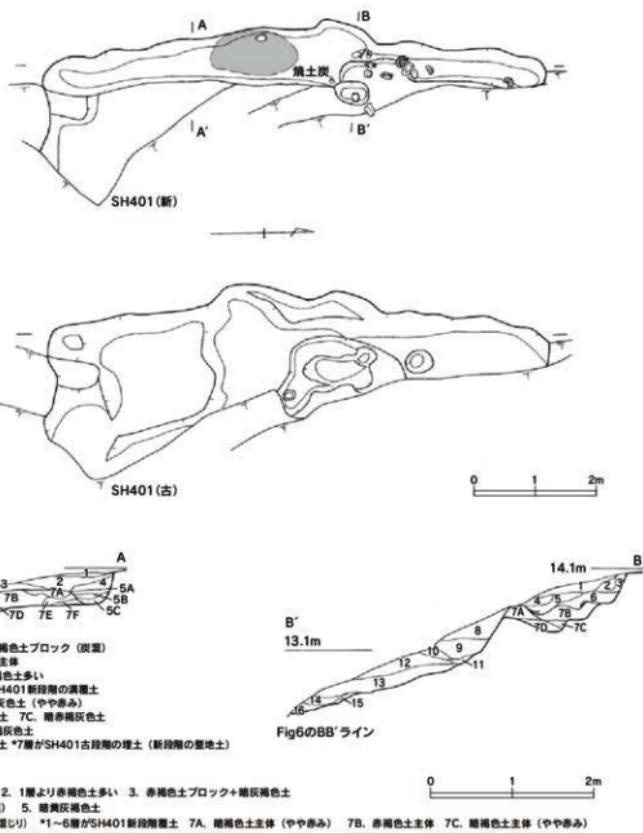


Fig.29 段造成 SH401 実測図 (1/80、1/60)

③段造成 (SH)

SH401 (Fig.29) 調査区南西部の地山面で検出した堅穴状の遺構である。SI1の西、丘陵斜面上位に位置する。南北8.3m、東西2.6m以上であるが、東側（谷側）の床面は消失しているので、本来の規模は不明である。丘陵斜面を掘り込んで設けられた平坦面でSH401（古）から、壁中央部付近をやや西側（山側）に掘り込んで拡張し、置土により20cmほど床を高くしたSH401（新）へと変遷する。Bラインの土層断面などからみて、前者は加工面ではなく、古い段階の機能面と理解した方が良いであろう。前者の床面は東側の地山検出面から約55cmの深さで、中央には深さ15cmの壁際土坑とみられるやや不整形なピットがある。後者は床面の深さが約35cmで、壁際には幅70cm前後、深さ15cm前後の溝を有する。溝中央付近の壁際から下層では炭・焼土が南北1.4mの範囲に集中して検出されたので、付近に炉かカマドが存在したものとみられる。溝上層を中心に古墳時代末の7世紀初頭～前半の土器が出土しており、遺構の時期を示す。

④周溝状遺構（SD）

略方形（コ字形）の区画溝などを周溝状遺構として報告する。溝は幅1m未満で深さも50cmに満たない。覆土は主として暗褐色シルト（やや黒み～灰色み）である。区画内の面積は10～30m²程度であり、建物1～2棟分を囲む規模である。平地式建物等の外周に掘削された排水用の溝とも考えられる。いずれも区画内部に主柱穴やカマド等を検出することはできなかった。

SD383 (Fig.31) 調査区北部、Ⅲ区の南東隅に位置する。丘陵斜面の地山で検出したが遺構掘削面は旧表土層である。検出したのは区画溝の一部、北西隅付近とみられる。東側は後世の段落ちにより遺構消失している。溝は幅60cm前後、深さ30cm前後である。溝の上面から東にかけて、薄い焼土層が広がっている。出土土器より、遺構の時期は古墳時代後期後半～末である。

SD406・408・409 (Fig.31) 調査区南部に位置する。地山（表土直下）で検出した。北側は近世溝に切られて遺構が消失している。SD406はSD409に切られる。SD409とSD408は攪乱のため切り合い関係は不明である。南北方向の箇所は3条が概ね平行している。平面的な配置からみて、SD406→SD409→SD408の順番に変遷する可能性が高いと考えられる。SB4はSD406と409を切っているが、SD408とは同時期である可能性がある。溝は幅40cm前後、深さ5～10cm程度である。SD406では覆土に疊が混じる。SD409はT字形の区画溝である区画内部は東西1.6m以上で、南北方向は北側が3m以上、南側が2.5m以上を測る。SD408は直線的な南北方向の溝が、南側で東に向かって弧を描いている。区画内部は南北7.2m以上、東西2.5m以上である。いずれも建物の西側（山側）に設けられた排水用の溝であるが、建物範囲の拡張に伴って、連続的に付け替えられたものと考えられる。出土土器が少なく、時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

SD570 (Fig.30) 調査区北部の中央、SD5134の西隣に位置する。第2面で検出した。溝は北辺から東辺がしっかりとしていて、幅60cm前後、深さ10～20cm前後を測る。山側の西辺は痕跡程度の小溝であり、南辺には溝がないコ字形である。山側には後述するSD6002があり、一連の遺構である可能性も考えられる。SD570の区画内部は一辺4.5m前後を測る。出土土器が少なく、時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

SD571・5142 (Fig.30) 調査区の北部、SD5134やSD570の南側に位置する。SD571は第1面で検出した。SD5142はSB11に切られる。東西方向の直線的な溝で、SD5142西端からSD571東端まで12.8mを測る。溝は幅50～70cm前後、深さ5～18cm程度であるが、東に向かって細く、浅い傾向がある。SD5142とSD571の間は1.8mで、陸橋部と考えられる。出土土器が少なく、時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。SD5134、570、5150やSK5125と切り合わない配置となっており、それらの遺構群と同時に存在した区画溝ではなかろうか。SB11周辺の掘立柱建物群よりは古い遺構群と考えられる。

SD5134 (Fig.30) 調査区北部の中央に位置する。第2面で検出した。溝は幅60～80cm前後で、深さ5～40cmである。西側（山側）は溝が深いが、東側（谷側）に向かって溝は浅くなり、東辺には溝がないコ字形である。区画内部は南北5.6m、東西5.2m前後を測る。出土土器より、古墳時代後期後半～末と考えられる。

SD5150 (Fig.30) 調査区中央部に位置する。第2面で検出した。溝は幅60cm前後で、深さ10cm前後である。北辺と西辺の「」字形である。区画内部は南北6.5m、東西6m以上を測る。出土土器が少なく、時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

SD684 (Fig.31) 調査区北西部に位置する。第2面で検出した。溝は幅50cm前後で深さは5～20cm前後である。西辺と南辺の「」字形である。北部では、溝が2条平行しているが、先後関係があるのかどうか明確ではない。区画内部は南北9.3m以上、東西3m以上である。その区画規模から、内

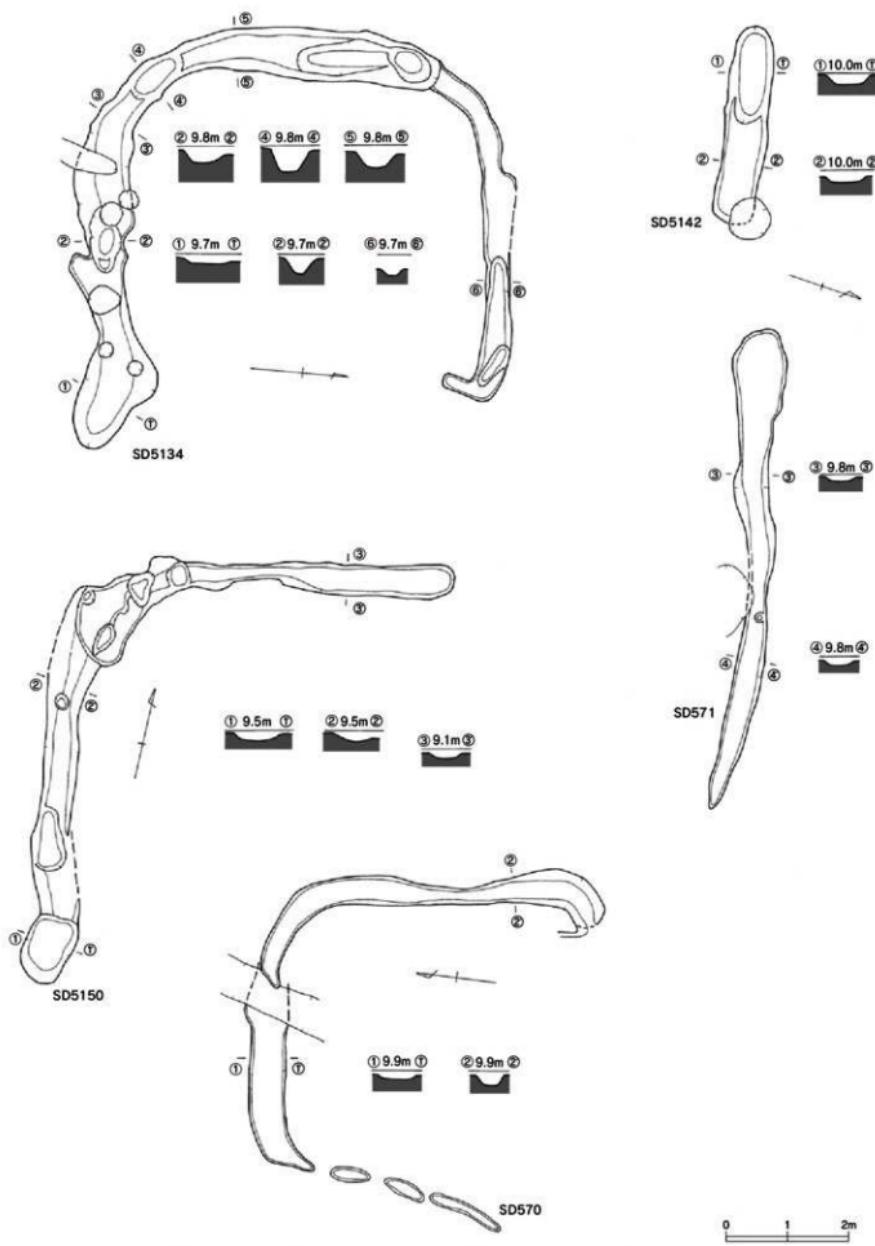


Fig.30 周溝状遺構 (SD5134・571・5142・5150・570) 実測図 (1/80)

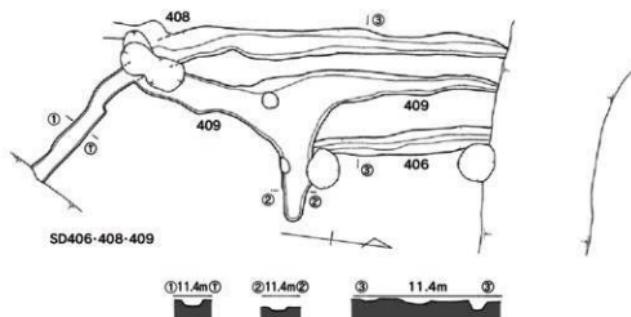
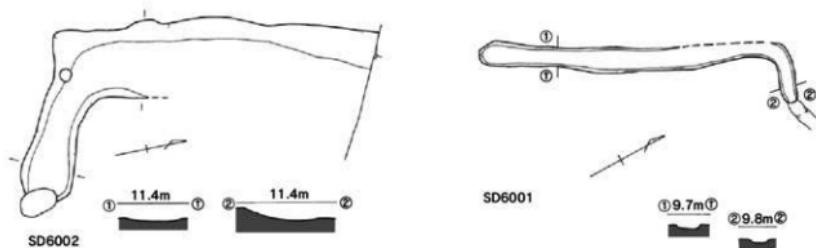
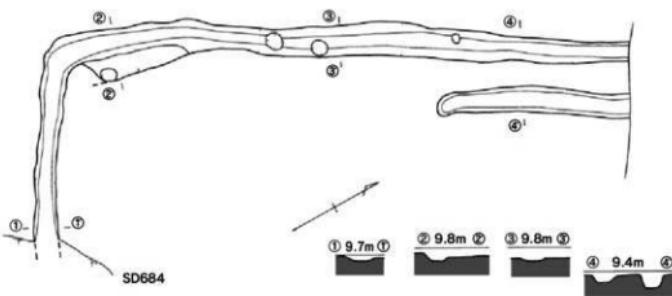


Fig.31 周溝状遺構 (SD383・406・408・409・684・6001・6002) 実測図 (1/80)

部には複数棟の平地式建物が存在したと考えられる。出土土器が少なく、時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

SD6001 (Fig.31) 調査区北西部、SD684の南側に位置する。第2面で検出した。溝は幅40cm前後で深さは5cm前後である。西辺と北辺の「」字形である。区画内部は南北5m以上、東西0.8m以上である。出土土器がなく、時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

SD6002 (Fig.31) 調査区北西部、SD6001の南側に位置する。第2面で検出した。幅70cm前後の溝状に検出できたが、南北方向の溝の東壁はほとんど検出できなかつたので、段造成遺構とみるべきかもしれない。区画内部は南北4.5m以上、東西1.6m以上である。出土土器がなく、時期は不明確であるが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

⑤土坑（SK）

複数の土坑や溝の重複として検出できるが、出土遺物や配置からみて連続的に營まれたものと考えられる遺構群を接土坑群とする。そのような遺構は2群存在するが、いずれも北部が周溝状遺構のような溝状となっている。

接土坑群SK5124・5125・5126 (Fig.32) 調査区中央部に位置する。第2面で検出したが、上面からはこの遺構に伴うとみられる土器がまとまって出土しており（「包含層」遺物としてとりあげている）、遺構掘削面は旧表土層であろう。切り合いは先行するものから順に、SK5125→SK5124→SK5126であるが、連続的に營まれたものであろう。SK5125は北部が溝であるが、遺構群全体としても南北方向の溝状を呈する。SB5・11などに切られる。遺構群は南北長16.8m、最大幅2.4mで、最深箇所は深さ1.2m以上を測る。覆土は暗褐色～暗黄褐色土を主体とする。出土土器は多く、時期は古墳時代後期後半である。前述の周溝状遺構と同時期の遺構群とみられ、日常生活用品等の廃棄場であったと考える。

接土坑群SK683・686・692と土坑（土器溜）SK624・625 (Fig.33) 調査区西部に位置する。SK683とSK686は第2面で検出したもので、切り合いはSK686が先行する。SK683の北部は周溝状となっており、東に向けて弧を描く。SK686は平面2.2×3.4m、深さ55cm以上を測り、南西側に段がある。SK683は平面2.3×3m、深さ30cm以上を測る土坑部の北側に幅40cm、深さ5cm前後の溝が付く。土坑部上層からはまとまって土器が出土しており、時期は古墳時代後期後半である。覆土はいずれも黄色みのある暗褐色土を主体とする。SK686の南側には平面0.9×1.6m、深さ20cm以上の土坑SK692がある。

SK683の東側には土坑（土器溜）SK624・625や炉状遺構のSL682がある。SK624・625は第1面での検出であるが、遺構配置等から、上記の遺構群に関連するものとみられる。出土土器は古墳時代後期後半から末である。SL682はSK683とその北部の溝に囲まれた範囲に位置し、周囲には上記のような土器溜がある。この遺構の詳細については、南側に7m離れて存在する炉状遺構SL709とともに後述することにしたい。

土坑SK674 (Fig.34) 調査区北西部、丘陵緩斜面の肩付近に位置する。第1面で検出した。平面プランは西（山側）辺と北辺がやや直線的であるが、他は丸みがある。南北長3.8m、東西長3.2m、深さ46cmを測る。断面形は楕円彫り鉢形であるが、西壁等には段がある。覆土は上層（2～7層）が地山ブロック土を多く含む人為的な理土で、西から東に向けて埋め戻されたと考えられる。下層は黒褐色～暗灰褐色を主体とする自然堆積土である。礫が混じり、被熱礫を含む。出土土器から遺構の時期は古墳時代末の7世紀前半とみられる。また、同一遺構面上の南側70cmの地点で鉄製鋤先R206が出土している。この遺構と同時に廃棄されたものと考えるが、定かではない。

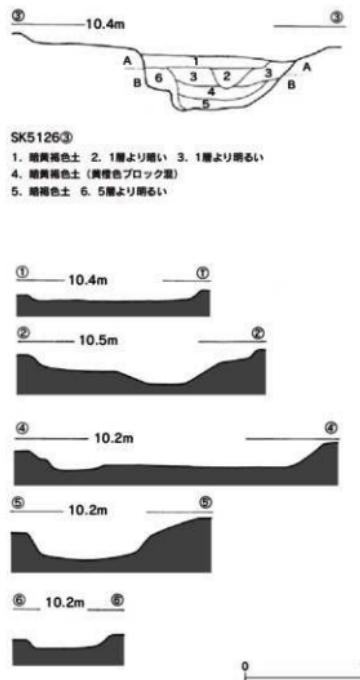
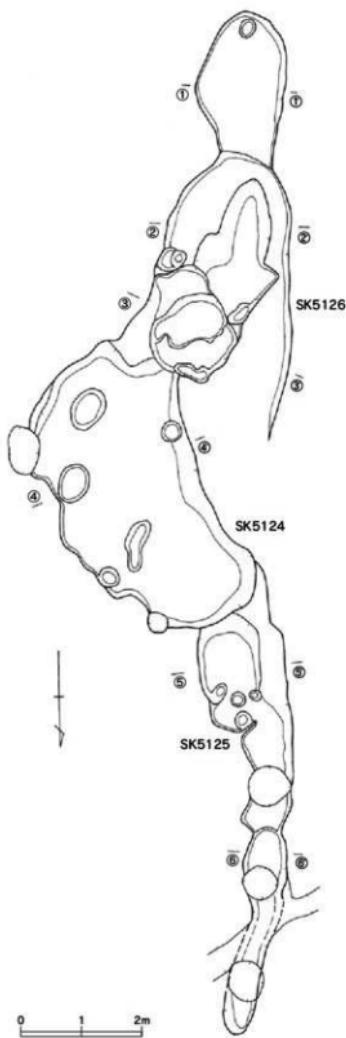


Fig.32 土坑群 (SK5124~5126) 実測図 (1/80、1/40)

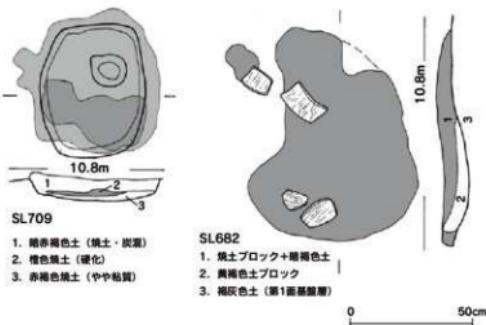
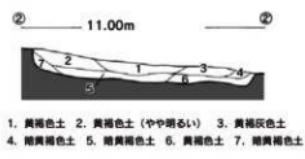
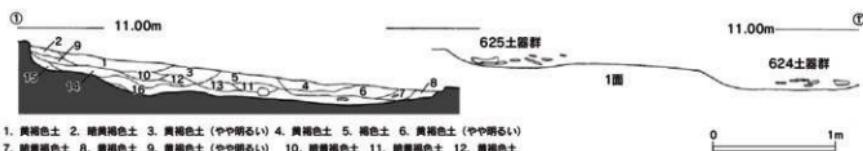
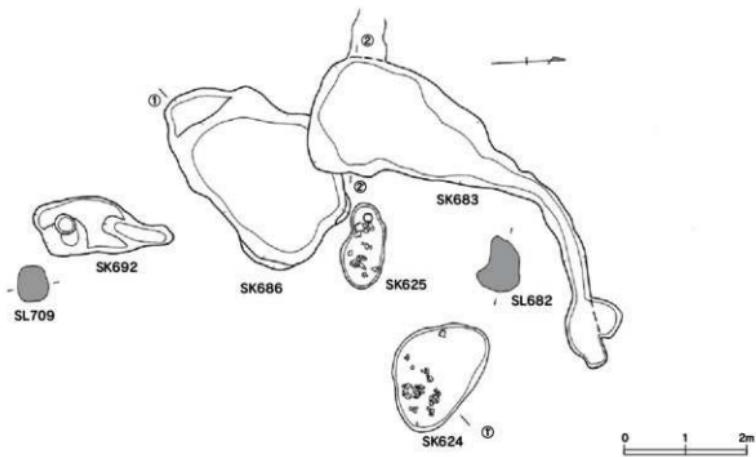


Fig.33 土坑群 (SK624・625・683・686)、炉状遺構 (SL682・709) 実測図 (1/80, 1/40, 1/20)

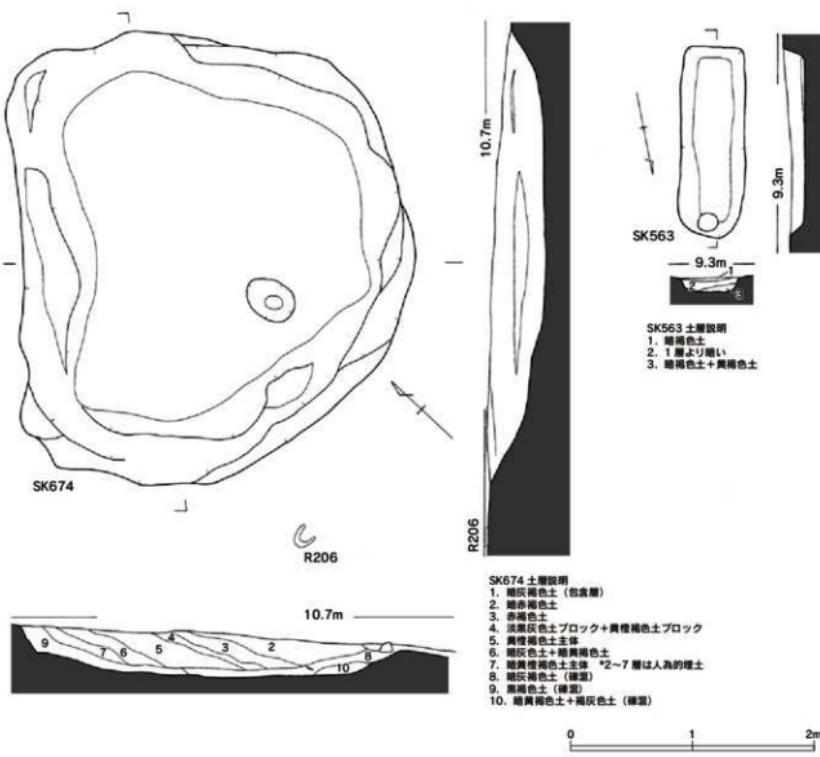


Fig.34 土坑 (SK563・674) 実測図 (1/40)

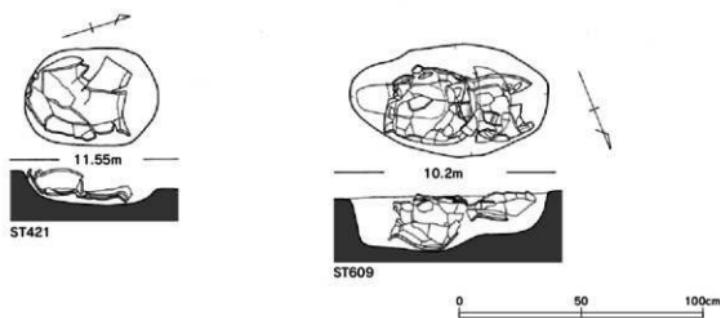


Fig.35 土器棺墓 (ST421・609) 実測図 (1/20)

土坑（土壙墓？）SK563 (Fig.34) 調査区北部に位置する。第2面で検出した。南北長1.58m、東西幅0.52mの長方形プランで深さ14cmを測る。北側小口は丸みがあり、やや舟形に近い。覆土は暗褐色土を主体とするものである。このような特徴から、土壙墓である可能性が考えられる。出土土器が少なく、遺構の時期が明確ではないが、古墳時代後期後半～末と考えられる。

⑥炉（SL）

SL682 (Fig.33) 前述のSK683の東側に位置する炉状遺構である。第2面（旧表土層上面）で検出した赤褐色焼土層である。焼土層は東西87cm、南北70cmの範囲で、上面に土器が散布している。遺構配置から、SK683やSK624・625と関連がありそうであるが、付近に建物が存在したようにはみえない。本遺構は屋外炉ではないかと考えられる。時期は古墳時代後期後半から末である。

SL709 (Fig.33) SL682の南側に7m離れて位置する炉状遺構である。土坑状の掘り方があり、45×55cm、深さ10cmを測る。上面や土坑覆土には焼土や炭が多く混じるが、2層が被熱により硬化した焼土層である。付近に建物が存在したようにはみえないので、SL682に近い時期の屋外炉と考えられる。

⑦土器棺墓（ST）

ST421 (Fig.35) 調査区南西部、SI1の北側に位置する。第1面以下の掘削中に検出した。SI1と同じ古墳時代後期以降の整地層とみられる。長さ45cmの土師器甕をほぼ水平に埋置した単棺の土器棺墓で小兒埋葬とみられる。南側（底部側）がやや高い。墓壇は不明確であるが、南北長55cm、東西幅40cm前後とみられる。副葬品等はみられない。時期は古墳時代後期後半から末である。

ST609 (Fig.35) 調査区北西部、SI2の範囲内に位置する。SL602検出面の焼土層等を切る東西方向の土器棺墓である。棺身は土師器甕2個体であるが、下甕の打ち欠いた底部と上甕の口縁部を合わせている。上甕の底部も打ち欠かれている。両者ともほぼ水平に埋置されているが、棺床の標高は上甕が約10.00m、下甕が9.9mである。棺長は61cm（下甕33cm、上甕28cm）であり、小兒埋葬であろうが、埋葬位は明確でない。副葬品等はみられない。墓壇は東西長82cm、南北幅47cmで深さ24cmを測る。西側は段になっており、深さ17cmである。上甕と下甕のレベル差と対応している。時期は古墳時代末の7世紀前半である。SI2廃絶後の埋葬とみられるが、被葬者はその居住者に関連する者であろうか。

⑧谷下層の遺構（SD等）

調査区全体が谷の中に立地しているが、東部は更に一段深い河道となっている。本報告ではこの箇所を「谷」と呼んでいる。幅20m前後、深さはその西肩より1～1.8m前後である。谷は図のように蛇行して北流している。谷の下層は自然堆積で概ね暗灰色粘質土（下層①）と黒灰色粘質土（下層②）に分かれる。谷の下層②以下でSD1000・1001やSD1002のような古墳時代後期後半の直線的な溝を検出した。他の遺構に立石遺構のSX1004や性格不明のピットがある。ピットの中には古墳時代中期前半の土師器が出土したSP1003がある。

SD1000・1001 (Fig.36・37) 谷底中央部付近で検出した直線的な溝である。SD1001が古く、SD1000が新しい。地山面で検出したが、土層断面から下層②の上面から掘削されていることが分かる。検出長は約60mである。北東側は調査区外へ伸びている。調査区南端部では溝が浅く不明瞭になり、延長を検出できない。南の7次調査地点の谷底でもこのような溝は検出されなかった。更に上流の第2次調査地点では谷内に溝があるが、これとは連続的につながるものではないのかもしれない。

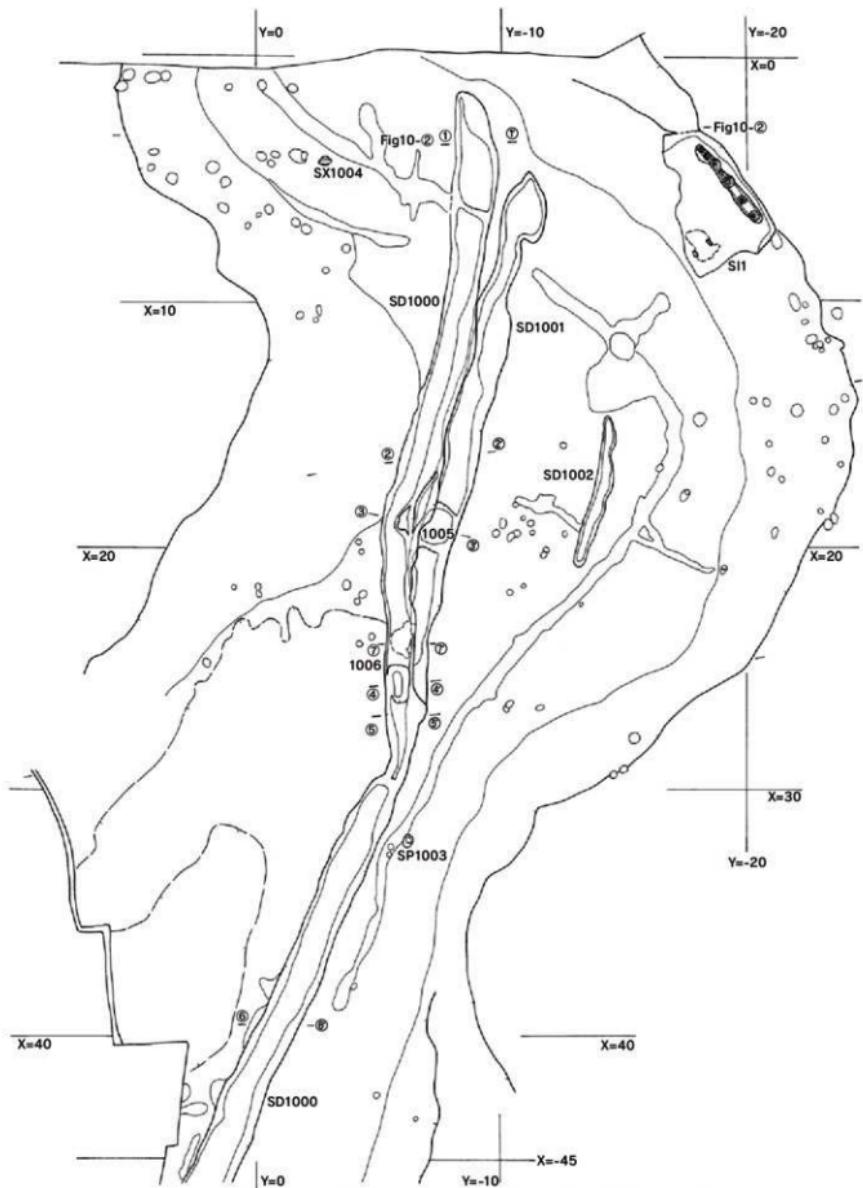


Fig.36 谷南部（I・II・IV区）第2面遺構（溝、土坑等）実測図（1/200）

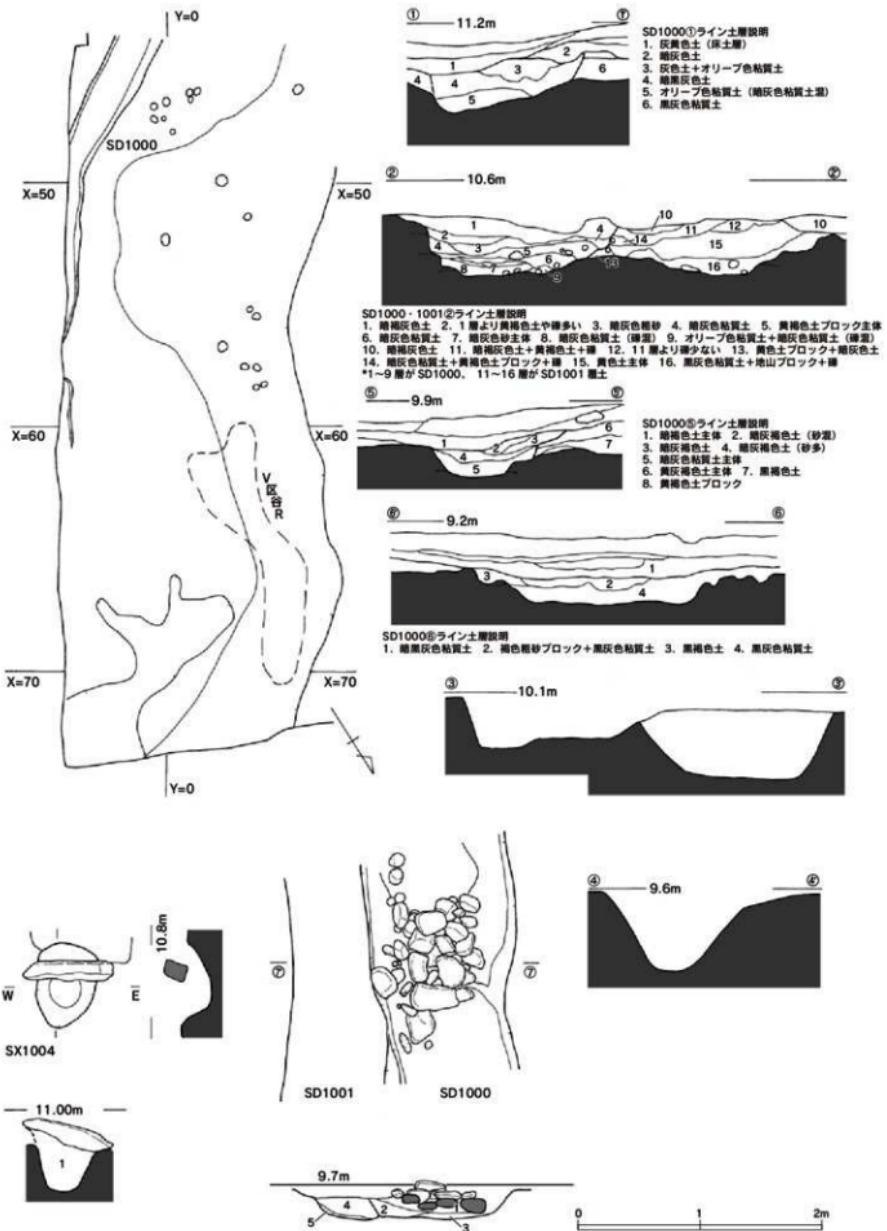


Fig.37 谷北部（V区）第2面遺構（溝等）実測図 (1/200)、SD1000周辺細部実測図・土層断面図 (1/40)

SD1000は幅1.5m前後、深さ50cm前後（底面は北に向かって標高を下げる）であるが、溝の方向が東に振れる中央部付近では幅90cmと細くなっている。この変換点より北では段差をもって深くなっている。溝の覆土は暗灰色～黒灰色粘質土を主体とするが、上層と下層に粗砂層を含んでおり、機能時は常に水流があった可能性が高い。西側のSD1001上面には地山ブロック土が畳状に堆積している（②ライン11・12・14・15層）。これはSD1000掘削時の廃土を埋没SD1001の窪み上に積み重ねたものであろう。SD1000中央部付近、変換点よりも北に3～5mの箇所には土坑SK1006や集石がある。前者はほぼ溝幅で長さ1.6m、深さ64cmを測る。後者は径40cm前後の角礫を約25cmの高さ積み上げたものであるが、溝幅よりは狭く、下場は底面よりもやや上位にある。南北長1.2mの範囲に集中しているので、水量調整等のために意図的に集められたものと考えられよう。SK1006もその南側で溝幅が狭くなっていること等から集水や下流への水流を抑制する機能が考えられるが、付近に井堰が設けられた痕跡はなかった。

SD1001はSD1000に先行するほぼ同規模の溝である。SD1001の延長上はSD1000北半部と方向が一致する。SD1001からSD1000に付け替えるに当たり、南半部（上流側）は向きをやや東に振り、北半部（下流側）はほぼSD1001のプランでより深く再掘削したものと考えられる。SD1001の中央部付近にも土坑SK1005があるが、ほぼ溝幅で長さ2m、深さ55cmを測る。SK1006と同様の機能と考えられる。

SD1000・1001は水路であるが、その用途は何であろうか。下層①は水田耕作土のような土であるが、SD1000よりは層位的に新しい。定型的な井堰や水口等の水田関連遺構もみられないで、農業用水路である可能性は低いと考えられる。谷に集まる天水や湧水を利用した生活用水路と考えるが、その水量調整は簡素なものにすぎない。遺構の時期は古墳時代後期後半であり、古墳時代末には谷の埋没が進んでおり、その機能を失っている。

4) 出土遺物の概要

出土遺物の概要については前述の通りであるが、現在も整理中であり、第5次調査と7次調査の遺物詳細については来年度の報告を予定している。本書ではそのごく一部であるが、参考のためFig.38～41に実測図を提示しておきたい。

Fig.38には土器以外の特殊遺物を示した。1はSK674近く出土（R206）のU字形鉄製釘先で、古墳時代末のものと考えられる。2はII区の谷Ⅰ層（包含層）出土の鉛錘で、平安時代のものである。3はII-1区の谷Ⅲ層（床土層）出土の石製丸軸で、平安時代のものである。石材は濃緑色・半透明の碧玉質である。4は7次調査地点の谷北部II層（水田耕作土）出土の天河石製小玉である。北部九州では弥生時代初期の事例が多い。調査区からは繩文時代後期前後の石器が一定量出土しているが、当該期のものであるとしたら、列島では古い資料となる。

Fig.39には平安時代の土器・陶磁器を示した。1～7は越州窯系青磁で、谷のⅠ～Ⅲ層を中心に出土している。碗、皿類が多いが、1のような合子の蓋も出土している。8・9は白磁の皿や碗である。越州窯系青磁に比べて出土量は少ない。中国陶磁器は他にも、少量であるが、黄褐釉陶器が出土している。10・11は国産陶器。10は灰釉で11は綠釉である。これらも越州窯系青磁に比べれば少量である。また、土師器であるが、17のような耳杯の模倣品も出土している。12・13・15・16は黒色土器碗である。A類（内黒）が多く、14等の土師器碗とほぼ共通する形態である。出土した黒色土器、土師器碗、土師器杯（18～20）は9世紀後半から10世紀前半の型式が主体である。平安時代の須恵器は壺や壺、瓶が一定量出土しているが、杯や蓋は少量である。21～23は火葬墓ST302出土土器である。21は須恵器で、複合口縁の平底瓶である。肥后產である可能性がある。22・23は土師器

杯である。時期は9世紀後半とみられる。

Fig.40には古墳時代後期後半から末の土器を示した。主要遺構出土土器は、SI2出土の3(須恵器杯蓋)、5(須恵器杯身)、9(須恵器有蓋高杯、長方形透孔、身内面に同心円文當て具痕あり)、15(土師器小形甕)、SH401下層出土の13(須恵器平瓶)、SK674下層出土の4(須恵器杯蓋)、7・8(須恵器杯身)、12(須恵器ハソウ)、14(須恵器細頸壺)である。以上は古墳時代末(TK209型式期)のものである。他の図示土器は谷部のIV層以下などから出土したものである。出土した古墳時代の土器は後期後半から末(TK43・TK209型式期)が主体である。

Fig.41には古墳時代の土器の特異なものを示した。1は平底の広口壺(瓶)、2は広口壺で、いずれも須恵器であるが、古墳時代後期～末の一般的な形態ではない。谷部のIV層から下層出土である。陶質土器の影響を思わせるが、鈍重な作りである。牛頭ではない在地産須恵器である可能性が高い。5は須恵器の製作技術で作られた土師器甕で形態も韓式に近い。谷下層のSD1002出土。内面のタタキは平行文となっている。この種の土師器甕や壺が一定量出土しており、集落内か近辺に須恵器工人や渡米系工人が居住していた可能性が高いとみられる。

3、4は初期須恵器(TG232型式期)とみられる。前者は無蓋高杯で、複数個体出土している。後者は杯身とみられるが、有蓋高杯の可能性もある。谷下層出土である。いずれも作りはシャープであるが、焼成はやや瓦質に近い。6の土師器山陰系有段口縁壺と同時期の古墳時代中期初頭の土器群にともなうものとみられる。当該期の土器は少量であるが、注目に値する。徳水A遺跡では集落が成立していない段階であり、河川における祭祀に関連する土器群であるかもしれない。

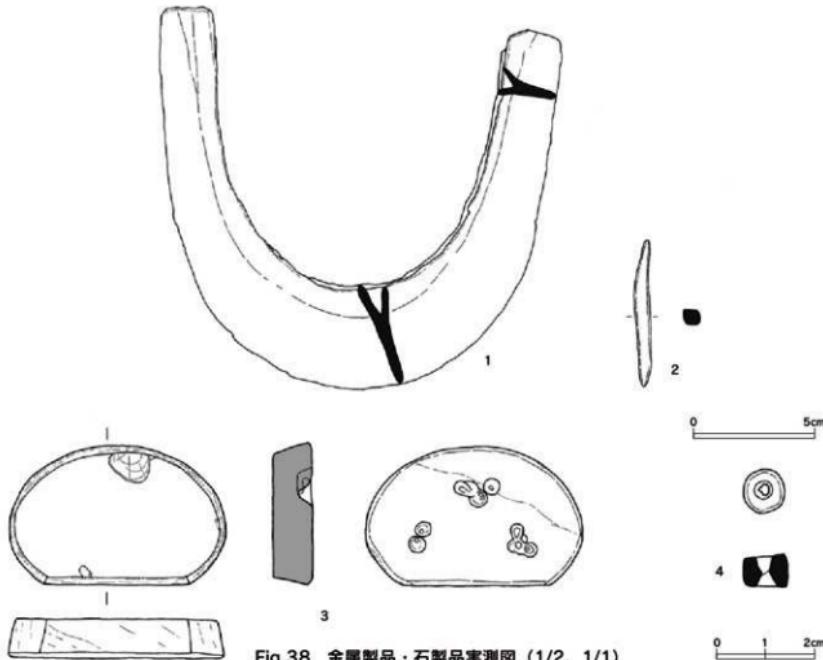


Fig.38 金属製品・石製品実測図 (1/2, 1/1)

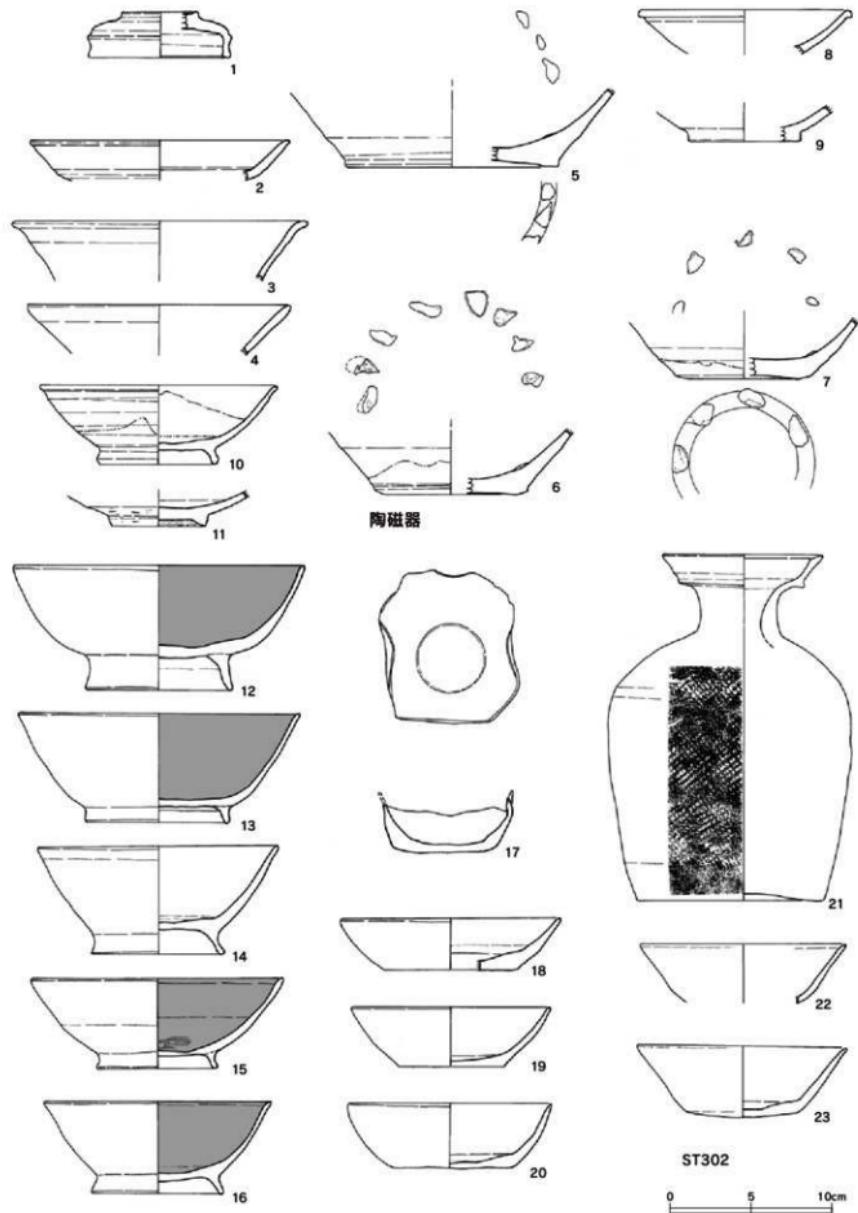


Fig.39 平安時代の土器・陶磁器実測図 (1/3)

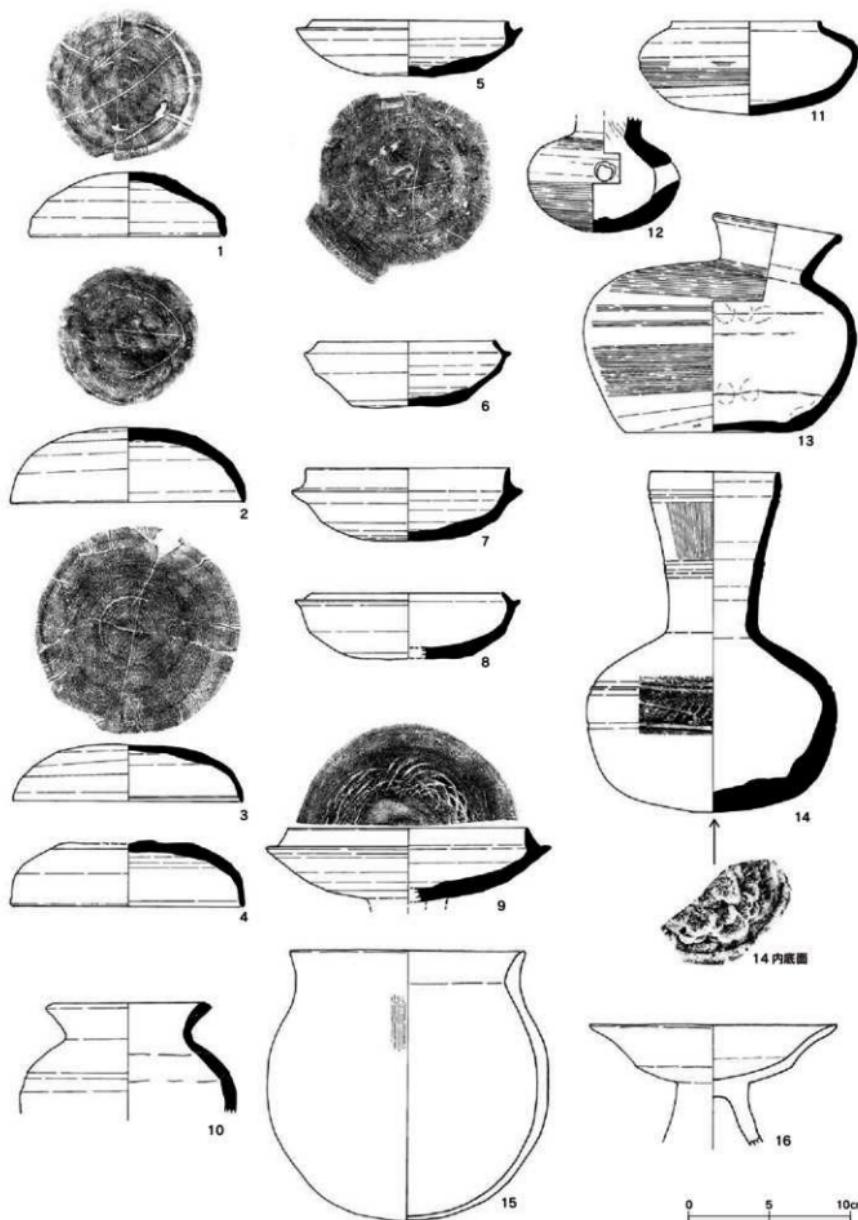
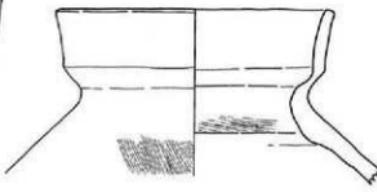
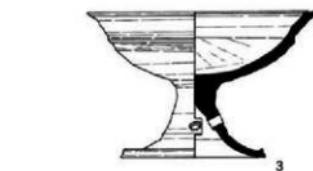
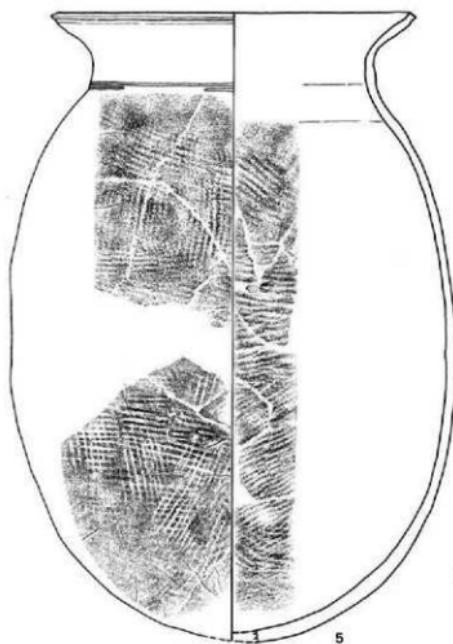
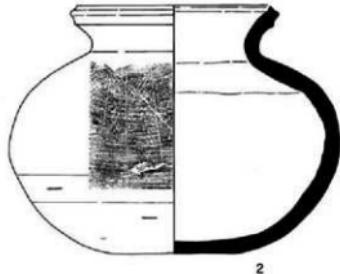
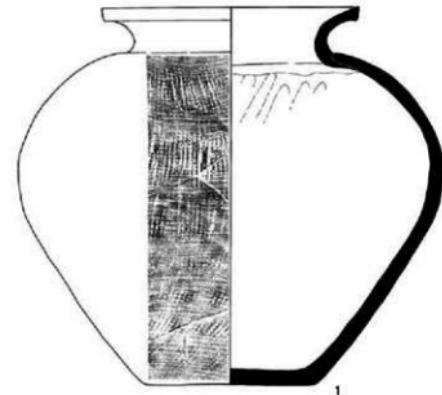


Fig.40 古墳時代の土器実測図 1 (1/3)



0 5 10cm

Fig.41 古墳時代の土器実測図 2 (1/3)



1. I・II区周辺 (北から)



2. I・II区1面 (南から)



1. V区谷 1面 (北から)



2. 包含層 SU012 (南東から)



1. SD001 (南東から)



2. SX014 (北から)



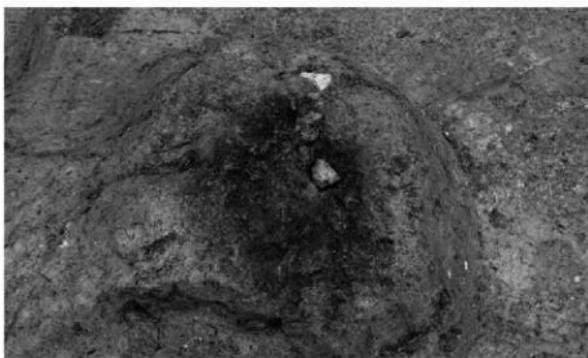
1. III区全景 (東から)



2. III区南部 (北から)



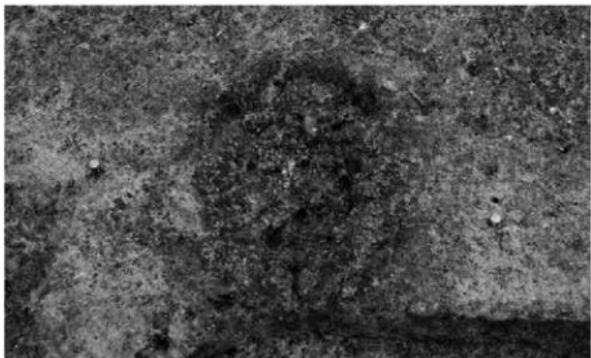
1. 段造成 SH404 (南から)



2. 錫冶炉 SL402 (東から)



3. 錫冶炉 SL502 と SK501 (西から)



1. 鋳冶炉 SL503 (東から)



2. 鋳冶炉 SL5118 (北から)



3. 鋳冶炉 SL681 断面 (西から)



1. 廃滓坑 SK590・591 (東から)



2. 廃滓坑 SK605 周辺検出状況 (東から)



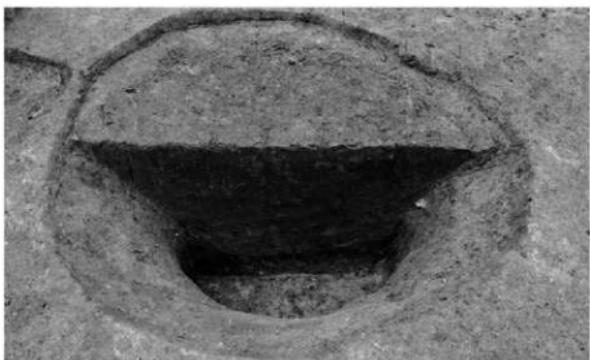
3. 廃滓坑 SK5119 周辺検出状況 (東から)



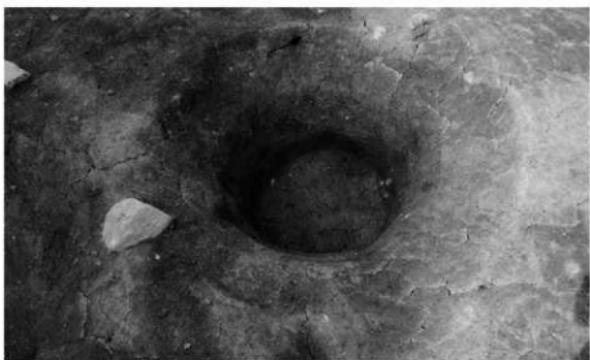
1. SK025 (北から)



2. SK452 (東から)



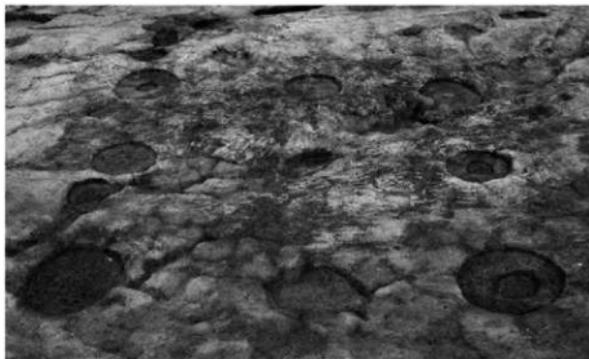
1. SK015 土層断面 (東から)



2. SK026 (南から)



3. SK033 (西から)



1. SB3 検出面 (北から)



2. SB4 (南から)



3. SB5 (南から)



1. SB6 (西から)



2. SB7 (東から)



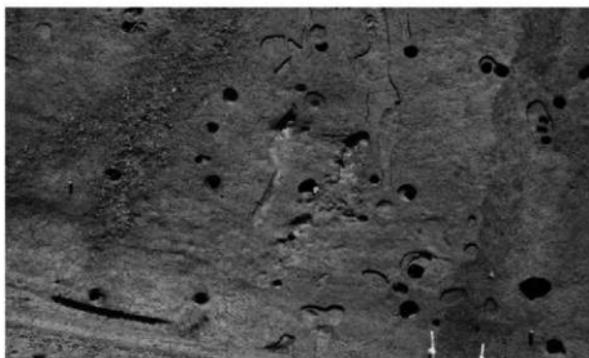
3. SB9 (東から)



1. SB10 (北から)



2. SB11 (北から)



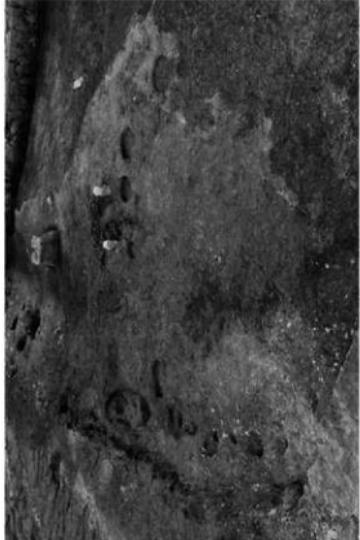
3. SB15 (北から)



1. 調査区南部（V・VI区主に2面）全景（北から）



2. SI2（北から）



1. SI1 (南から)



2. SI3 (東から)



3. 段造成 SH401 と斜面の土層断面 (北から)



4. 段造成 SH401



1. SD5134 (北から)



2. SD570 (東から)



3. SD684 (南から)



4. SD406 · 408 · 409 (北から)



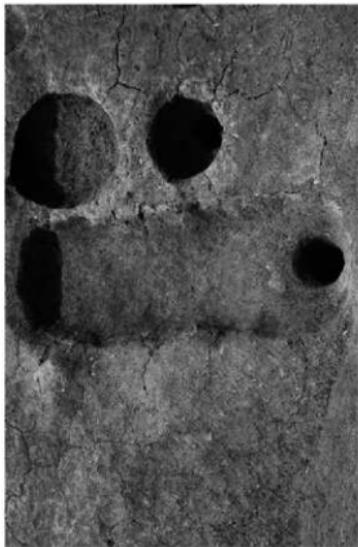
1. SK5124 周辺 (南から)



2. SK683・686 周辺 (東から)



3. SK674 (南から)



1. SK563 (北から)



2. ST421 (東から)



3. ST609 (東から)



4. SD1000 中央の集石 (北から)



1. SD1000 と谷 (北から)



2. SD1000 (南から)

IV. 第6次調査の報告

1. 調査に至る経緯

伊都地区画整理事業地内における区画道路建設に先立ち、2011年7月11日に福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課調査第2係が試掘調査を行った。その結果、丘陵斜面（徳永A遺跡第5次調査の西側）で、包含層と遺構の遺存を確認した。伊都区画整理事務所および工事業者との協議の結果、翌日12日から実働10日を見込んで本調査を実施することとなった。

調査地点は、今宿の扁状地西側、高祖山から北に延びた丘陵の東側斜面標高約14～15mに位置する。大宰府の官人機構「主船司」との関連を指摘される徳永A遺跡の北側にあたり、周辺調査では古墳時代～古代の遺構が確認されている。調査地点が位置する丘陵は、近年の区画整理だけでなく、それ以前の耕地造成の影響もあって旧地形は大きく改変されており、遺跡の保存状況は良好とは言えない状況であった。発掘調査は、2011年7月12日から7月21日まで行い、整理作業と報告書作成は、調査担当者が2012（平成24）年度に行った。調査・整理において、ご理解とご協力をいただいた福岡市住宅都市局伊都区画整理事務所をはじめとした関係各位に感謝したい。その他の経緯および調査の組織は本書「1.はじめに」を参照されたい。

2. 調査の方法および経過

表土・上層包含層をバックホーで除去後、人力による遺構掘削、記録を行った。機械高は標高16.000mに設定し、1/100の調査区周辺図と1/20の遺構平面図、調査区上層図を作成した。遺構は包含層に形成されていたため、遺構の調査後、下層包含層のトレーンチ調査を行い、黒曜石片を中心とした遺物を取り上げた。遺物の出土は上位10cmほどに集中し、遺物の出土がみられなくなつた時点で、バックホーと一部人力で包含層を除去したが、さらに下位では遺物・遺構は検出されなかつた。これをもって調査終了とし、機材等を撤収した。

3. 調査の記録

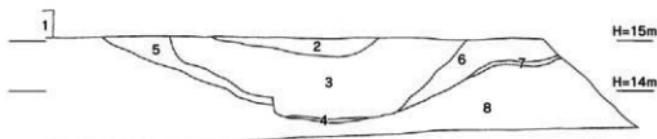
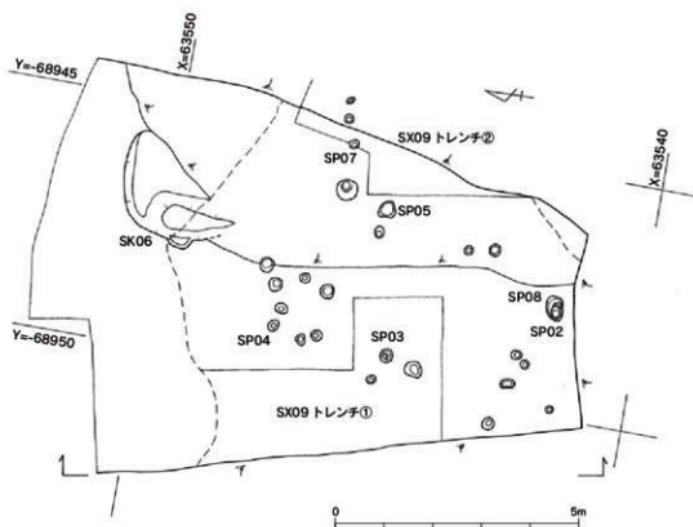
1) 調査の概要

本調査地点の基本層序は、上から表土（耕作土）→上層包含層（S X 01）→遺構面・下層包含層（S X 09）→無遺物層（花崗岩風化土）となる。調査区西側が道路工事によって切り通されており、そこから調査区下の土層を観察すると、S X 09の下層には礫を少なく含む黄灰色粘質シルトが断面V字状に堆積している（Fig.42、PL19-3）。その層に対してもトレーンチ調査を行つたが、遺物等は含まれなかつた（PL19-5）。このV字状堆積は小規模な谷堆積であり、切り通しの西側（調査区の対面）崖壁面を観察すると、上方に同様のV字状堆積が確認できる。本調査区のV字状谷と同一のものと考えられ、西南西から東北東の方向へ走つてゐたと想定できる。遺構面はV字状谷埋没後の上面の標高15～14.5mの部分にかろうじて遺存していた。

2) 遺構と遺物（Fig.42・43、Tab.3、PL19）

S X 01 遺構面上層の褐色土包含層で、古代と思われる須恵器片や黒曜石片が出土した。S X 01除去後、下面でピット・土坑を検出した。

S P 暗褐色～黄灰色シルト質粘土を埋土とする径30cm前後の小型円形ピットで、深さは10～20cmと残りが悪い。土師器片と、下層包含層から混入したと思われる黒曜石片が出土した。北北東軸に2×1間の建物が立つ可能性もある。



- 1. 棕色土 (SX01)
- 2. 棕褐色～褐色シルト粘土 (SX09)
- 3. 黑灰色砂質シルト。礫を少なく含む。マンガン多い。
- 4. 径2~5cmの石英角砾多く含む。
- 5. 褐褐色粘土。礫を少なく含む。
- 6. 線～赤褐色シルト粘土。礫を含む。
- 7. 褐褐色粘土
- 8. 明赤褐色～黄褐色花崗岩バイナイト

Fig.42 第6次調査区遺構全体図および土層実測図 (1/100)

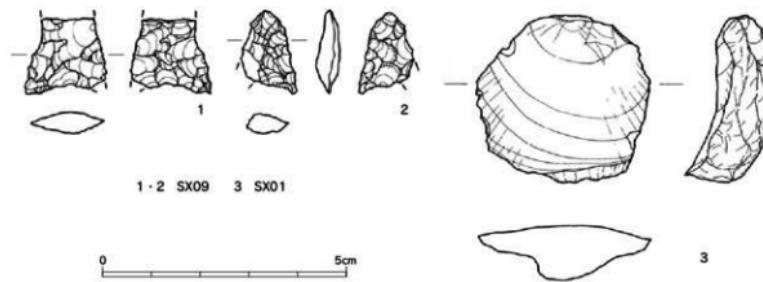


Fig.43 SX09・01 出土石器実測図 (1/1)

Tab.3 第6次調査出土遺物

遺構	出土遺物	遺構	出土遺物
SX01	黒曜石大剥片1・小剥片2・碎片24、玄武岩片1、土師器片1	SK06	黒曜石碎片1、土師器小片1
SX01 (試掘)	黒曜石石鏃1・小剥片3・碎片2、安山岩 碎片1、須恵器片1、土師器小片7	SP07	黒曜石小剥片1
SP02	黒曜石小剥片1・碎片1、土師器小片1	SP08	黒曜石小剥片1
SP03	黒曜石碎片1	SX09	黒曜石石鏃2・剥片6・小剥片15・碎片30、安山岩小石核 1・剥片3・小剥片7・碎片5、玄武岩片2、縄文土器片10
SP04	黒曜石石鏃1	表面 採集	黒曜石小剥片1、安山岩小剥片1、須恵器 小片1、土師器小片3
SP05	黒曜石小剥片3	東側 客土	黒曜石石鏃1・碎片6、縄文土器片6、白 磁小片1、須恵器片5

S K 06 1辺2mほどが遺存した隅丸方形の土坑で、灰黄色シルトを埋土として、土師器片が出土した。壁の立ち上がりに傾斜がある。残りが悪く遺構の性格は不明である。

S X 09 遺構面となっている暗褐色～褐色シルト質粘土の包含層で、黒曜石片・石鏃・安山岩片・縄文土器片が出土した。土器は無文部の小片で時期を推定する根拠に乏しいが、(1) 胎土・調整・色調から、早期や晚期の土器の可能性は低い。(2) 黒曜石・安山岩剥片や石鏃の特徴は早期や後・晚期の特徴を示さない、という点から包含層の形成時期は、縄文時代前期～中期と推定しておきたい。

出土遺物 各遺構出土遺物の一覧を Tab. 3 に示す。一部の石器について実測図 (Fig.43) と写真 (PL19-6) を掲載している。1は、S X 09 出土の先端・片脚を欠損した黒曜石製の打製石鏃で、基部は浅い凹基、全体は二等辺三角形を呈す。残存長 1.5cm・幅 1.7cm・厚さ 0.4cm・残存重量 0.9g を測る。2は、S X 09 出土の片脚部を欠損した黒曜石製の打製石鏃で、浅い凹基、全体は二等辺三角形を呈す。長さ 1.7cm・残存幅 1.15cm・厚さ 0.5cm・残存重量 0.6g を測る。3は S X 01 出土の黒曜石製の剥片で、背面は角礫面を残す。長さ 3.4cm・幅 3.6cm・厚さ 1.2cm・重量 15.8g を測る。PL19-6の4は S P 04 出土、5は S X 01 出土、6は調査区東側の客土から出土した黒曜石製打製石鏃である。

4. 小結

遺構面・包含層の下層には砾を少なく含む黄灰色粘質シルトが断面V字状に堆積しており、遺物等は含まれない。このV字状谷と同一形状の断面が計画道路を挟んだ調査区西側の切り通し面上位にも認められ、丘陵を横断して、東側へ急傾斜する埋没谷であったことがうかがわれる。この埋没谷上に縄文時代前～中期ごろの包含層が形成され、その上に古墳時代～古代の柱穴群、土坑が構築された後、古代以降の包含層が形成されていた。本調査の遺構面は、調査区東側で行われた5次調査の遺構面(整地面)に対して、一段上がった西側の埋没谷緩斜面もしくは整地面に形成されていたと考えられる。



1. 調査区全景 (南東から)



2. 調査区全景 (北から)



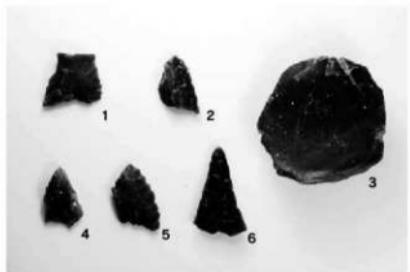
3. 調査区西面土層



4. SX09 遺物出土状況 (北東から)



5. SX09 下層確認トレンチ (東から)



6. 出土石器

V. 第7次調査の報告

1. 調査の概要

第7次調査地点は5次調査の南、伊都丘病院の駐車場下である。10m近い駐車場の盛土を工事業者に場外搬出してもらった後、調査に着手した。調査区の北には病院のガス管が埋設されており、その部分を養生しての調査であるため、5次調査区との間には20mほどの未調査区が存在する。

調査区全体が谷の中であるが、基本層位や遺構の時期は第5次調査地点に準じる様相である。

2. 調査の記録

1) 平安時代から中世の遺構

①水田関連遺構 (Fig.46)

5次調査と同様、調査区東側の谷部は、平安時代から中世前期の包含層である暗褐色土（I層）の下層に、水田耕作土とみられる暗灰色粘質土（II層）があり、その下層に床土層の暗黄褐色土層（III層）がある。本調査区もIII層を検出面とした。谷水田は調査区の東側、東西約14m、南北約30mの範囲内で検出できるもので、標高13.3～14.8mの床土層にみられる段差と平坦面のあり方から、11前後の水田小区画が推定できる。西側の傾斜のある斜面寄りの箇所では幅3m、長さ7m前後の長方形区画（長軸は谷筋方向）、東側の谷中央部付近では、一辺5m程度の正方形区画が平均的な区画規模であったようである。東部では、隅丸方形プランー辺1.8m前後、深さ38cmの土坑を検出した。水田域の西侧ではSD009とSD001を検出した。南北方向でいずれも水田関連の水路と考えられる。

②溝 (SD)

SD001 (Fig.46・47) 調査区の西部、丘陵斜面の下位に位置する南北方向の直線的な溝である。その遺構面は地山で、検出長29mを測る。南端部付近で、溝はやや東に曲がるようであるが、後世の段落ちにより、その延長が消失している。幅80cm前後（ただし、谷側の東肩はほぼ消失している）、深さ35cm以上を測る。底面は概ね北に向かって標高が下かる。覆土は黒灰褐色粘質土に粗砂が混じるもので、水流があつたとみられる。出土土器が少なく、時期は不明確であるが、平安時代から中世前期の遺構と考えられる。

SD009 (Fig.46・47) 調査区の北部、谷水田域の西縁付近に位置する南北方向の溝である。検出長9m、幅100cm、深さ10cm前後を測る。底面は概ね北に向かって標高が下かる。覆土は青みがかつた灰色粘質土である。

③不明遺構

SX002 (Fig.46・47) 調査区西部の丘陵斜面に位置するSD001に後出する切通し状の遺構である。検出したのは南北15m、東西3m前後である。南端部付近で、やや東に曲がるようであるが、後世の段落ちにより、その延長が消失している。切通しの下場は幅90cm以上、遺構上部が土砂崩れ等により不明瞭になっているが、1m以上丘陵斜面を切り下げたものとみられる。出土土器が少なく、時期は不明瞭であるが、中世以降のものと考えられる。

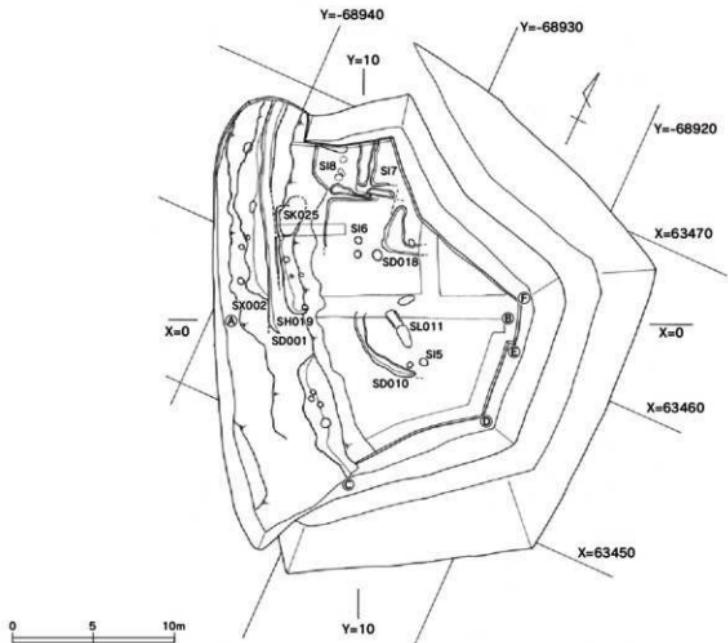


Fig.44 第7次調査区 主要遺構配置図 (1/300)

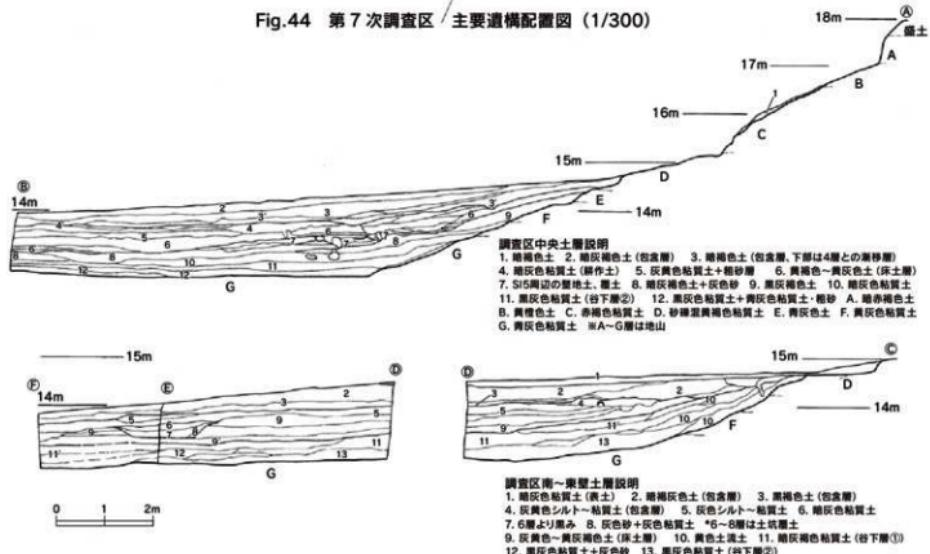


Fig.45 基本土層図 (1/100)

2) 古墳時代の遺構

古墳時代後期後半から末の遺構 (Fig.48・49) には竪穴建物や段造成等がある。遺構検出面は SH019 が地山であるが、他は谷第 2 面である。谷第 2 面は谷下層自然堆積層上面の薄い整地層 (IV B 層) である。谷下層は第 5 次調査地点と同様の堆積状況であるが、遺構はみられなかつた。深さ 2 m 以上の谷底面は調査区東部に位置しており、谷東側の立ち上がりを検出することはできなかつた。

① 竪穴建物 (SI)

調査区中央から西部の谷第 2 面で 4 棟以上を検出した。石組カマドを有するもの 1 棟、時期は古墳時代末、7 世紀初頭前後。SH019 も当該期の遺構であるが、段造成遺構として次の②で報告する。

SI5 (Fig.49・50) 調査区中央部に位置する。Fig.49 上の 17・19 層がその基盤層であるが、谷下層上面の整地層である。遺構南西 (山側) に溝 SD010 があり、遺構北部に石組カマドの SL011 がある。谷中央のトレンチ掘削過程で SL11 の西端部を検出して建物の存在に気付いたものである。

SD010 は幅 60cm 前後の弧状溝であり、建物外周溝又は段造成の後背溝である可能性が高い。内部の建物は、平安時代以降の床土層直下での検出であったため、床面以下まで削平が及んでおり、プランが明確でない。SL11 が北西壁に接しており、円形土器が出土した SP013 付近までが建物の範囲内であれば、一辺 4 m 前後の建物とみることができる。その場合、カマド SL11 は壁の中央でなく、南 (山側) 寄りの配置であったと考えられる。SP013 等の柱穴を検出しているが、主柱穴ではない。

SL011 は石列をカマドの袖とする石組カマドである。袖の長さは 1 m 以上、幅 25cm 前後を測る。南側の袖構築材は縦位の礫を 6 個並べたもので、高さ 33cm 以上である。北側の袖構築材には礫を 5 個以上並べているが、長さ 55cm、幅 35cm の板石 1 個以外は小ぶりの礫である。東端の礫は内側から上面が被熱により赤変、黒変している。天井にも礫が使用された可能性があるが消失している。石列の高さが不揃いであり、カマド構築材には土も使われていたとみられるが、白色・黄色粘土等はみられなかつた。カマド焼成部の焼土面は上下 2 面ある。下層の古い面は東の焚口寄りで、東西 35cm、南北 20cm を測り、石組基底部付近のレベルである。上層の新しい面は東西 72cm、南北 50cm で、下層の面より 10cm 以上高い。カマドの焚口付近は土坑状に掘り込まれている (SK012)。東西長 145cm、南北幅 70cm 前後、深さ 11cm を測る。上面からは土師器の瓶等がまとまって出土している。レベルは SK012 の底面がカマド下層の焼土面と対応し、上面の土器群がカマド上層の焼土面と対応している。出土土器より遺構の時期は古墳時代末、7 世紀初頭～前半である。

SI6 (Fig.51) SI5 の北側に位置する竪穴状遺構である。南北 2.2 m、東西 1.2 m 以上、深さ 8cm 前後を測る。東 (谷側) は遺構の範囲が明確ではない。床面よりやや浮いて土師器円形土器や須恵器杯などが出土している。時期は古墳時代末、7 世紀初頭前後である。

SI7・8 (Fig.48・49・51) 調査区北部に位置する重複する 2 棟の竪穴建物である。東側の SI8 が古く、SI7 が新しい。

SI 7 は南北 3.1 m 以上、東西 3m 以上、床面までの深さ 20cm 前後を測る。北側は調査区外であり、東側は遺構の範囲が明確でない。Fig.48 中の 6～12 層が SI7 の覆土や貼床層等である。床は建物西部が地山、東部が貼床の 12 層 (上面は削平を受けている) であり、SI8 の覆土 (13 層) よりも上層となっている。建物南辺には幅 45cm、深さ 3cm 前後の壁溝がある。床面上には 4 ヶ所以上の焼土面があり、その南側には台石が据えられた浅いピットがある。焼土面のうち調査区北壁際で検出したものは、深さ 5 cm の土坑底面や壁面が被熱により硬化したものである。加熱をともなう作業場の建物とみられるが、付近から鉄滓等の出土はなく、その内容は不明である。出土土器より遺構の時期は古墳時代末の 7 世紀初頭から前半とみられる。

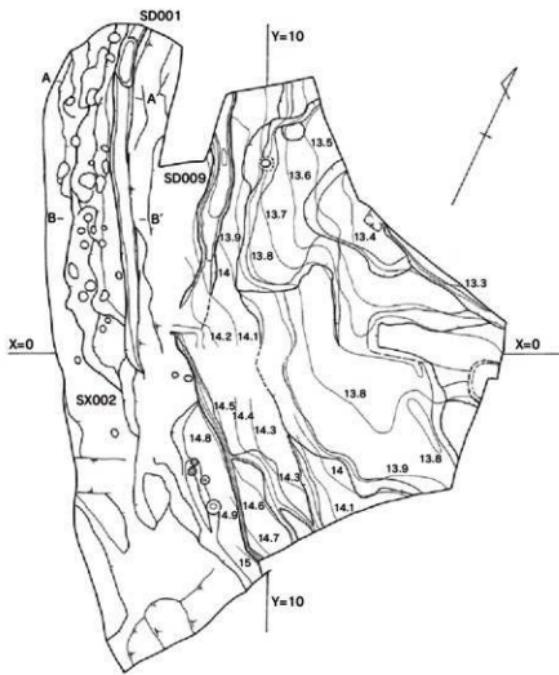


Fig.46 第1面造構配置図 (1/200)

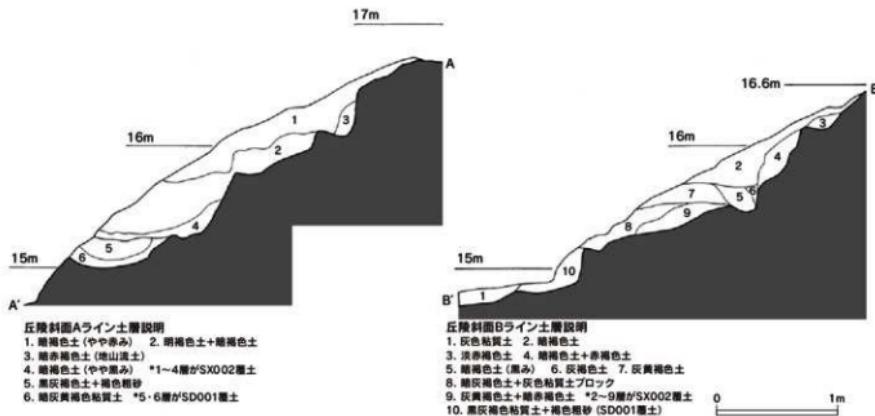


Fig.47 丘陵斜面土層断面図 (1/40)

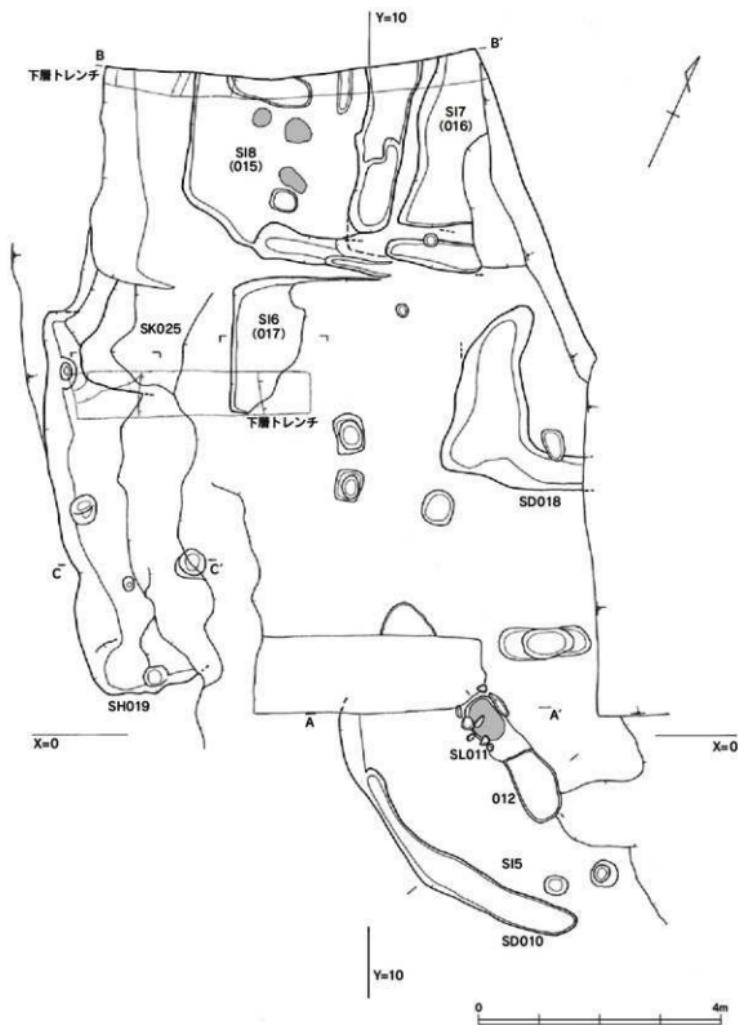
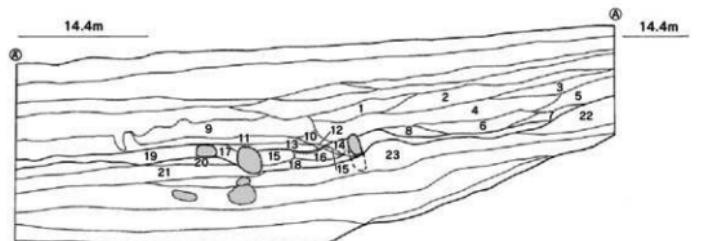
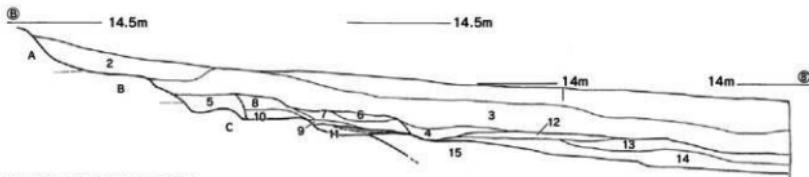


Fig.48 谷第2面遺構配置図 (1/80)



S16周辺(Aライン西部) 土層説明

1. 噴灰黃色土+黒褐色土
2. 黒褐黃色土
3. 噴褐灰色土
4. 噴褐反色土
5. 噴黃反褐色土
6. 噴黃褐色土
- 7・8. 黃褐色土
9. 噴反黃色土
- 10・13. 黃灰色土
11. 黃褐色土
12. 焼土ブロック
- *1~12層は平安時代以降の土壌(土床層)
14. 焼土ブロック
- 15~17. 黃褐色土+灰色土
18. 灰色土主体(炭多)
19. 黃褐色土+灰色土
- *14~16・18層はS1601層土
20. 黃褐色土
21. 噴褐褐色土+灰色砂
22. 噴褐褐色土
23. 噴灰褐色土
- *20~23層は谷下層堆積



S16・9(調査区北壁下部) 土層説明

1. 噴褐色土(古糞堆-水田耕作土)
2. 噴褐色土+橙色土
3. 黃褐色土(平安時代以降土床)
4. 噴反黃褐色土+噴褐色土
5. 黃褐色土+褐青色土
6. 灰色土+燒土ブロック
7. 噴灰色土(炭・骨土窓)
8. 噴灰色土(燒土ブロック窓)
9. 噴褐褐色土
10. 黃反褐色土
11. 黃反褐色土(上面被熱赤変)
12. 黃色土+灰褐色土
- *11~12層がS19の貼床層
13. 噴褐灰色土(S16層土)
14. 黃色土主体(S16の基盤層)
15. 噴褐灰色土主体(谷下層堆積)

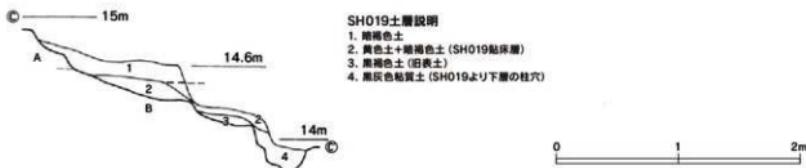


Fig.49 住居址、段造成周辺の土層断面図 (1/40)

SI 8は14層を基盤とする。南北3.5m以上、東西2.2m以上、深さ10cm前後を測る。西辺と南辺に深さ5cm程度の壁溝がある。出土土器より古墳時代末とみられる。

②段造成 (SH)

SH019 (Fig.48・49) 調査区西部の谷西肩に位置する。地山面で検出した。南北長6.4m、東西幅2m以上、床面までの深さ40cm前後を測る。北部はSK025に切られる。Fig.49下の2層が貼床層とみられるが、遺構東部は床下まで削平されている。貼床層の下層(地山面)で柱穴を検出したが、先行する遺構と考えられる。出土土器より遺構の時期は古墳時代末と考えられる。

③土坑 (SK)

SK025 (Fig.51) 調査区の西部、SH019を切る。南北2.6m、東西1.4m、深さ30cm以上を測る。遺構の東部は消失している。上層より須恵器壺や平瓶が出土しており、古墳時代末の遺構と考えられる。

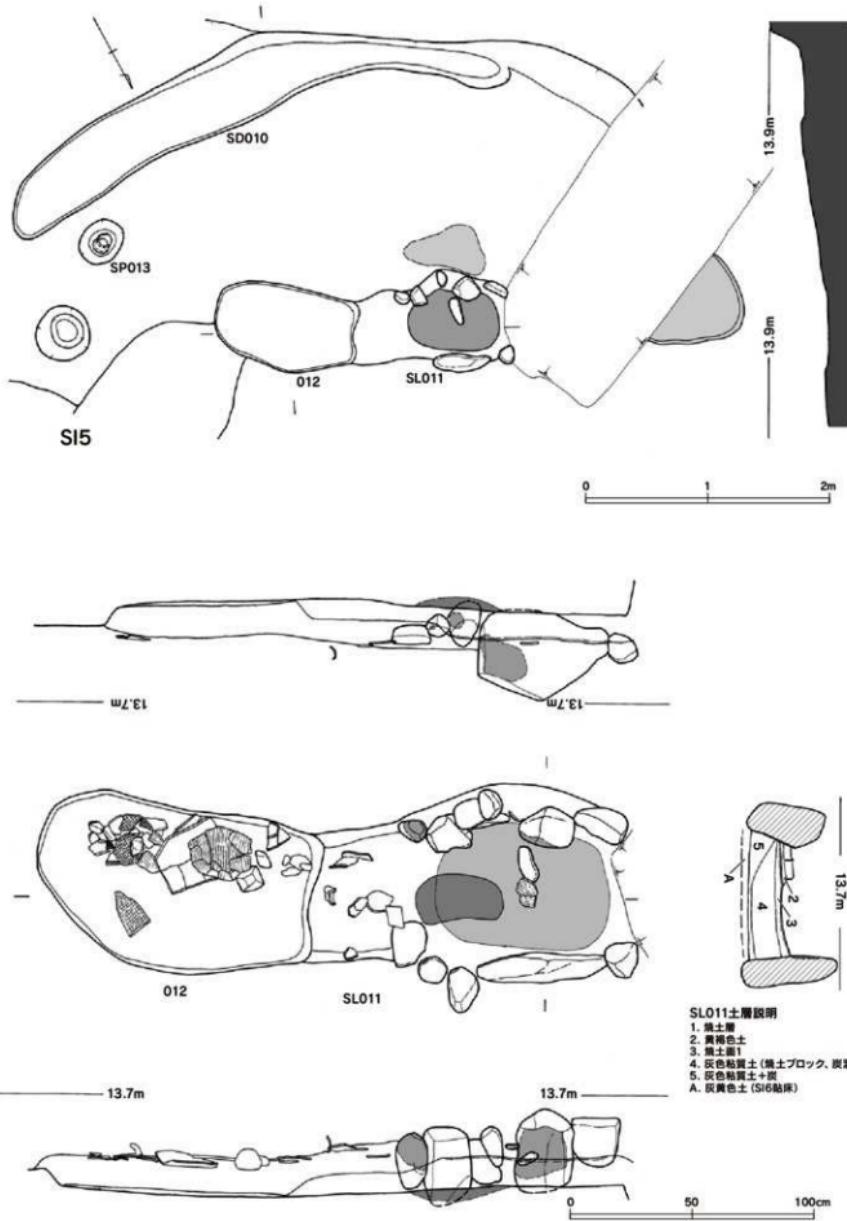


Fig.50 住居址 SI5、窯 SL011 実測図 (1/40、1/20)

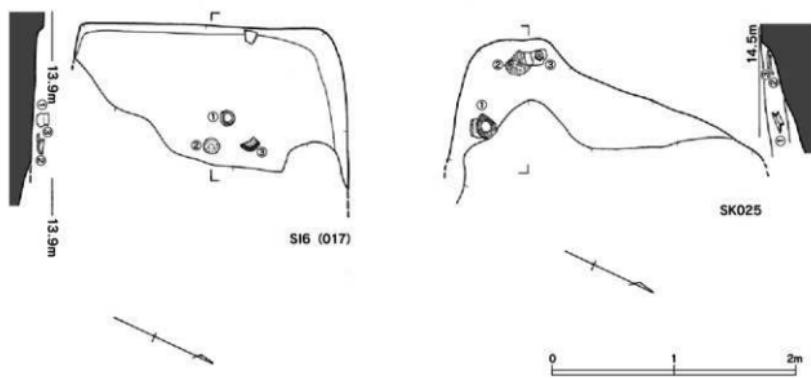
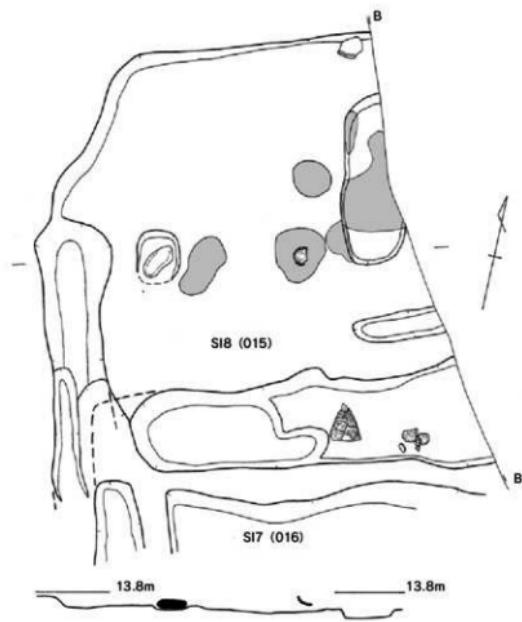


Fig.51 住居址 SI6・8、SK025 実測図 (1/40)



1. 第1面全景（北上空から）



2. 第1面全景（北から）



1. 第2面全景 (北上空から)



2. 第2面全景 (北から)



1. 調査区南壁土層断面 (北から)



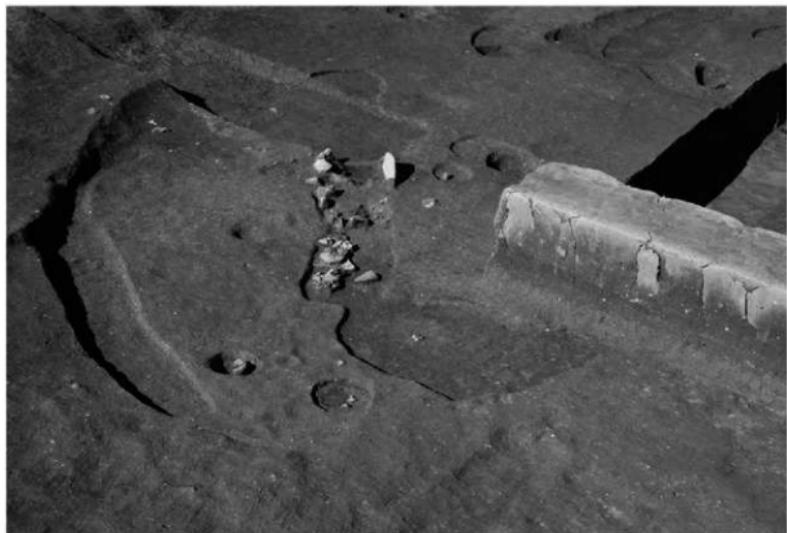
2. 調査区東壁土層断面 (西から)



1. 調査区中央 谷下層の土層断面 (東から)



2. 調査区北壁土層断面 (南から)



1. SI5 (南から)



2. SL010 (南から)



1. SI6~8、SH019周辺 (東から)



2. SI7・8 (東から)

報告書抄録

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1189集

徳永A遺跡5

—第5次・6次・7次調査の報告（1）—

2013年（平成25年）3月22日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 大成印刷株式会社